

星座

有島武郎

青空文庫

その日も、明けがたまでは雨になるらしく見えた空が、爽やかな秋の朝の光となっていた。

咳の出ない時は仰向けに寝ているのがよかった。そうしたままで清逸は首だけを腰高窓の方に少しふり向けてみた。夜のひきあけに、いつものとおり咳がたてこんで出たので、眠られぬままに厠に立った。その帰りに空模様を見ようとして、一枚繰った戸がそのままになっているので、三尺ほどの幅だけ障子が黄色く光っていた。それが部屋をよけい小暗く感じさせた。

隣りの部屋は戸を開け放って戸外のように明るいのだろう。そうでなければ柿江も西山もあんな騒々しい声を立てるはずがない。早起きの西山は朝寝の柿江をとうとう起してしまつたらしい。二人は慌てて学校に出る支度をしているらしいのに、口だけは悠々とゆるべの議論の続きらしいことを饒舌っている。やがて、

「おい、そのばか馬をこつちに投げてくれ」

という西山の声がことさら際立つて聞こえてきた。清逸の心はかすかに微笑んだ。

ゆるべ、柿江のはいているほろ袴に眼をつけて、袴ほど今の世に無意味なものはない。

袴をはいていると白痴はぐちの馬に乗っているのと同じで、腰から下は自分のものではないような気がする。袴ではないばかりか馬だと西山がいったのを、清逸は思いだしたのだ。

隣のドアがけたたましく開いたと思うと清逸のドアがノックされた。

「星野、今日はどうか。まだ起きられんのか」

そう廊下から不必要に大きな声を立てたのは西山だった。清逸は聞こえる聞こえないもかまわずに、障子を見守ったまま「うん」と答えただけだった。朝から熱があるらしい、気分はどうしても引き立たなかつた。その上清逸にはよく考えてみねばならぬことが多かつた。

けれども西山たちの足音が玄関の方に遠ざかろうとすると、清逸は浅い物足らなさを覚えた。それは清逸には奇怪にさえ思われることだった。で、自分を強しいるようにその物足らない気分を打ち消すために、先ほどから明るい障子に羽根を休めている蠅はえに強く視線を集めようとした。その瞬間にしかし清逸は西山を呼びとめなければならない用事を思いついた。それは西山を呼びとめなければならぬほどの用事であつたのだらうか。とにかく清逸は大きな声で西山を呼んでしまった。彼は自分の喉のどから老人のようにしわがれた虚うつろな声の放たれるのを苦にが々にがしく聞いた。

「さあ園の奴まだいたかな」

そう西山は大きな声で独語しながら、けたたましい音をたてて階子段を昇るけはいがしたが、またころがり落ちるように二階から降りてきた。

「星野、園はいたからそういつておいたぞ」

その声は玄関の方から叫ばれた。傍若無人ぼうじやくぶじんに何か柿江と笑い合う声がしたと思うと、野心家西山と空想家柿江とはもつれあつてもう往来に出ているらしかった。

清逸の心はこのささやかな攪拌かくはんの後に元どおり沈んでいった。一度聞耳を立てるために天井てんじょうに向けた顔をまた障子の方に向けなおした。

十月の始めだ。けれども札幌では十分朝寒といつていい時節になった。清逸は綿の重い掛蒲団を頸の所にたくし上げて、軽い咳せきを二つ三つした。冷えきった空気が障子の所で少し暖まるのだろう、かの一匹の蠅はそこで静かに動いていた。黄色く光る障子を背景にして、黒子ほくろのように黒く点ぜられたその蠅は、六本の脚の微細な動きかたまでも清逸の眼に射しこんだ。一番前の両脚と、一番後ろの両脚とをかたみかわりに拝むようにすり合せて、それで頭を撫なでたり、羽根をつくろつたりする動作を根気よく続けては、何んの必要があつてか、素早くその位置を二三寸ずつ上の方に移した。乾いたかすかな音が、そのたびご

とに清逸の耳をかすめて、蠅の元いた位置に真白く光る像が残った。それが不思議にも清逸の注意を牽ひきつけたのだ。戸外では生活の営おもてみがいろいろな物音を立てているのに、清逸の部屋の中は秋らしくもの静かだった。清逸は自分の心の澄むのを部屋の空気に感ずるように思った。

やはりおぬいさんは園に頼むが一番いい。柿江はだめだ。西山でも悪くはないが、あのがさつさはおぬいさんにはふさわしくない。そればかりでなく西山は剽ひょうきん 軽ななように油断のならないところがある。あの男はこうと思ひこむと事情も顧みないで実行に移る質たちだ。人からは放漫と思われながら、いざとなると大搦みながらに急所を押えることを知っている。おぬいさんにどんな心を動かしていくかもしれない。……

蠅が素早く居所をかえた。

俺はおぬいさんを要するわけではない。おぬいさんはたびたび俺に眼を与えた。おぬいさんは異性に眼を与えることなどは知らない。それだから平気でたびたび俺に眼を与えたのだ。おぬいさんの眼は、俺を見る時、少し上気した皮膚の中から大きくつやつやく輝いて、ある差はにかみを感じながらも俺から離れようとはしない。心の底からの信頼を信じてくださいとその眼は言っている。眼はおぬいさんを裏切っている。おぬいさんは何にも知ら

ないのだ。

蠅がまた動いた。軽い音……

おぬいさんのその眼のいうところを心に気づかせるのは俺にとつては何んでもないことだ。それは今までも俺にはかなりの誘惑だった。……

清逸はそこまで考えてくると眼の前には障子も蠅もなくなっていた。彼の空想の魔杖の一振りに、真白な百合ゆりのような大きな花がみるみる蕾つぼみの弱々しさから日輪のようにかがやかしく開いた。清逸は香りの高い蕊しべの中に顔を埋めてみた。蒸すむような、焼くような、攪くすくるような、悲しくさせるようなその香り、……その花から、まだ誰も嗅かがなかつた高い香り……清逸はしばらく自分をその空想に溺おぼれさせていたが、心臓の鼓動の高まるのを感じずるやいなや、振り捨てるように空想の花からその眼を遠ざけた。

その時蠅は右の方に位置を移した。

清逸の心にある未練を残しつつその万花鏡まんげきようのような花は跡形もなく消え失うせた。

園ならばいい。あの純粋な園にならおぬいさんが与えられても俺には不届はない。あの二人が恋し合うのは見えていても美しいだろう。二人の心が両方から自然に開けていって、ついに驚きながら喜びながら互に抱き合うのはありそうなことであって、そしていいこと

だ。俺はとにかく誘惑を避けよう。俺はどれほど蠱惑的でもそんなところにまごついてはられない。しかも今のところおぬいさんは処女の美しい純潔さで俺の心を牽きつけるだけで、これはいつかは破れなければならぬものだ。しかしそれは誘惑には違いないが、それだけの好奇心でおぬいさんの心を俺の方に眼ざめさすのは残酷だ。……

清逸はくだらないことをくよくよ考えたと思った。そして前どおりに障子にとまっている一匹の蠅にすべての注意を向けようとした。

しかも園が……清逸が十二分の自信をもって掴みうべき機会を……今までの無興味な学校の課業と、暗い淋しい心の苦悶の中に、ただ一つ清浄無垢な光を投げっていた処女を根こそぎ取って園に与えるということは……清逸は何んといっても微かな未練を感じた。そして未練というものは微かであつても堪えがたいほどに苦い……。清逸はふとこの間読み終つたレ・ミゼラブルを思いだしていた。老いたジャン・ワルジャンが、コーセットをマリヤスに与えた時の心持を。

階子段を規律正しく静かに降りてくる足音がして、やがてドアが軽くたたかれた。

その瞬間清逸は深く自分を恥じた。それまで彼を困らしていた未練は影を隠していた。顔は十七八にしか見えないほど若く、それほど規則正しい若さの整いを持っているが、

二十二になつたばかりだと思えないくらい落ちつきの備わつた園の小さな姿が、清逸の寝床近くきちんと坐つたらしかつた。

清逸は園が側近く来たのを知ると、なぜともなく心の中が暖まるのを覚えて、今までの物臭さに似ず、急いで窓から戸口の方に寝返つた。が、それまで眩まぼゆい日の光に慣れていた眼は、そこに瞳を痛くする暗闇を見出だすばかりだつた。その暗闇のある一点に、見つけていた蠅が小さく金剛石のように光つていた。

「学校は休んだの」

眼をつぶりながら、それと思わしい方に顔を向けて清逸はいつてみた。

「一時間目は吉田さんだから……僕に用というのは何？」

低いけれど澄んだ声、それは園のものだ。

「そうか。吉田のペンタゴンか。カルキュラスもあんないい加減ですまされては困るな。高等数学はしつかり解つておく必要があるんだが……」

清逸は当面の用事をそつちのけにしてこんなことをいった。そんなことを言いながら、吉田教授をペンタゴンという異名で呼んだのが園に対して気がひけた。吉田というのは、まだ若くつて頭のいい人だったが、北海道というような処ふにんに赴任させられたのが不満であ

るらしく、ややともすると肝心な授業を捨てておいて、旧藩主の奥御殿に起つたという怪談めいた話などをして、学生を笑わせている人だった。そうした人に対しても、園は異名を用いて噂うわさすることなどは絶えてしなかつた。

「ほんとに困る。しかしどうせ何んでも自分でやらないじやならない学校だからかまわな
いといえばかまわないことだが……今日は少しはいいの」

澄んで底力のある声が、清逸の眼にだんだん明瞭な姿を取ってゆく園の方から静かに響いた。健康を尋ねたずられると清逸はいつでも不思議にいらだった。それに答える代りに、何んとなくいい洩はつていた肝心の用事を切りだすほかはなくなくなった。清逸は首をもたげ加減にして、机の方に眼をやった。そしてその引き出しの中にある手紙を出してくれと頼んでしまった。

園はすぐ机の方に手を延ばして、引き出しを開けにかかった。その時清逸は、自分の瞳が光つて、園の方にある鋭い注意を投げているのを気づかずにはいられなかつた。園が手紙を取り出した時、星野とだけ書いてある封筒の裏が上になつていたので、名宛人が誰であるかはもとより判りようはずがないのに、園の顔にはふとある混乱が浮んだようにも思え、少しもそんなことがないようにも清逸には思えた。清逸はまたかかることに注意する

自分を臍^{ふが}甲^{がい}斐^いなく思つた。そして思わずいらいらした。

「僕はたぶん明日親父^{おやじ}に会いに千歳^{ちとせ}まで帰つてくる。都合ではむこうの滞在が少し長びくかもしれない。できるなら僕は秋のうちに……冬にならないうちに東京に出たいと思つてゐるんだがね。そんなことは貧乏な親父に相談してみたところで埒^{らち}は明くまいけれども、順序だから話だけはしてみるつもりなのだ。……でその手紙をおぬいさんとどけてくれないか。僕は熱があるようだから行かれないと思うから……おぬいさんが聞いたら千歳の番地を知らせてやつてくれたまえ、……聞かなかつたらこつちからいうには及ばないぜ……それからね、手紙にも書いておいたが、僕の留守の間、おぬいさんの英語を君に見てもらうわけにはいかないかね」

いらいらしさにまかせて、清逸はこれだけのことを畳^{たた}みかけるようにいつて退^のけた。すべてを清逸は今まで園にさえ打ち明けないでいたのだった。清逸にとってはこれだけの言葉の中に自分を苦しめたり鞭^{むちう}つたりする多くのものが潜^{ひそ}んでゐるのだ。

清逸は何んということなく園から眼を放して仰向けに天井を見た。白い安西洋紙で張りつめた天井には鼠の尿でもあるのか、雲形の汚^{しみ}染^みがところどころにできてゐる。象の形、スキャンディナヴィヤ半島のようにも、背中合せの二匹の犬のようにも見える形、腕のつけ

根に起き上り小法師の喰いついた形、醜い女の顔の形……見なれきつたそれらの奇怪な形を清逸は順々に眺めはじめた。

さすがの園もいろいろな意味で少し驚いたらしかつた。最後の瞬間までどんなことでも胸一つに納めておいて、切りだしたら最後貫徹しないではおかない清逸の平生を知らない園ではないはずだ。だがあの健康で明日突然千歳に帰るということも、おぬいさんに英語を教えろということも、すべてがあまりに突然に思えたらしかつた。清逸が、象の形、スカンディナヴィヤ半島のようにも、背中合せの二匹の犬のようにも見える形、腕のつけ根に起き上り小法師の喰いついた形から醜い女の顔の形へ視線を移したころ、

「では君もいよいよ東京に行くの」

と園が言った。そしておぬいさんの手紙を素直に洋服の内衣囊かぶにしまいこんだ。

園はおぬいさんに牽ひきつけられている、おぬいさんについては一言もいわないではないか。……清逸はすぐそう思った。それともおぬいさんにはまったく無頓着むとんちやくなのか。とにかくその人の名を園の口から聞かなかつたのは……それはやはり物足らなかつた。園の感情がいくらかでも動くのを清逸は感じたかつたのだ。

「西山君も行くようなことをいつていたが……」

園は間をおいてむりにつけ足すようにこれだけのことをいった。

西山がそんなたくらみをしているとは清逸の知らないことだった。清逸は心の奥底ではつと思つた。自分の思い立つたことを西山づれに魁けされるのは、清逸の気性として出抜かれたというかすかな不愉快を感じさせられた。

「もつとも西山君のことだから、言いたい放題をいつているかもしれないが……」

清逸の心の裏をかくとでもいうような言葉がしばらくしてからまた園の唇を漏れた。清逸はかすかに苦しい顔をせずにはいられなかつた。

二時間目の授業が始まるからといって園が座を立つたあと、清逸は溜息ためいきをしたような衝動を感じた。それが悪るかつた。自然に溜息が出たあとに味われるあの特殊な淋しいくつろぎは感ずることができなかつた。園が出ていった戸口の方にも憂い視線を送りながら、このただ広い汚ない家の中には自分一人だけが残っているのだなとつくづく思った。ふと身体じゆうを内部から軽く蒸すような熱感が萌きんしてきた。この熱感はいつでも清逸に自分の肉体が病菌によつて蝕むしばまれていきつつあるということを思い知らせた。喀血かっけつの前にはきつとこの感じが先駆のようにやってくるのだった。

清逸はわざと没義道もぎどうに身体を窓の方に激しく振り向けてみた。窓の障子はだいぶ高くな

った日の光で前よりもさらに黄色く輝いていた。

しかしどこに行つたのか、かの一匹の蠅はもうそこにはいなかった。

* * *

“Magna est veritas, et praevalabit.”

それが銘めいだった。園はその夜拉ラテン典語の字書をひいてはつきりと意味を知ることができた。いい言葉だと思つた。

段と段との隔たりが大きくておまけに狭く、手欄てすりもない階子段を、手さぐりの指先には細かい塵を感じながら、折れ曲り折り曲りして昇るのだ。長い四角形の筒のような壁には窓一つなかった。その暗闇の中を園は昇っていった。何んの気だか自分にもよくは解らなかつた。左手には小さなシラーの詩集を持って。頂上には、おもに堅い木で作つた大きな齒は車ぐるまや槓てこ杆の簡単な機械が、どろどろに埃ほこりと油とで黒くなって、砂を刻みながら動いていた。四角な箱のような機械室の四つ角にかけわたした梁の上によつと腰をかけて、おずおず手を延ばして小窓を開いた。その小窓は外から見上げると指針盤ししんばんの針座のすぐ右手に取りつけられてあるのを園は見ておいたのだ。窓はやすやすと開いた。それは西向きのだつた。そこからの眺めは思ひのほか高い所にあるのを思わせた。じき下には、地方裁判所

の樺^{かばいろ}色の瓦屋根があつて、その先には道庁の赤煉瓦、その赤煉瓦を囲んで若芽をふいたばかりのポプラが土筆草^{つくし}のように叢^{むら}がつて細長く立っていた。それらの上には春の天空。光と軟かい空気とが小さな窓から犇^{ひし}めいて流れこんだ。

機械室から ^{グランド・セラ}暗 窖 のように暗みわたった下の方へ向けて、太い二本の麻縄が垂れ

下り、その一本は下の方に、一本は上の方に静かに動いていた。縄の末端に結びつけられた重錘^{おもり}の重さの相違で縄は動くのだ。縄が動くにつれて歯車はきりきりと低い音を立てて廻る。

左の足先は階子の一番上のおどり段に頼んだが、右の足は宙に浮かしているよりしようがなかった。その不安定な坐り心地の中で詩集が開かれた。「鐘の賦」という長い詩のその冒頭に掲げられた有名な鐘^{しょうめい}銘に眼がとまると、園はこの時計台の鐘の銘をも知りたいと思つた。ふと見ると高さ二尺ほどの鐘はすぐ眼の先に塵まぶれになつて下つていた。『Magna est veritas, et praevalabit.』……園にはどうしても最後の字の意味が考えられなかつた。写真で見る米国の自由の鐘のように下の方でなぞえに裾を拵^{こしら}へてある。その拵^{こしら}がり方といい勾配^{こうばい}の曲線の具合といい、並々の匠人の手で鑄られたものでないことをその鐘は語つていた。

農学校の演武場の一角にこの時計台が造られてから、誰と誰とが危険と塵とを厭わないでここまで昇る好奇心を起したことだろう。修繕師のほかには一人もなかったかもしれない。そして何年前に最後の修繕師がここに昇ったのだろう。

札幌に来てから園の心を牽ひきつけるものとはそうたくさんはなかった。ただこの鐘の音には心から牽ひきつけられた。寺に生れて寺に育ったせいなのか、梵ぼん鐘しょうの音を園は好んで聞いた。上野と浅草と芝との鐘の中で、増上寺の鐘を一番心に沁みる音だと思ったり、自分の寺の鐘を撞つきながら、鳴り始めてから鳴り終るまでの微細な音の変化にも耳を傾なけていた。鐘に慣れたその耳にも、演武場の鐘の音は美しいものだった。

ことに冬、真昼間でも夕暮れのように天地が暗らみわたって、吹きまく吹雪のほかには何の物音もしないような時、風に揉もみちぎられながら澄みきって響いてくるその音を聞くと、園の心は涼しくひき締しめた。そして熱いものを眼の中に感ずることさえあった。

夢中になってシラーの詩に読み耽ふけっていた園は、思いもよらぬ不安に襲われて詩集から眼を放して機械を見つめた。今まで安らかに単調に秒を刻んでいた歯車は、きゆうに氣息いき苦しうにきしみ始めていた。と思う間もなく突然暗い物隅から細長い鉄製の棒が走りでて、眼の前の鐘を発は射しと打った。狭い機械室の中は響だけになった。園の身体は強い

細かい空氣の震動で四方から押さえつけられた。また打つ……また打つ……ちようど十一。十一を打ちきるとあとにはまた齒車のきしむ音がしばらく続いて、それから元どおりな規則正しい音に還つた。

あまりの嚴肅さに園はしばらく茫然としていた。明治三十三年五月四日の午前十一時、——その時間は永劫の前にもなければ永劫の後にもない——が現われながら消えていく……園は時間というものをこれほどまじまじと見つめたことはなかった。

心から後悔して園は詩集を伏せてしまった。この学校に学ぶようになってからも、園には別れがたい文学への憧憬があつた。捨てよう捨てようと思ひながら、今までざるずるとそれに引きずられていた。一事に没頭しきらなければすまない。一人の科学者に詩の要はない。科学を詩としよう。歌としよう。園は読みなれた詩集を燔牲のごとくに機械室の梁の上に残したまま、足場の悪い階子段を静かに下りた。

≪Magna est veritas, et praevalabit.≫

その夜彼はこの鐘銘の意味をはつきり知つた。いい言葉だと思つた。「真理は大能なり、真理は支配せん」と訳してみた。一人の科学者にとつてはこれ以上に尊い箴言はない。そして科学者として立とうとしている以上、今後は文学などに未練を繋ぐ姑息を自分に許

すまいと決心したのだった。

* * *

札幌に来る時、母が饑せんべつ別にくれた小形の銀時計を出してみると四時半近くになっていた。その時計はよく狂うので、あまりあてにはならなかったけれど、反射鏡をいかに調節してみても、クロモゾームの配列の具合がすっかりとは見極められないので、およその時間はわかった。園は未練を残しながら顕微鏡の上にベル・グラスを被せた。いつの間にか助手も学生も研究室にはいなかった。夕闇が処がまだらに部屋の中には漂っていた。

三年近く被り慣れた大黒帽を被り、少しだぶだぶな焦茶色の出来合いが外套がを着こむともうすることはなかった。廊下に出ると動物学の方の野村教授が、外套の衣かくし囊の辺で癖のように両手を拭きながら自分の研究室から出てくるのに遇あった。教授は不似合な山高帽子を丁てい寧ねいに取って、煤すすけきつたような鈍重な眼を強度の近眼鏡の後ろから覗かせながら、含は羞にかむように、

「ライプチツヒから本が少しとどきましたから何んなら見にいらいっしやい」

と挨拶して、指の股を思い存分はだけた両手で外套をこすり続けながら忙しそうに行ってしまった。何んのこだわりもなく研究に没頭しきっているような後姿を見送りながら、

園は何んとなく恥を覚えた。それは教授に向けられたのか、自分に向けられたのか、はっきりしないような曖昧なものであったが。

時計台のちょうど下にあたる処にしつらえられた玄関を出た。その石畳は一つ一つが踏みへらされて古い砥石のように彎曲していた。時計のすぐ下には東北御巡遊の節、岩倉具視が書いたという木の額が古ぼけたままかかっているのだ。「演武場」と書いてある。

芝生代りに校庭に植えられた牧草は、三番刈りの前でかなりの丈けにはなっているが、一番刈りのはちがつて、茎が細々と痩せて、おりからのささやかな風にも揉まれるように靡いていた。そして空はまた雨にならんばかりに曇っていた。何んとなく荒涼とした感じが、もう北国の自然には逼ってきていた。

園の手は自分でも気づかないうちに、外套と制服の釦をはずして、內衣囊の中の星野から託された手紙に触れていた。表に「三隅ぬい様」、裏に「星野」とばかり書いてあるその封筒は、滑らかな西洋紙の触覚を手に伝えて、膚ぬくみになっていた。園は淋しく思った。そして気がついてゆるみかかった歩度を早めた。

碁盤のように規則正しい広やかな札幌の往來を南に向いて歩いていった。ひとしきり明

るかつた夕方の光は、早くも藻巖山もいわやまの黒い姿に吸いこまれて、少し靄もやがかつた空気は夕べを催すと吹いてくる微風に心持ち動くだけだった。店々にはすでに黄色く灯がともっていた。灯がともつたその低い家並で挟まれた町筋を、仕事をなし終えたと思しい人々がかなり繁しげく往来していた。道庁から退けてきた人、郵便局、裁判所を出た人、そう思わしい人人が弁当の包みを小脇に抱えて、園とすれちがったり、園に追いかされたりした。製麻会社、麦酒会社ビールからの帰りらしい職工の群れもいた。園はそれらの人の間を肩を張って歩くことができなかつた。だから伏眼がちにますます急いだ。

大通りまで出ると、園は始めて研究室の空気が解放されたような気持ちになった。そして自分が憚はばからねばならぬような人たちから遠ざかつたような心安さで、一町にあまる広々とした防火道路を見渡した。いつでも見落すことのできないのは、北二条と大通りとの交叉点こうさてんにただ一本立つエルムの大樹だった。その夕方も園は大通りに出るとすぐ東の方に眼を転じた。エルムは立っていた。独り、静かに、大きく、寂しく……大密林だった札幌原野の昔を語り伝えようとするものごとく、黄ばんだ葉に鬱うっそう蒼そうと飾られて……園はこの樹を望みみると、それが経てきた年月の長さを思った。その年月の長さがひとりでにその樹に与えた威厳を思った。人間の歴史などからは受けることのできない底深い悲壮な

感じに打たれた。感激した時の癖として、園はその樹を見るごとに、右手を鍵形に折り曲げて頭の上にさしかぎし、二度三度物を打つように烈しく振り卸るすのだった。

その夕方も園は右手を振ろうとする衝動をどこかに感じたけれども、何かまたはばむものがあつてそれをさせなかつた。衝動はいたずらに内ない証こうするばかりだった、彼は急いだ、大通りを南へと。

三隅の家の軒先で、園はもう一度衣か囊くしの手紙に手をやった。釦ボタンをきちんとかけた。そして拭掃除の行き届いた硝子張りの格子戸を開けて、黙つたまま三和土たの上に立つた。

待ち設もうけたよりもつと早く——園は少し恥ちらいながら三和土の片隅に脱ぎ捨ててある紅緒べにおの草履ぞうりから素早く眼を転ぜねばならなかつた——しめやかながらいそいそ近づくと足どりが入口の障子を隔てた畳の上に聞こえて、やがて障子が開いた。おぬいさんがつき膝をして、少し上眼をつかつて、にこやかに客を見上げた。つつましく左手を畳についた。その手の指先がしなやかに反つて珊瑚色さんごに充血していた。

意外なというごくごくささやかな眼だけの表情、かならずであるべきはずのその人ではなかつたという表情、それが現われたと思うとすぐ消えた。園はともかくにもおぬいさんに微かながらも失望を感じさせたなど思つた。それはまた当然なことではな

らない。園を星野以上に喜んで迎えるわけがおぬいさんにはあるはずがない。おまけにその日は星野が英語を教えに来べき日なのだ。

「まあ……どうぞ」

といっておぬいさんは障子の後に身を開いた。園に対しても十分の親しみを持つているのを、その言葉や動作は少しの誇張も飾りもなく示していた。……園は上りかまち框に腰をかけた、形の崩れた編上靴を脱ぎはじめた。

いつ来てみても園はこの家に女というものばかりを感じた。園の訪れる家庭という家庭にはもちろん女がいた。しかしそこには同時に男もいるのだ。けれどもおぬいさんは産婆を職業としているその母と二人だけで暮しているのだから。

客間をも居間をも兼ねた八畳はだえんけい楕円形の感じを見る人に与えた。女の用心深さをもつてもうストーヴが据えつけてあった。そしてそれがえんぼく鉛墨でみごとに光っていた。柱のめぐり暦は十月五日を示して、余白には、その日の用事があかしん赤心の鉛筆で細かに記してあった。大きな字がお母さんで、小さな字がおぬいさんだということさえきちんと判っていた。部屋の中央にあるたものちやぶ台には読みさしの英語の本が開いたまま伏せてあったが、その表紙には反物のたとう紙で綿密に上表紙がかけてあった。男である園は、その部屋の

中では異邦人であることをいつでも感じないではいられなかった。

けれどもその感じは彼を不愉快にしないばかりでなく、反対に彼を慰めた。ただ若いおぬいさんが普通の処女であったなら、その処女と二人でさし向いに永く坐っているということは、園には自分の性癖から堪えがたいことだったろう。彼はどんなに無害なことでも心にもない口をきくことができなかつたから。また処女に特有な嬌羞はにかみというものをあたりさわりなく軟らげ崩して、安気な心持で彼と向い合うようにさせる術すべをまったく知らなかつたから。そして一般に日本の処女が持ち合っている話題は一つとして園の生活の圈内にはいつてくるような性質のものではなかつたから。童貞でありながら園は女性に対してむだなほにかみはしなかつた。しかし相手がほにかむ場合には園は黙って引きさがるほかはなかつた。

けれどもおぬいさんの処ではそんな心配は無用だったから園はなぐさめられたのだ。彼は持ちだされた座蒲団の処にいつて坐つた。おぬいさんは机の上の読みさしの本を慌てて押し隠すようなこともせず、静かにそれを取り上げて部屋の隅に片づけた。

「学校の方で星野さんにお会いになりました」

簡単な挨拶が終るとおぬいさんの尋ねた言葉はこれだった。園はまず星野のことが尋ね

られるのがことのほか快かった。その理由は自分にも解らなかつたけれども。

「星野君は今日も学校を休みました。この二三日また身体の具合がよくないそうで」

「まあ……」

おぬいさんの顔には痛ましいという表情が眼と眉との間にあからさまに現われて、染まりやすい頬がかすかに紅く染まった。園はそれをも快く思った。

「だから今日の英語は休みたいからといって、今朝白官舎を出る時この手紙を頼まれてきたんですが……」

そういいながら園は內衣かみそから星野の手紙を取りだした。取りだしてみると自分の膚の温ぬくみがそれに沁しみついていたのに気がついた。園はそのまま手紙をおぬいさんに渡すのを躊躇ちゆうちゆうした。そしてそれを手渡しする代りに、そつとちやぶ台の冷たい板の上においた。

何んの気なしに少しいそがしく手をさしだしたおぬいさんは、園の軽い心変りにちよつと度を失つてみえたが、さしだした手の向きをかえて机の上からすぐ手紙を拾い上げた。

すぐ拾い上げはしたが、自分の膚の温みはあの手紙からは消えているなど園は思った。園はそう思った。園は右手の食指に染みついているアニン染色素をじつと見やった。

おぬいさんは園のいる前で何んの躊躇もなく手紙の封を切った。封筒の片隅を指先で小

さくむしっておいて、結いたての日本髪（ごくありきたりの髷だったが、何という名だか園は知らなかった）の根にさした銀の平打の簪かんざしを抜いて、その脚でするすると一方を切り開いた。その物慣れた仕草しぐさから、星野からの手紙が何通もああして開かれたのだと園に思わせた。それもしかし彼にとつてゆめゆめ不快なことではなかった。

おぬいさんは立つてラムプに灯をともした。おぬいさんは生まれ代ったようになった：すべての点において。部屋の中も著いちじるしく変つた。おそらく夜の灯の下で変らないのはその場合園一人であつたに違いない。

藍がかつてさえ見える黒い瞳ひとみは素すばしこく上下に動いて行ぎやうから行へ移つてゆく。そしてその瞳の働きに応ずるように、「まあ」というかすかな驚きの声が唇の後ろで時々破裂した。半分ほど読み進んだころおぬいさんはしっかりと顔を持ち上げてその代りに胸を落した。

「星野さんは明日お家にお帰りなさるそうですね」

「そういつていました」

園もまともにおぬいさんを見やりながら。

「だいじょうぶでしようか」

「僕も心配に思っています」

この時園とおぬいさんとは生れて始めてのように深々と顔を見合わせた。二人は明かに一人の不幸な友の身の上を案じ合っているのを同情し合った。園はおぬいさんの顔に、そのほかのものを読むことができなかったが、おぬいさんには園がどう映つたろうか。と不埒にも園の心があらぬ方に動きかけた時は、おぬいさんの眼はふたたび手紙の方へ向けられていた。園はまた自分の指先についている赤い薬料に眼を落した。

おぬいさんがだんだん興奮してゆく。きわめて薄手な色白の皮膚が斑まだらに紅くなるのはある女性においては、きわめて醜みにくくそして淫みだらだ。しかしある女性においては、赤子のほかに見出されないような初ういうい々しさを染めだす。おぬいさんのそれはもとより後者だった。高低のある積雪の面に照り映えた夕照のように。

読み終ると、おぬいさんは折れていたところで手紙を前どおりに二つに折って、それを掌の間に挟んでしばらくの間膝の上に乗せて伏眼になっていたが、やがて封筒に添そえてそれを机の上に戻した。そして両手で火照ほてった顔をしっかりと押えた。互に寄せ合った肘ひじがその人の肩をこの上なく優しい向い合せの曲線にした。

園はおぬいさんのいうままに星野の手紙を読まねばならなかった。

「前略この手紙を園君に託してお届けいたし候連日の乾燥のあまりにや健康思わしからず一昨日は続けて喀血かっけついたし候ようの始末につき今日は英語の稽古休みにいたしたくあしからず御容赦ごようしやくださいさるべく候なお明日は健康のいかんを問わず兪足して帰省いたすべき用事これあり滞在日数のほども不定に候えば今後の稽古もいつにあいなるべきやこれまた不定と思召さるべく候ついでには後々の事園君に依頼しおき候えば同君につきせいぜい御勉強しかるべくと存じ候同君は御承知のとおり小生会心の一友年来起居をともしその性格学殖は貴女においても御知悉ごちしつのはず小生ごときひねくれ者の企図して及びえざるいくたの長所あれば貴女にとりても好箇の畏友いゆうたるべく候（この辺まで進んだ時、おぬいさんが眼を挙げて自分を見たのだと思ひながらなお読みつづけた）とかくは時勢転換の時節到来と存じ候男女を問わず青年輩の惰眠だみんを貪り雌伏しふくしおるべき時には候わず明治維新の気魄は元老とともに老い候えば新進気鋭の徒を待つて今後のことは甫はじめてなすべきものと信じ候小生ごときはすでに起たざるべからざるの齡よわいに達しながら碌々ろくろくとして何事をもなしえざること痛悔つうかいの至りに候ことに生来病弱事志こところさしと違い候は天の無為を罰してしかるものとみずから憫むあわれのほかこれなく候貴女はなお弱年ことに我国女子の境遇不幸を極めおり候えば因習上小生の所存御理解なりがたき節ふしもやと存じむし

ろ御同情を禁じがたく候えどもけつして女子の現状に屏息せず艱難して一路の光明を求め出でられ候よう祈りあげ候時下晩秋黃落しきりに候御自護あいなるべく御母堂にもくれぐれもよろしく御伝えくださるべく候

一八九九年十月四日夜

星野生

三隅ぬい様

どんな境遇をも凌ぎ凌いで進んでいこうとするような気稟、いくらか東洋風な志士らしい面影、おぬいさんをはるかの下に見おろして、しかも偽らない親切心で物をいう先生らしい態度が、蒼古とでも評したいほど枯れた文字の背ろに燃えていると園は思った。

同時に園の心はまた思いも寄らぬ方に動いていた。それはある発見らしくみえた。星野とおぬいさんとの間柄は園が考えていたようではないらしい。おぬいさんは平気で園の前でこの手紙を開封した。そしてその内容は今彼がみずから読んだとおりで。もし以前におぬいさんに送った星野の手紙がもつと違った内容を持つていたとすれば、おぬいさんがこの手紙を開封する時、ああまで園の存在に無頓着でいられるだろうか。

園はまたくだらぬことにこだわっていると思つたが、心の奥で、自分すら気づかぬよう

な心の奥で、ある喜びがかすかに動くのをどうすることもできなかった。それは何んという暖かい喜びだったろう。その喜びに対する微笑ほほえましい気持が顔へまで波及はきゆうするかと思われた。園は愚おろかなはにかみを覚えた。

園は自分の前にしとやかに坐っているおぬいさんに視線を移すのにまごついた。彼は自分がかつて持たなかった不思議な経験のために、今まで女性に対して示していた態度の劇げ変きへんしようとしているのを感じずにはいられなかった。少なくともおぬいさんという女性に対しては。

星野のおぬいさんに対する態度はお前が考えたようであるかもしれない。しかしながらおぬいさんの心が星野の方にどう動いているかをたしかに見窮めて知っているか……

園ははつと思つた。そしてふと動きかけた心の奥の喜びを心の奥に葬くわつてしまった。それはもとより淋しいことだった。しかしむずかしいことではないように園には思えた。それらのことは瞬またたきするほどの短かい間に、園の心の奥底に俄然として起り俄然として消えた電光のようなものだったから。そしておぬいさんがそれを気取けどろうはずはもとよりなかった。

けれどもそれまで何んのこだわりもなく続いてきた二人の会話は、妙にぽつんと切れて

しまった。園は部屋の中がきゆうに明るくなったように思った、おぬいさんが遠い所に坐っているように思った。

その時農学校の時計台から五時をうつ鐘の音が小さくではあるが冴え冴えと聞こえてきた。

おぬいさんの家の界限かいわいは貧民区といわれる所だった。それゆえ夕方は昼間にひきかえて騒々しいまでに賑やかにぎだった。音と声とが鋭角をなしてとげとげしく空気を劈つんざいて響き交わした。その騒音をくぐりぬけて鐘の音が五つ冴え冴えと園の耳もとに伝わってきた。

それは胸の底に沁しみ透るような響きを持つていた。鐘の音を聞くと、その時まで考えていたことが、その時までしていたことが、捨ておけない必要から生まれたものだと園には思われなくなってきた。来なければならぬところに来ていのではない。会わなければならぬ人に会っているのではない。言わなければならぬことを言っているのではない。上ついた調子になつていたのだ。それはやがて後悔をもつて報むくいらねばならぬ態度だったのではないか。園は一人の勤勉な科学者であればそれで足りるのに、兄のように畏敬いけいする星野からの依頼だとはいえ、格別の因縁いんねんもない一人の少女に英語を教えるということ。ある勇みをもつて……ある喜びをすらもつて……柄がらにもない啓蒙けいもう的な仕事に時間を潰そ

うとしていること。それらは呪うべき心のゆるみの仕事ではなかったか。……園は自分自身が苦々しく省みられた。

やがて園は懺悔するような心持で、努めて心を押し鎮めて、いつもどおりの静かな言葉に還りながら言いだした。

「話が途切れましたが、……僕は今学校の鐘の音に聞きとれていたもんですから……あれを聞くと僕は自分の家のことを思い出します。僕の家は浄土宗の寺です。だから小さい時から釣鐘の音やあの宗旨で使う念仏の鉦の音は聞き慣れていたんです。それは今でも耳についていて忘れません。そのためか鐘の音を聞くと僕は妙に考えさせられます。特別、学校のあの鐘には僕はある忘れられない経験を持っています。……そうですね、その話はやめておきましょう……とにかく僕はあの鐘を聞くと、父と兄とにむりに頼んで、こんな所に修業に出てきたのを思い出します。……」

ここまで重いながら言葉を運んでくると、園はまた言わないでもいいことを言い続けているような気尤めがした。園は今日は自分ながらどうかしていると思った。それでこれまでの無駄事の取りかえしをするようにと、

「そんなわけで僕は研究室にさえいればいい人間ですし、そうしていなければいけない人

間です。ですから星野君はこの手紙のようなことを言っています、僕は辞退したいと思
います。どうか悪あしからず」

とできるだけ言葉少なに思いきってしまいました。

伏目になったおぬいさんの前髪のあたりが小刻みに震ふるえるのを見たけれども、そして気
の毒さのあまり何か言い足そうとも思ってみたけれども、園の心の中にはある力が働いて
いてどうしてもそうさせなかった。

園は静かに茶を啜すり終った。星野の手紙をおぬいさんの方に押しやった。古ぼけた黒い
毛けしゆす繻子の風呂敷に包んだ書物を取り上げた。もう何んにもすることはなかった。座を立つ
た。

暗い夜道を急ぎ足で歩きながら園は地面を見つめてしきりに右手を力強く振りおろした。
きゆうに遠くの方で急雨のような音がした。それがみるみる高い音をたてて近づいてき
た。と思う間もなく園の周囲には霰あられが篠しのつくように降りそそいだ。それがまた見る間に遠
ざかつていつて、かすかな音ばかりになった。

第二陣、第三陣が間をおいて襲襲ってきた。

大通りまで来て園は突然足をとどめた。おぬいさんの家から遠ざかるにしたがつて、小

刻みに震う前髪がだんだんはつきりと眼につきだして、とうとうそのまま歩きつづけては
いられなくなつたからだ。星野の行つてしまふことだけであの感じやすい心は十分
に痛んでいるのだつた。それは十分に察していた。察していながら、自分は断りことわをいうに
しても断りのいいようもあるうに、あんな最後の言葉を吐いてしまったのだ。けれどもあ
んな最後の言葉を吐かせたのは誰の罪だろう。たんに英語を園に教えろといった星野にそ
の罪はない。もとよりおぬいさんでもない。あの座敷にいた間じゆう、始終あらぬ方にの
み動揺していた自分の心がさせた仕業しわざではなかつたか。自分自身を鞭むちうたなければならぬ
はずであつたのに、その咎むちを言葉に含めて、それをおぬいさんの方に投げだしたのではな
かつたか。そういえば園は千歳の星野の番地をおぬいさんに教えることをせずにあの家を
出た。おぬいさんはそれを尋ねはしなかつた。尋ねなければ教えるには及ばないと星野は
いつていた。だから園は平気でいてもいいようにも思われる。しかし園にあの最後の言葉
を投げつけられたおぬいさんがそれを尋ねる余裕を持ちえられるかどうか。……それより
も園はおぬいさんがそれを尋ねるだろうと最後の瞬間まで待ち設けていたのだ。そのこと
は始めからしまいまで気にかけていたのだ……ある好奇心なしではなく……しかもとう
とう教えずにしまつた。そうした仕打ちの後ろには何んにもないといいきることができる

か。……園はぐつと胸に手を重くあてがわれたように思った。

またのついでの際に知らせようか。……それではいけない。気がすまない。園は大通りの暗闇の中に立つて真黒な地面を見つめながら、右の腕をはげしく三度振り卸ろした。

園はそのままと来た道に取つて返した。

* * *

坂というものの一つもない市街、それが札幌だ。手稲藻巖ていねもいわの山波を西に負つて、豊平川を東にめぐらして、大きな原野の片隅に、その市街は植民地の首府というよりも、むしろ気づかれのした若い寡婦かふのようにしだらなく丸寝している。

白官舎はその市街の中央近いとある街路の曲り角にあつた。開拓使時分に下級官吏の住居として建てられた四戸の棟割長屋ではあるが、亜米利加風アメリカの規模と豊富だった木材とがその長屋を巖がんしやう丈な丈け高い南京下見したみの二階家に仕立てあげた。そしてそれが舶来まきぶの白ペンキで塗り上げられた。その後でできた掘立小屋のような桎葦まきぶき家根の上にその建物は高々と聳そびえている。

けれども長い時間となげやりな家主の注意とが残りなくそれを蝕むしばんだ。ずり落ちた瓦かわらは軒に這い下り、そり返つた下見板の木目と木節は鮫さめはだ膚はだの皺しわや吹出物の跡のように、油気

の抜けきつた白ペンキの安白粉やすおしろいに汚なくまみれている。けれども夜になると、どんな闇の夜でもその建物は燐りんに漬つけてあつたようにほの青白く光る。それはまったく風化作用から来たある化学的の現象かもしれない。「白く塗られたる墓」という言葉が聖書にある……あれだ。

深い綿雲に閉ざされた闇の中を、霰あられの群れが途切れては押し寄せ、途切れては押し寄せて、手稲山から白石の方へと秋さびた大原野を駈け通つた。小躍りこおどりするような音を夜更けた札幌の板屋根は反響したが、その音のけたたましさにも似ず、寂寞せきばくは深まつた。霰あられ……北国に住み慣れた人は誰でも、この小賢こざかしい冬の先驅ひずめの蹄の音の淋しさを知つていよう。

白官舎の窓——西洋窓を格子のついた腰高窓に改造した——の多くは死人の眼のように暗かつたが、東の端はすれの三つだけは光つていた。十二時少し前に、星野の部屋の戸がたてられて灯が消えた。間もなく西山と柿江とのいる部屋の破れ障子が開いて、西山がそこから頭を突きだして空を見上げながら、大きな声で柿江に何か物を言った。柿江が出てきて、西山と頭をならべた。二人は大きな声をたてて笑つた。そして戸をたてた。灯が消えた。

二階の園の部屋は前から戸をたててあつたが、その隙間から光が漏もれていた。針のよう

に縦に細長い光が。

霰はいつか降りやんでいた。地の底に滅入りこむような寒い寂寞がじつと立ちすくんでいた。

農学校の大時計が一時をうち、二時をうち、三時をうった。遠い遠い所で遠吠えをする犬があった。そのころになつて園の部屋の灯は消えた。

気づかれのした若い寡婦ははじめて深い眠りに落ちた。

* * *

「おたけさんのクレオパトラの眼がトロロンコになつたよ。もう帰りましたま。星野のいない留守に伴れてきたりすると、帰つてから妬かれるから」

「柿江、貴様はローランの首をちよん切つた死刑執行人が何んという名前の男だつたか知つているか」

前のは人見が座を立ちそうにしながら、抱きよせたクレオパトラの小さな頭を撫でつつ、にやりと愛嬌笑いをしているおたけにいつた言葉だが、それをおつ被せるように次の言葉は西山が放つた。めちやくちやだつた。けれども西山は愉快だつた。隅の方で、西山が図書館から借りてきたカアライルの仏蘭西革命史をめぐつていた園が、ふと顔を上げて、

まじまじと西山の方を見続けていた。濛々もうもうと立ち罩こめた煙草たばこの烟けむりと、食い荒した林檎りんごと駄菓子。

柿江は腹をぺったんこに二つに折つて、胡坐あぐらの膝で貧乏ゆすりをしながら、上眼使いに指の爪を嚙かんでいた。

ほど遠い所から聞こえてくる鈍い砲声、その間に時々竹を破るように響く小銃、早拍子な流行歌を唄いつれて、往來をあてもなく騒ぎ廻る女房連や町の子の群れ、志士やごろつきで賑にぎわいかえる珈琲店コーヒー、大道演説、三色旗、自由帽、サン・キュロット、ギョティン、そのギョティンの形になぞらえて造った玩具や菓子、囚人馬車、護民兵の行進……それが興奮した西山の頭の中で跳ね躍はっていた。いっしよに演説した奴らの顔、声、西山自身の手振り、声……それも。

「おい、何とか言いな、柿江」

「貴様の演説が一番よかつたよ」

柿江は爪を嚙みつづけたまま、上眼と横眼とをいっしよにつかつて、ちらつと西山を見上げながら、途轍とてつもなくこんなことをいった。

猿みたいだった。少しそねんでいることが知れる。西山は無頓着であろうとした。

「そんなことを聞いているんじゃない。知らずば教えてつかわそう。サムソンというんだ」
 綺麗な疍かんだか高い、少し野趣やしゆを帯びた笑声が弾はじけるように響いた。皆んながおたけの方を見た。人見がごごみ加減に何か話しかけていた。異名ガンベ（ガンベツタの略称）の渡瀬がすぐその側にいて、声を出さずに、醜い顔じゆうを笑いにしていた。

「皆んなちよつと聴きけちよつと聴け、人見が今西山の真似まねをしているから……うまいもんだ」

ガンベが両手を高くさし上げて、手の先だけを「お出でお出で」のように振り動かした。部屋じゆうが一時静になった。

声の色はまるで違っていた。人見はしかし西山の癖だけは腹立たしいほどよく呑みこんでいた。

「けれどもです、仏国革命の血はむだに流されはしなかった。人間全体の解放ではなかったかしのれない。商工業者のために一般の人民は利用されたのだったかしのれない。けれどもです、貴族と富豪と僧侶とは確実にこの地面の上から、この……地面の上から一掃いっそうされ

……」

「ばか！ 幫間ほうかんじみた真似をするない」

西山は嘯鳴どならないではいられなかった。今日の演説を座興も座興、一人の女を意識に上せて座興にしようとしている人見の軽薄さにはまったく腹が立った。第一似すぎるほど似ているのが癩しやくさわに障った。

「けれどもだ、まったくうまいもんだな」

ガンベがそういった。そうして一同が高く笑い崩れるにしたがって、片方の牡蠣かきのように盲めしいた眼までを輝かして顔だけでめちやめちやに笑った。

西山はせきこんでうっかり「けれどもだ」と言おうとしたが、危くそれを呑みこんだ。そしていった。

「俺は不愉快だよこの場合。俺は今日は練習のために演説をやったんじゃないからな。冗談と冗談でない時とはちつと区別して考えるがいいんだ」

園が西山のいきまくのを少し恥じるように書物の方に眼を移した。おたけはぎごちなさそうに人見から少し座をしぎった。たった今までの愉快さは西山から逃げていった。西山自身があまりな心のはずみに少し不安を抱きはじめて時ではあったが……

「それはそうだ。ひとつ西山のいったことを話題にして話し合ってみよう」

いつも部屋の中でも帽子を取ることをしない小さな森村が、眉と眉との間をびくびく動

かしながら、乾ききつた唇を大事そうに開け閉てした。

「私もう帰りますわ」

おたけはきゆうにつつましくなった。肉感的に帯の上にもれ上った乳房をせめるようにして手をついていた。西山のけんまくに少し怖れを催したらしい。クレオパトラは七歳になつたばかりの大きな水晶のような眼を眠そうにしばたいて、座中の顔を一つ一つ見廻わしていた。

「誰か送つてやれ」

人見が送りがつてゐるのを知つてゐるから西山はこういった。人見には送らせたくないかつたのだ。西山にそういわれると人見はたつた今の失敗で懲りたらしく自分を薦めようとはしなかつた。

送り手の資格について六人の青年の間にしばらく冗談じょうだんぐち口が交わされた。六人といつても園だけは何んにもいわなかつた。ガンベがいつた。

「一番資格のない俺の発言を尊重しろ。人見の奴は口を拭ぬぐつていやがるが貴様は偽善者だからなあ。柿江は途中で道を間違えるに違いないしと。西山、貴様はまた天からだめだ。気まぐれだから送り狼おおかみに化けぬとも限らんよ。おたけさん、まあ一番安全なのは小人森村

で、一番思いやりの深いものは聖人園だが、どっちにするかい」

おたけは送ってもらわなくてもいいと行って、森村と園とを等分に流し眊めで見やった。西山はもう万事そんなことに興味を失ってしまった。園が送ることになっておたけといっしよに座を立つていった。その時星野からの葉書を自分の側に坐っていた柿江に何かいいながら手渡した。

とにかく一人の娘の見送手などに選ばれるというのはブルジョア風の名譽にすぎない。

「園にはいやにブルジョア臭いところがあるね」

自分の言葉が侮ぶべつてき蔑的に発せられたのを西山は感じた。

「そりや貴様、氏と生れださ。貴様のような信州の山猿、俺のようなたたき大工の倅には考えられないこつた。ブルジョアといえは森村も生れは土百姓のくせにいやに臭いな」

ガンベはつけつけこういった。

けれどもおたけがいなくなると部屋の調子がいわば一オクターヴ低くなった。その代り誰も彼もが、より誰も彼もらしくなった。会話は自然に纏まって本筋に流れこんだ。人見は軽い機智の使いどころがなくなつて蔭に廻つた。西山の気分はまた前どおりの黙つて坐つてはいられないような興奮に帰つていった。

「そうかなあ」

三時さんとき下さってから 独ひとりごと語ことのような返事をして、森村は眠ねそうな薄眼うすめをしながらすましていた。

マラーは彼が宮殿と呼ぶ檻ぼろかご籠かごのような借家の浴室で、湯にひたりながら書きものをしていいる。その眼の前の壁には、学校で使い古ふるしたらしい仏蘭西フランスの大掛おかけず図ずが、皺しわくちやのままと貼りつけてある。突然玄関げんかんの方かたで、彼の情婦けいぶが、聞き慣れない美しい声こゑを持った婦人と烈はげしくいい争まじっているけはいがする。マラーはしばらくの間眉まゆをひそめて聞耳きみみを立てていたが、仰あおむけ向むけに浴槽ゆそうに浸ひたっているままで大声おほこゑに情婦けいぶを呼びたてる。そして聞き慣れない美しい声こゑの持主もぢぬというのはジロンド党員じろんどとうゑいの陰謀いんぼうを密告ひそかするため、わざわざカンヌから彼を訪まれたのだといって、昨日けふ以来いらい面会めんかいを求もとめている年の若い婦人おんなだと知れる。その婦人おんなに對たいしてある好奇心こうきしんが動く。破格はかくの面会めんかいを許ゆるす。

もうそこにはマラーはいない。醜みにくい死骸しかいになつて、浴槽ゆそうから半身はんしんを乗りだしたまま、その胸むねは短劍たんけんに貫つかれて横よこわつていいる。カンヌから来たという美しい処女じよシャローツト・コルデーは血ちの氣きの失しせた唇くちびるから「私は自分の仕事しごとを仕遂しとげてしまった。今度はあなた方の仕事しごとをする番ばんが来た」と言いながら、悪魔あくまのように殺氣ころし立たつた群衆ぐんしゆに取り囲とりこまれて保安裁ほあんさい

判所に引かれていく……

仏国革命に現われ得る代表的人物の中でことに気に入ったマラーの最後のありさまは、これだけ込み入った光景をただ一瞬間に集めて、ともすれば西山の頭にまざまざと浮びでた。それは西山にとつてはどつちから見てもこの上なくげんしゆく 厳 肅な壮美な印象イメージだった。西山はしばしばそれに駆かりたてられた。

「そうかなあ」と森村が言ったあとに、言い合わたしたような沈黙が来た。その時西山の頭をこの印象が強く占領した。

「西山は本当に東京に行くつもりなのか」

睫まっげの明かなくなつたような眼の上に皺を寄せながら森村は西山の方に向いた。それが部屋にの沈黙をわずかに破つた。西山は声よりも首でよけいなすいた。今までのばか騒さわぎに似ず、すべての顔には今までのばか騒さわぎに似ぬまじめさと緊張さとが描かれた。

「学資はどうする」

渡瀬が泣きだすとも笑いだすともしれないような顔をした。稀まれにはあるが彼もその奇怪な性格の中からみごとなものを顔まで浮きださせることがある。その時の顔だ。

西山はそれを感じると妙に感傷的にさせられていた。

「労働者になるつもりでいればどうにかなるだろう」

もう一度長い沈黙が来た。

「貴様は夢を見ているんじゃないやあるまいな」

と渡瀬がついに本気になつて口を開き始めた。

「今日の演説を聞きながらもそう思ったんだが、社会運動なんてことは實際をいうと、余裕のある人間がすることじゃないかな。ブルジョア気分のものじゃないかな。俺なんかはそんなことは考えもしないがあ。学問だつて俺や勘定ずくでしているんだ。むりでも何んでも大学程度の学問だけはしておかないと、これからはうそだと思ふもんだから俺はこうやっていゝんで、学問の尊そんげん厳げんなんて、そんなものがあるもんかい。それは余裕のある手合いがいうことだ。照り降りなしに一生涯家族まで養おうというにはこれが一番もとで元資のもとでかからない近道なんだ。俺にはそれ以上を考ふる余裕はないよ。俺と同じ境遇の人間を救つてやるの、来るべき時代をどうするのというような余裕は俺には正直なところ出てこないよ。……貴様このカアライルにでもかぶれているとんだ間違ひになるぜ。貴様の考えはばかに平民的だが、考え方……考えじゃない、考え方だ……その考え方にどこかブルジョア臭いところがあるんじゃないかなあ」

人見はおかしな男だった。西山には何んとなく気を兼ねていたが、西山がどうかすると受身になりたがるガンベの渡瀬に対してつけつけと無遠慮をいった。つまり三人は三すくみのような関係にあつたのだ。

「新井田の細君の所に行つて酒ばかり飲んでうだつていくせに余裕がないはすさまじいぜ」

「貴様はそれだからいけねえ。あれも勘定ずくでやっている仕事なんだ。いまに御利益ごりやくが顕あらわれるから見てろ」

「じゃここに来て油を売るのも勘定ずくなのか」

「ばかあいえ。俺だつて貴様、俺だつて貴様……とにかく貴様みたいな偽善者ぎぜんしやは千せん篇ぺん一いち律りつだからだめだよ……なあ西山」

牡蠣かきのような片目が特別に光つて西山の方に飛んできた。不思議だった。西山は涙を感じた。

森村が眠そうな顔をしながら会心の笑みのようなものを漏もらした。そしてしびれでも切らしたようにゆっくり立ち上つて、ろくろく挨拶もせずもに帰つていった。十時近いことが知れた。森村はどんなことがあつても十時にはきつと寝る男だったから。西山の演説を主

題にして論じようといっておきながら、知らん顔をして帰っていった。

「ガンベのいうことはそりやあんまり偽悪的じゃないか。そうだろう。俺が今日いったような考えはすべての階級の人間が多少ずつは持つてるんだ。そう俺は思うな——というより断言できる。俺は何しろ星野に今日の演説を聞いてもらいたかった。とにかく俺はやつてみる。こんな処で神妙に我慢していることはもう俺には、どうしてもできんよ。ちつとやそつとの横文字の読める百姓になったところで貴様、それが何んの足しになるかさ。東京に行つてひとつ俺は暴れ放題あばに暴れるだ。何をやつたつても人間一生だ。手ごたえのある処にいつて暴れてみないじや腹の虫が承知しないからな。けれどもだ。ペンタゴンなんか相手にしていたんじやなあ……柿江なんぞも、田舎新聞にひとりよがりな投書ぐらい載せてもらつて得意になつていないで、ちつと眼を高所大所に向けてみる。……何んといつてもそこに行くと星野は話せるよ」

ガンベは実際どこかに堅実なところがあつて、それが言葉になるとうっかり矢面には立たなかつた。今の言葉にも西山はちよつとたじろいたので、いつそう心の奥のありさまそのままを誰を相手ともなくいい放つた。それはかえつて彼の心をすがすがしくした。そして演壇に立つて以来鎮まらずにいる熱い血液が、またもや音を立てて皮膚の下を力強く流

れるのを感じた。

西山は奇行の多い一人の暴れ者として教師からも同窓からも取り扱われ、勉強はするが、さして独創的なところのない青年として見られているのを知っていた。彼は何んとなくその中に軽侮けいぶを投げられているような気がして、その裏書を否定するような言動をことさらに試みていたのだが、今日の演説と今の言葉とで、それをはつきり言い現わしたのを感じた時、心臓へのある力の注入を自覚せずにはいられなかった。生涯の進路の出発点が始めて定まったと思えた。彼の周囲が彼を見なおしたのは、彼が彼の周囲を見なおす結果になつていた。たとえばおたけだ。おたけが星野に対して特別な好意を示すのを見極めたある夜に、彼は一晩じゆう寝なかつたことがあつた。愚かな屈くつじやく辱じやく……ところが今日は人見がおたけを意識しながら彼の演説の真似をしたりするのを見ると、ある忌いまわしい羨望せんぼうの代りに唾棄だきすべき奴だと思わずにはいられなくなつていた。女性——彼を待っている女性は一人よりいいない。そしてその一人はおたけなどどの点においても比較になるような人ではなかつた。それがゆえに彼の未来を切り開いて、自分の立場に一日でも早く立ち上がろうとする焦躁しょうそうは激しくなつた。万事につけて彼の気持はそんな風に動いていった。

突然柿江が能弁のうべんになつた。彼が能弁になるのは一種の発作ほつさで、無害な犬が突然恐水病

にかかるとなものである。じくじくと考えている彼の眼がきゆうに輝きだして、湯気を立てんばかりな平べったい脂手が、空を切つて眼もとまらぬ手真似の早業を演ずる。そういう時仲間のものは黙つてそれが自然に収まるのを待っているよりほかはない。彼は貧乏ゆすりをしながら園から受取つた星野の葉書を手脂だらけにして丸めたり延ばしたりしていた。それを棒のように振り廻わし始めた。

高所大所とはいつたい何を意味するつもりだといふところから柿江は始めた。高所は札幌の片隅にもある、大所は女郎屋の廻し部屋にもあると叫んだ。よく聞けよく聞けといつて彼はだんだん西山の方に乗りだしていった。西山は自分の机に腰をかけたまま受太刀になつてあつけに取られてそれを眺めていなければならなかつた。

「教授の手にある講義のノートに手垢が溜まるといふのは名誉なことじゃない。クラーク、クラークとこの学校の創立者の名を呪文のように称えるのが名誉なことじゃない。当世の学問なるものが畢竟何に役立つかを考えてみないのは名誉なことじゃない。現代の社会生活の中心問題が那邊にあるかを知らないのは名誉なことじゃない。それを知つて他を語るのはさらに名誉なことじゃない。日清戦争以来日本は世界の檜舞台に乗りだした。この機運に際して老人が我々青年を指導することができなければ、青年が老人を指導しな

ければならない。これでありえねばあれだ。停滞していることは断じてできない。……言葉は俺の方が上手だが、貴様もそんなことを言ったな。けれども貴様、それは漫罵だ。貴様はいったい何を提唱した。つまりくだらないから俺はこんな沈滞した小つぽけな田舎にはいないと言うただけじゃないか。なるほど貴様は社会主義労働運動の急を大声疾呼したさ。けれども、貴様の大声疾呼の後ろはからつぽだったじゃないか。そうだとも。よく聞け。ガンベの眼玉みたいなものだ。神経の連絡が……大脳と眼球との神経の連絡が（ガンベが『貴様は』といって力自慢の拳を振り上げた。柿江は本当に恐ろしがって招き猫のような恰好をした）乱暴はよせよ。……貴様の議論には、その議論を統一する哲学的背景がまったく欠けてるんだ。軽薄な……」

「何が軽薄だ。軽薄とは貴様のように自分にも訳の判らない高尚ぶったことをいいながら実行力の伴わないのを軽薄というんだ。けれどもだ、俺はとにかく実行はしているぞ。哲学はその後に生れてくるものなんだ」

西山は軽薄という言葉を聞くと癩にさわったが、柿江の長談義を打ち切るつもりで威かし気味にこういった。

けれども柿江はほとんど泥酔者のようになってしまっていた。その薄い唇は言葉を巧

妙に刻みだす鋭い刃物のように眼まぐるしく動いた。人見はいつの間にかそこそと二階の自分の部屋に行ってしまった。

そこに園が静かにはいつてきた。夜寒で赤らんだ頬を両手で撫でながら、笑みかけようとしたらしかつたが、少し殺気だったその場の様子にすぐ気がついたらしく、部屋の隅をぐるっと廻って窓の方に行つて坐つた。

柿江はまだ続けていた。西山はもう實際うるさくなつた。自分の生活とは何んの関係もない一つの空想的な生活が石ころのようにそこに転がっているように思った。

「寒いか」

戸外の方を頤あごでしゃくりながら、柿江には頓とん着ちやくなく園に尋ねた。

その拍子に柿江がぶつつりと黙つた。憑ついていた狐が落ちでもしたように。そしてきまり悪るげにそこにいた三人の顔に眼を走らすと慌わてて爪を噛みはじめた。

「渡瀬君まだいたんだね。僕はもし帰つてしまふといけないと思つてかなり急いだ」

「おたけさんから何か伝ことづ言げがあつたらう」

「いいえ」

園はまるでおとなしい子供のようになこつた。

「柿江君さつきの葉書はどうしたろう。渡瀬君に見せてくれたの」

笑うべきことが持ち上っていた。星野の葉書は柿江の手の中に揉みくだかれて、鼠色の檻樓屑ぼろくずのようになつて、林檎りんごの皮なぞの散らかつている間に撒まき散らされていた。

「困るなあ、それにね、三隅のおぬいさんの稽古を君に頼みたいからと書いてあつたんだのに……それだから渡瀬君に渡してくれつて頼んでおいたじゃないか」

「君にとは俺にかい」

園に顔を見つめられながら、半分は剽ひょうきん軽けいから、半分は實際合点がいかない風でガンべは聞き返した。法螺吹ほらで、頭のいいことは無類で、礼儀知らずで、大酒呑で、間歇かんけつ的な勉強家で、脱線の名人で、不敵な道楽者……ガンべはそういう男だったのだから、少なくとも人が彼をそう見ていることを知っていたから。

「そうだ、君にだ」

そう園のいうのを聞くと、ガンべは指の短かい、そして恐ろしく掌の厚ぼつたい両手を発矢はつしと打ち合せて、胡坐あぐらのまま躍り上がりながら顔をめちやくちやにした。

「星野って奴は西山、貴様づれよりやはり偉いぞ」

西山は日ごろの口軽に似ず返答に困った。西山が星野を推賞した、その矛ほこを逆まにして

ガンベは切りこんできた。星野が衆評などをまったく眼中におかないで、いきなり物の中心を見徹していくその心の腕の冴えかたにたじろいたのだ。しかたなしに彼は方向転換をした。そして、

「園君、君が最初に頼まれたんだろう」

とからめて搦手からガンベの陣容を崩そうとした。

「いいえ別に、僕は手紙をおぬいさんにとどけるように頼まれただけだった」

それが園の落ち着いた答えだった。

「俺が札幌にいりや、この幕は貴様なんぞに出しやばらしてはおかなかったんだが」

そういつて西山は取つてつけたようにぼうじゃくぶじん傍若無人に高笑いするよりのがれ道がなかった。

柿江は三人の顔にかわるがわる眼をやりながら爪をかみ続けていた。あのままで行くときちがい狂癲にでもなるんじゃないかとふと西山は思った。とにかく夜は更けていった。何かそこには気のぬけたようなものがあつた。六年近く兄弟以上の親しきで暮してきたこの男たちとも別れねばならぬ四辻に立つようになった……その淡い無常を感じて、机からぬつくと立ち上りながら西山は高笑いを収めた。そして大きなあくび欠伸をした。

* * *

その時清逸は茶の間に母といつしよにいたのだが、おせいの綿入を縫っていた母は針を置いて迎えに立つていった。清逸は膝の上に新井白石の「折焚く柴の記」を載せて読んでいた。年若い父が今麦稗帽子を釘にひっかけている。十月になっても被りつづけている麦稗帽子、それは狐が化けたような色をしている。そしてそれは父が自分の家族のためにどれほど身をつめているかを見せびらかすシムボルなのだ。清逸はそれをまざまざと感ずることができた。そればかりではない。今日の父は用向きがまったく失敗に終わったこと、父が侮蔑だと思いきみそうなことを先方からいわれて胸を悪くして帰ってきたこと、それをも手に取るように感ずることができた。清逸にはその結果は前から分っていることだった。

わざとらしい咳払いを先立てて襖を開き、畳が腐りはしないかと思われるほど常じょうじ住ゆうすわりつきりなその座になおると、顔じゆうをやたら無性に両手で擦り廻わして、

「いやどうも」といった。それは父が何か軽い気分になった時いつでもいう言葉だ。しかしそれを今日はてれ隠しにいつている。

母が立ったついでにラムプを提げてはいつてきた。そしてそれを部屋の真中にぶらさが

つている不器用な針金の自在鍵じざいかぎにかけながら、

「降られはしなかつたけえ」と尋ねた。

「なに」

といったぎりでまた顔を撫でた。と、思いだしたように探りを入れるような大きな眼を母の方にやりながら、

「時雨しぐれた時分にはちようど先方にいたもんだから何んともなかつた」

とつけ加えた。父は一度も清逸の方を見ようとはしない。

札幌のような静かな処に比べてさえ、七里隔へだたったこの山中は滅入めいるほど淋しいものだった。ことに日の暮には。千歳川の川音だけが涼そう々と家のすぐ後ろに聞こえていた。清逸は煮えきらない部屋の空気を身を感じながら、その川音に耳をひかれた。こつちの方から話の糸口を引きだして、父の失敗が気にかけるほどのものではないのを納得させたものだろうか、それとも話の出ないのいいことにしようやむやにすましてしまったものだろうかと考えた。久しぶりで戸外に出た父は、むだ話の材料をしこたま持って帰っているに違いない。思出話ばかりを繰り返している反動に、それを一つ一つ持ちだされるのは清逸にはちよつと我慢のできないことらしかった。さらぬだにいらいらしがちな気分と、消しょう

耗^{もうねっ}熱のために我慢が薄くなっているのと、清逸はそれを恐れた。清逸はつまらぬこととは思いつながら白石の父の賢明さを思い浮べた。父子で身にしみじみと話しこんで顔にとまった蚊が血に飽きすぎて、ぼたりと膝の上に落ちるまで払いもせずにいるという、そういう父子の間柄であったのを思い浮べた。その挿話は前から清逸の心を強く牽^ひいていたものだった。

父は煙草をのんではしきりに吐^{とげ}月^{ぼう}峰をたたいた。母も黙ったまま針を取り上げている。店の方に物を買いに来た人があった。母はすぐ立っていった。

「どうもやはり北海道米はなあ増^ふえが悪^あるうて。したら内地米の方に……何等どこにしますかなあ」

買手の声は聞こえないけれども、母のそういう声ははっきりと聞こえた。父は例の探りを入れるような眼をちよつとそつちに向けた。そしてこの機会にと思つたか始めて清逸の眼をさけるようにしながら忙がしく話しかけた。

中島は会わないでその養子というのが会つたのだが、老爺が齡^{とし}がいつているので、そんな話はうるさいと言つて聞きたがらないし、自分の一存としていうと、当節東京に出ての学問は予想以上の金がかかるから、こちらは話によつては都合しないものでもないけれど

も、何しろ学問が百姓とはまったく縁のないことだし、長い間にはそちらが当惑なざるようにでもなると、せっかく今までの交際にひびが入ってかえっておもしろくないから、息子さんがそれほど秀才なら、卒業の上採用されるといふ条件で話しこんだら、会社とか銀行とかが喜んで学資を出しそうなものだ。ひとつ校長の方からでもかけ合ってもらうのが得策だろうとの返辞だったと父は言った。

そこに母が前掛についた米の粉をはたきながらはいつてきた。父は話を途切らそうか続けようかと躊躇^{ため}らった風だったが、きゆうに調子を変えて、中島の養子というのを眼^め下^{した}扱いにして話を続けた。

「中島に養子にはいるについちやあれはわしが口をきいてやったようなものだ。ろくな元^も資^とも持たず七年前に富山から移住してきた男だったが、水田にかけては経験もあるし、人間もばかではないようだったから、……その……何んとかいったなあもう一人の養子は……何んとかいった、それにわしが推^{すい}薦^{せん}したのがもとになったんだ。それをおみさ（と今度は母の方に）今日会うとな、『金でもありあまっていることならとにかく、さもなければ学問はまあ常識程度にしておいて、実地の方を小さい時から仕込むに限りまっさうだ』とこ

そして惘あきれはてたという顔を母にしてみせた。

それはしかし父が清逸の弟について噂うわさする時誰にでも言つて聞かせる言葉ではないか。清逸の学資の補助（清逸は自分の成績によつて入校二年目から校費生になつて授業料を免除されている上毎月五円の奨学金を受けていた）を送金する時にも、父は母に向つてたまには同じようなことを言つたかもしれないのだ。

清逸はもうそのほかに何んにも聞く必要はなかつた、札幌に学んでいることすらも清逸の家庭にとつては十二分の重荷であるのを清逸はよく知つている。弟の純次は低能に近いといつていいから尋常小学だけで学校生活をやめたのはまずいいとしても、妹のおせいに小樽で女中奉公をさせておかねばならぬというのは、清逸の胸には烈しくこたえていた。清逸が会社か銀行にでも勤めていたら（そんな所にいる自分を想像するほど矛盾むじゆんと滑稽こっけとを感ずることはなかつたが）おせい一人くらいを家庭に取りかえすのは何んでもないことだつたらう。一人の妹、清逸がことに愛している一人の妹の身を長い間不自由な境界において我慢しているのは、清逸だからできるのだと清逸は考えていた。しかしどうかすると清逸はそのためにおそくまで眠りを妨げられることがあつた。けれどもどんな時でも、清逸が学問をするために牽ひき起される近親の不幸（父も母もそのためにたしかに老後

の安楽から少なからぬものを奪われてはいるが、清逸をますます学問の方に駆りたてはしても、躊躇させるようなことは断じてなかった。

清逸は小学校の三年を卒業する時から、自分は優れた天分を持って生れた人間だとの自覚を持ちはじめたことを記憶している。田舎の小学校のことだから、卒業式の時には尋常三年でも事々しい答辞を級の代表生に朗読させるのが常だった。その時その役に当たったのは加藤という少年だったが清逸は加藤の依頼に応じて答辞の文案を作ってやった。受持教員はそれを読んで仰天した。そしてそれが当日郡長や、孵化場長や、郡農会の会長やの列座の前で読み上げられた時、清逸は自分の席からその人たちが苦々しい顔をして聞いているのを観察した。彼らのすべては、その答辞が、教師の代作でなければ、剽竊に相違ないと信じきっているのが清逸にはよく知れた。清逸はその時子供らしい誇りは感じなかった。ただ、一般に偉い人といわれる人が、かならずしも偉いというほどの人ではないとはつきり感じたのだった。偉人として、人の称讃を受けるくらいのこととはそうむずかしいことではないとはつきり感じたのだった。それ以来清逸の自分に対する評価は渝ることがない。そしてそれに特別の誇りを感じないのもまた同じだった。この心持がすべての思想と行動を支配した。家族の人たちに対しても彼はそれに手加減をする

理由は露ほども見出さないのだ。

清逸は上京の相談で家に帰りはしたが、自分の健康が掘りだしたばかりの土塊のような苛^{から}辣な北海道の氣候に堪えないからとは言いたくなかったので、さらに修業を続けたいのだというよりしかたがなかった。父は清逸が物をいいたす以上は、自分の智慧^{ちえ}ではとても突き崩せないだけの考慮をめぐらした上で物をいうと知りぬいていたから、母に向う時のように、頭からけなしつけて二の句を吐かせないというようなやり方はしようにもできなかった。しかしながら今度の事は父にとってたしかに容易ならぬ難題であつたに相違ない。清逸は始めから学資は自分で何んとかするといつてみたが、父としてはそれが堪えられないことだつたらしい。清逸のことだから元来^{るいじやく}羸弱な健康を害^{そご}ねても何んとかするであろうが、それまでの苦心を息子一人にさせておくのは親の本能が許さなかつたろう。しかしそれにも増して父に不安を与えたのは、かくては清逸がだんだん父母から離れていくだろうということだつたに違いないのだ。

父は自分が一種の怠け者で、精いっぱい生活をしてこなかつたのを気づいている。始終窮境に滅入りこむその生活は、だから不運ばかりの仕業^{しわざ}ではない。清逸への仕送りの不足がちなのも、一人娘を女中奉公に出さねばならなかつたのも、人知れぬ針となつてその

良心を刺しているのだ。それを清逸が知っているのを父は知っていた。それをまた清逸は知っていた。清逸はそのことを責める気持はけつしてなかったけれども、父が軽薄な手段をめぐらしてその非を蔽い、あわよくば自分の要求すべき資格のないものを家族のものに要求しようとするのを見つけたすと快くなかった。

父が三里も道程のある島松まで出かけて行って、中島の養子に遇った気持にはそうしたものがあつたはずだ。清逸はそれには及ばないと幾度となくとめてみたけれども、かならず吉報きつぽうを持って帰るからといいながら一人で勇んで出かけていったのだ。そしてその結果は清逸の思つたとおりだつた。

ラムプに黄色く灯がついてから、弟の純次は腰から下をぐっしり濡らして、魚臭くなつて孵化場から帰つてきた。彼は店の方に行つて駄菓子を取つてきてそれを立ち喰いしながら、駄々子のように母に手伝わせて和服に着かえた。清逸に挨拶一つしなかつた。清逸一人が都会に出て、手足にあかぎれ一つ切らさず、楽をしながら出世する。その犠牲になつているのだぞという素振りそぶりを、彼は機会あるごとに言葉にも動作にも現わした。それは清逸の心を暗くした。

貧しい気づまりな食卓を四人の親子は囲んだ。父の前には見なれた徳利と、塩しお辛からのは

いった蓋物ふたものとが据えられて、父は器用な手酌で酒を飲んだ。しかし不断ならば、盃を取った場合に父の口から繰りだされるはずの「いやどうも」という言葉は一つも出てこなかった。純次は食卓から胸にかけて麦むぎたくさんなためにぼろぼろする飯をこぼし散らかすと、母は丹念にそれを拾って自分の口に入れた。母はいい母だがまったく教育がない。教育のないのを自分のひげめにして、父から压制されるのを天から授かった運命のように思っているらしかった。末子の純次に対しては無智な動物のような溺愛できあいを送っていた。その母が清逸せいいつに対しての態度は知れている。

「もう鮭はたくさん上のぼつてきだしたのか」

清逸はたまりかねて純次にこう尋ねてみた。

「うむ」

という答えが飯を頬張った口の奥から出るだけだった。

「今年は何台卵を孵かえすんだね」

「知らねえ」

母がさすがに気をかねて、

「知らねえはずはあるめえさ」

と口添えくちぞすると、純次は低能者に特有な殺氣立った眼を母の額の辺に向けて、

「知らねえよ」

と言いながら持ち合わせた箸で食卓を二度たたいた。

大食の純次はまだ喰いつづけていたし、父はまだ飯にしないので、母も箸を取らずにいたが、清逸は熱感があつて座に堪えないので、軽く二杯だけむりに喰うと、父の自慢の蓬よ茶もちやという香ばかり高くて味の悪い蓬の熱い浸液しんえきをすすりこんで中座した。

純次の部屋にあててある入口の側の独立した三畳の小屋にはいつてほつとした。母がつづいてはいつてきた。丸々と肥えた背の低い母は、清逸を見上げるようにして不恰好に帯を揺りあげながら、

「やつぱりよくないとみえるね」

と心配を顔に現わしていつてくれた。

「寒さが増してくるとどうしてもよくないさ。けれどもそんなにひどいことはない。熱があるようだから先に寝かしてもらいます」

「そだそだ、それがいいことだ」

そして純次の床を部屋の上かみに、清逸の床を部屋の下しもにとつたほど無智であるが、愛情の

偏頗へんぱも手伝つていた。清逸が横になると、まめまめしく寢床をまわり歩いて、清逸の身体に添うて掛蒲団をぼんぼんと敲たたきつけてくれた。

清逸は一昨日ここに帰つてきてから割合によく眠ることができた。海岸のように断続して水音のするのはひどく清逸の心をいらだたせたが、昼となく夜となく変化なしに聞こえる川瀬の音は、清逸の神経を按摩あんまするようだった。清逸はややともすると読みかけている書物をばたつと取り落して眼がさめたりした。それは生れてからないことだった。

清逸は寝たまま含嗽うがいをすると、頸に巻きつけている真綿の襟巻はすを外して、夜着を深く被った。そして眼をつぶつて、じつと川音に耳をすました。そこから何んの割引もいらぬ静かな安息がひそやかに近づいてくるようにも思ひながら。

その夜はしかし思うようには寝つかれなかった。彼の疲労が恢復かいふくしたのかもしれない。あるいは神経がさらに鋭敏になり始めたのかもしれない。

ふと眼がさめた。清逸はやはりいつの間にか浅い眠りを眠っていたのだった。盗汗ねあせが軽く頸のあたりに出ているのを気持ち悪く手の平に感じた。

川音がしていた。

何時ごろだろうと思つて彼はすぐ枕許のさらし木綿もめんのカーテンに頭を突つこんで窓の外

を覗いてみた。

珍らしく月夜だった。夜になると曇るので気づかずにはいたが、もう九日ぐらいだろうかと思われる上弦というより左弦ともいうべきかなり肥った橢形くしがたの月が、川向うの密生した木立の上二段ほどの所に昇っていた。月よりも遠く見える空の奥に、シルラス雲がほのかな銀色をして休やすらっていた。寂さびびきつた眺めだった。裏庭のすぐ先を流れている千歳川の上流をすかしてみると、五町ほどの所に火影が木叢こむらの間を見え隠れしていた。瀬切りをして水車にかけてあつて、川を登ってくる鮭さけがそれにすくい上げられるのだ。孵化場の所に指揮されてアイヌたちが今夜も夜通し作業をやっているのに違いない。シムキというアイヌだった。その老人が樺炬火かんばたいまつをかざして、その握り方で光力を加減しながら、川の上に半身を乗りだすような身構えで、鱧ひれや尾を水から上に出しながら、真黒に競合せりあつて鮭の昇ってくる具合を見つめていた……それは清逸が孵化場の給仕をしていたころに受けた印象の一つだったが、火影を見るにつけてそれがすぐに思いだされた。気を落ちつけて聞くと涼々そうそうと鳴りひびく川音のほかに水車のことんことんと廻る音がかすかに聞こえるようでもある。窓のすぐ前には何年ごろにか純次やおせいと一本ずつ山から採ってきて植えた落葉松からまつが驚くほど育ち上がって立っていた。鉄鎖てつさのように黄葉したその葉が月の光で

よく見えた。二本は無事に育っていたが、一本は雪にでも折れたのか梢の所が天狗巢の
ように丸まっていた。そんなことまで清逸の眼についた。

突然清逸の注意は母家の茶の間に牽き曲げられた。ばかりで声高な純次に譲らない
ほど父の声も高く尖っていた。言い争いの発端は判らない。

「中島を見ろ、四十五まであの男は木刀一本と禪一筋の足軽風情だったのを、函館にいる
時分何に発心したか、島松にやってきて水田にかかったんだ。今じやお前水田にかけては、
北海道切つての生神様だ。何も学問ばかりが人間になる資格にはならないことだ」
「じゃ何んで兄さんにばつか学問をさせるんだ」

「だから言つて聞かせているじゃないか。清逸が学問で行くなら、お前は実地の方で兄さ
んを見かえしてやるがいいんだ」

純次は黙ってしまった。父は少し落ち着いたらしく、半分は言い聞かすような、半分は
独語をいうような調子になった。

「中島は水田をやっているうちに、北海道じゃ水が冷っこいから、実のりが遅くつて霜に
傷められるとそこに気がついたのだ。そこで田に水を落す前に溜を作っておいて、天日で
暖める工夫をしたものだが、それが凶にあたって、それだけのことであんな一代分限にな

り上ったのだ。人つてものは運賦うんぷてんぷ天賦てんぷで何が……」

そのあとは声が落ち着いていくので、かすれかすれにしか聞こえなくなった。

「兄さんは悪い病気でねえか」

しばらくしてから突然純次のこう激しく叫ぶ声が聞こえた。今度は純次は母と言いつ争いを始めたらしい。母も何か言ったようだったが、それは聞こえなかった。

「肺病はお母さんうつるもんだよ」

純次の声がまた。それは聞こえよがしといつてよかった。

「そうしたわけのものでもあるまいけど」

「うんにやそうだ」

そのあとはまた静かになった。清逸は早く寝入ってしまうに限ると思つて夜着の中に顔を埋めた。寝入りばなの咳がことに邪魔になった。

純次が鼻緒のゆるんだ下駄を引きずつてやってくる音がした。清逸は今夜はもう相手になつていたくなかつたので寝入つたことにしようと思つた。

思いやりもなく荒々しく引戸を開けて、ぴしやりと締めきると、錠じょうをおろすらしい音がした。純次は必要もない工夫のようなことをして得意でいるのだが、その錠前もおそらく

その工夫の一つなのだろう。こんな空家同然な離れに錠前をかけて寝る彼の心持が笑止だった。

やがて純次は、清逸の使いふるしの抽出ひきだしも何もない机の前に坐った。机の上には三分芯じんのラムプがホヤの片側を真黒くすぶに燻くすぶらして暗く灯っていた。机の片隅には「青年文」「女学雑誌」「文芸倶楽部」などのバック・ナムバアと、ユニオンの第四読本と博文館の当用日記とが積んであるのを清逸は見つて知っていた。机の前の壁には、純次自身の下手糞な手跡で「精神一到何事不成陽氣発所金石亦透」と半紙に書いて貼つてあつた。

純次は博文館の日記を開いて鉛筆で何か書いているらしかったが、もぞもぞと十四五字も書いたと思う間もなく、ぱたんとそれを伏せて、吐きだすごとく、

「かったいぼう」

とほざいて立ちあがった。そして手取り早く巻帯を解くと素裸かになって、ぼりぼりと背中を搔かいていたが、今まで着ていた衣物を前から羽織つて、ラムプを消すやいなや、ひどい響を立てて床の中にもぐりこんだ。

純次はすぐ躰いびきになつていた。

清逸の耳にはいつまでも単調な川音が聞こえつづけた。

* * *

何んという不愛想な人たちだろうと思つて、婆やはまたハンケチを眼のところに持つていった。

上りの急行列車が長く横たわっているプラットフォームには、乗客と見送人が混雑して押し合つていた。

西山さんは機関車に近い三等の入口のところに、いつもとかわらない顔つきをしていつもとかわらない着物を着て立っていた。鳥打帽子の袴なしで。そのまわりを白官舎の書生さんをはじめ、十四五人の学生さんたちが取りまいて、一人が何かいうかと思うと、わーつわーつと高笑いを破裂させていた。夜学校から見送りに来たらしい男の子が一人と女の子が二人、少し離れた所で人ごみに揉もまれながら、それでも一心にその人たちの様子を見つめていた。三隅さんのお袋とおぬいさんとは、妹を連れてきたおたけさんと一かたまりになつて、混雑を避けるように待合室の外壁に身をよせて立っていた。西山さんはその人たちを見向けこうともしなかつた。ほかの書生さんたちもそういう見送人に対して遠慮するらしい気振けぶりも見せようとはしない。

婆やはもう一度西山さんをつかまえて何かもつと物をいいたいと思って、書生さんたちの後から隙をうかがっているけれども、容易にその機会は来そうもなかった。人の心も察しないで何んという不愛想な人たちだろうと思つて腹立たしかつた。その時軟かく自分の肩に手を置く人があつた。振り向いてみるとおぬいさんだつた。娘心はおびたらしい群衆のぞよめきに軽く酔つたらしく頬のあたりを赤くしていた。

「あなたそんな所にいるとあぶのうございます。こちらにいらつしやいな」

そういつておぬいさんは誘つてくれた。婆やはそれをしおに諦めて、おぬいさんにやさしくかばわれながら三隅さんのお袋の所にいつしよになつて、相對あいたいよりも少し自分を卑ひ下げしたお辞儀じぎをした。おぬいさんは婆やの涙ぐんだ眼を見るといつそう赤くなつたようだつた。婆やは、近ごろの若い人に似ぬ何んというらしい娘さんだろうと思つた。とにかく婆やは黙つてはいられなかつた。いいたいことは山ほどあるのだが、書生さん相手では、婆やのいうことなどは上の空に聞き流されるのだから腹が立つばかりだつた。誰かに聞いてもらいたいと思つている矢先だつたので、婆やは何事をおいても能のうべん弁べんになつた。

「星野さんはお留守だし、西山さんはきゆうに東京にな、お発たちなさるし、婆やは淋しいこんです。いい人でな、あなた。あんな人並外れて大きいがに、赤坊のような人でなもし。

婆や婆やたらいつて、大事にしておくれなさつたが……ま、行く行くは皆ああして羽根が生えて飛んでいかれるは定なれど、何んとやら悲しゆうてなもし。私もお知りのだんだ一人の息子を二十九年になもし、台湾で死なしてから、一人ぼっちになりましたけに、世話をしとる若い衆がどれも我が子同様に思われてな、すまんことじゃけれどなもし。それゆえ離れるがどうもなりません。……それがなもし、若い衆の不思議というたら、家を出るさいには、私の頬げたをこう敲いてな、あなた『婆やきつい世話』……ではのうて『婆やいろいろに世話をかけてありがとう。達者でいてくれや、東京に行ったら甘いものを送るぞよ』……」

婆やは西山さんの口調を真似ようとしたら、涙で物がいえなくなってしまう。ところが次のことを考えると腹が立つてきた。それでまた言葉がつけた。

「と涙の出るようなことをいうてだったが、ここに来たら最後、見なさるとおり、婆やなどは眼にも入らぬげでなもし」

婆やはそこにいる四人に万遍なく聞き取らせようとするので容易でなかった。肥った身体を通りすがりの人にこづかれながら、手真似をまじえて大きな声になった。

おたけさんが我慢がしきれなくなったらしく、きゆうに口もとに派手な模様の袖口を持

つていった。三隅さんのお袋はさすがに同情するらしく神妙にうなずいていたが、おぬいさんもだいぶ怪しかった。婆やは今度はおたけさんの方に鉾ほこを向けた。

「あなたも年をとつてみるとこの味は分つてきなさるが……」

皆まで聞かずにおたけさんはとうとう顔を真赤にして笑いだしてしまったが、ふと眼を西山の方にやると驚いたらしく、

「まあ新井田の奥さんが」

と仰ぎょう山さんにいった。

ガンベさんが取りなすように三十恰かつこう好こうに見える立派な奥さん風の婦人と西山さんとの間にいて、ほかの書生さんたちは少し輪を大きくしてそれを傍観していた。奥さんというのは西山さんに何か餞別物を渡そうとしているところだった。そこらにいる群衆の眼は申し合わせたように奥さんの方に吸い寄せられていた。

婆やも驚いておたけさんに尋ねた。

「あれはどなただなもし」

「あなた知らないの。あれがそら渡瀬さんのよく行く新井田さんの奥さんなのよ」

とおたけさんは奥さんから眼を放さない。重そうな黒縮緬くろちりめんの羽織なが、撫なで肩の円味を

そのままに見せて、抜け上るような色白の襟えり足あしに、藤色の半襟がきちんとからみついて手絡てがらも同じ色なのが映うつりよく似合っていた。着物の地や柄は婆やにはよく見えなかったが、袖裏に赤いものがつけてあるのはさだかに知れた。斜ななめ後ろから見ただけでも珍めずらしく美しくそんな人に思われた。

駅夫えきふが鈴を鳴らして構内を歩きまわりはじめた。それとともに場内は一時にざわめきだして、人々はひとりでに浮足になった。婆やはもう新井田の奥さんどころではなかった。

「危ない」と後ろからかばってくれたおぬいさんにも頓とんちやく着せず、一生懸命に西山さんの方へと人ごみの中を泳いだ。

人波の上に頭だけは優ゆうに出そうな大きな西山さんがこつちに向いて近づいてきた。婆やはさればこそと思いつつ寄っていつて取りすがろうとするのを西山さんは見も返らずにどンドン三隅さんたちの方に行つて、鳥打帽子を取った。そして大きな声でこう挨拶をした。

「じゃ行つてきます。万事ありがとうございます。さようなら。御大事に」

婆やはつくづく西山さんが恨うらめしくなった。あれほど長い間世話を焼かせておきながら、やはり若い娘の方によけい未練が残るとみえる。齢を取るといふのは何んという情ないこ

とだろう。……婆やは西山さんから顔を背けてしまった。

いきなり痛いほど婆やの左の肩を平手ではたくものがいた。それが西山さんだった。

「じゃ婆やいよいよお別れだ。寒くなるから体を大事にするんだ」

そういうわけだったのかと思うと婆やはありがたいほど嬉しくなって、西山さんの手を握って何んにもいわずにお辞儀をした。

「もういいから」

西山さんは手を振りきってどンドン列車の方に行く。婆やはそのすぐあとから楽々と跟ついていくことができた。

人見さんが列車の窓から、

「おいここだ、ここだ」

と行って西山さんを招いていた。

「危あぶないよ婆さん」

知らない学生が婆やを引きとめた。婆やは客車の昇降口のすぐそばまで来てまごついてきたのだ。そこから人見さんが急いで降りてきた。

見ると人見さんの顔を出していた窓の所には西山さんの顔があった。がやがやいい罵ののる

人ごみの中を駅員があつちでもこつちでも手を上げたり下げたりしたかと思うと、婆やは飛び上らんばかりにたまげさせられた。汽笛がすぐ側で鳴りはためいたのだ。婆やは肥ふとつた身体をもみまくられた。手の甲をはげしく擦こする釘のようなものを感じた。「あ痛いまあ」といつて片手で痛みを押えながらも、延のび上つて西山さんを見ようとした。と押しあいへしあいされながら婆やの体はすうつと横の方に動いていった。それはしかしそうではなかった。汽車が動きだしたのだった。窓という窓から突きだされたたくさんな首の中に、西山さんも平気な顔をして、近眼鏡を光らせながら白い歯を出して笑っていた。それがみるみる遠ざかって見えなくなってしまった。それだけのことだった。

三隅さんのお袋とおぬいさんとが親切に介抱してくれるので、婆やは倒れもせず改札口を出たが、きゆうに張りつめていた気がゆるんで涙がこみあげてきそうになった。送りに来た書生さんたちはと見ると、まるでのんきな風で高笑いなどをしながら遠くから冗談口を取りかわしたりして、思い思いに散らばっていつてしまった。何んの気で見送りに来たのか分らないような人たちだと婆やは思った。白官舎の人たちも、柿江さんは夜学校の生徒の手を引いて行ってしまふし、そのほかの人の姿はもうどこにも見えなかった。

停車場前のアカシヤ街道には街燈がともっていた。おたけさんとはぐれたので婆やは三

隅さん母子と連れ立って南を向いて歩いた。

「星野さんがお帰りてから何んとかお便りがありましたか」

と大通り近くに來てからお袋が婆やに尋ねた。

「何があなた。皆んな鉄砲丸のような人たちでな」

婆やはそう不平を訴えずにいらなかった。

「私の方にもありませんのよ」

とおぬいさんがいった。

大通りから婆やは一人になった。これでようやく帰りついたと思うと、書生さんたちはとうの昔に帰ってきていて、早く飯にしろとせがみだてるに違いない。これから支度をすゝるのにそう手早くできてたまることかなと婆やは思いながらもせわしない気分になって丸っこい体を転がるように急がせた。

きゆうに手の甲がぴりぴりしだした。見ると一寸いっすんばかり蚯蚓みみずば脹れになっていた。涙がまたなんとなく眼の中に湧いてきた。

* * *

おぬいは手さぐりで夢中に母にすがりつこうとしていたらしかた。眼をさましてみる

と、母は背面向きになつてはいるが、自分のすぐ側に、安らかな躰いびきを小さくかきながら寝入つていた。

ほつと安心はした。けれどもどうしてこんないやな夢ばかり見るのだらうとおぬいは情けなかつた。枕紙に手をやってみるとはたしてしとどに濡れていた。夢の中で絶え入るやうに泣いてしまったのだから、濡れていると思つたらやはり濡れていた。眼のあたりを触つてみると、右の眼頭から左の眼に、左の眼尻から鬢びんの髪へとかけて、涙の跡はそこにも濡れたまま残つていた。おぬいは袖口を指先にまるめてそつと押し拭つた。それとともに、泣じやくりのあのような溜息が唇を漏れた。

覚めてから覚えている夢も覚えていない夢も、母にはぐれたり、背そむいたり、厭われたりするやうな夢ばかりなことはたしかだった。今見た夢もはつきり覚えていないのだったが、覚えていないのは覚えているよりもいっそう悲しい夢であるやうな気がした。

今のおぬいの身の上として、天にも地にも頼むものは母一人きりなのだ、その母がおぬいをまったく見忘れている夢らしかった。怖いものを見窮みきわめたいあの好奇心と同じやうな気持で、おぬいは今見た夢のそこを忘却の中から拾いだそうとし始めた。

母があればおぬいではありませんときつぱり人々にいつていた。おかしなことをいう娘

だといふような快活な笑いを唇のあたりに浮べながら。まわりにいる人たちもおぬいに加勢して、あれはあなたのお嬢さんですよといふ張つてくれているのに母は冗談にばかりしているらしかった。おぬいはもしやと思つて自分を見ると、たしかにいつものとおりの着物を着て、それは情けなそうな顔つきはしていたけれど自分の顔に相違なかつた。(おかしなことには他人の顔を見るように自分の顔をはつきりと見ることができた)……おぬいは家に留守をして私の帰るのを待つていますから、家にさえ帰れば会えるにきまつていますと母は平気であるけれども、それはとんでもない間違だということをおぬいは知り抜いていた。家に帰つてみてどれほど驚きもし悲みもするだろうと思つと、母が不憫ふびんでもあり残される自分がこの上もなくみじめだつた。その不幸な気持には、おぬいが不斷感じてゐる実感が残りなく織りこまれていた。もし万一母を失うようなことがあつたらどうしようと思つとおぬいはいつでも動悸どついきがとまるほどに途方に暮れるのだが、そのみじめさが切りこむように夢の中で逼せまつてきた。それからその夢の続きはただ恐ろしいということのほかにははつきりと思ひだされない。おぬいが母を見ている前で、おぬいでないものにだんだん變つていくので、我を忘れてあせつたようでもある。母がどんどん行つてしまうのであとを追いかけてやうとするけれども、二人の間にはガラスのかけらがうぎうぎするほど積ま

れていて、脚を踏み入れると、それが磁石じしやくに吸いつく鉄屑てつくずのように蹠あうらにささりこんだようでもある。

とにかくおぬいは死物狂いに苦しんだ。眼も見えないまでに心が乱れて、それとかわしい方に母恋しさの手を延ばしてすがり寄った。そして声を立ててひた泣きに泣いたのだつた。

夢が覚めてよかったと安堵あんどするその下からもつと恐ろしい本物の不吉が、これから襲ってくるのではないかとも危ぶまれた。緑色の絹笠のかかったラムプは、海の底のような憂鬱ううつな光を部屋の隅々まで送って、どこもしれない深さに沈んでいくようなおぬいの心をいやが上にも脅おびやかした。

おぬいは思わず肘ひじを立てた。そしてそうすることが隠れている災難を眼の前に見せる結果になりはしないかと恐れ惑いながらも、小さな声で、

「お母さん」

と呼んでみないではいられなかった。十二時ごろ病家から帰ってきた母の寝息は少しもそのために乱れなかった。

もう一度呼んでみる勇氣はおぬいにはなかった。自分の声におびえたように彼女はそつ

と枕に頭をつけた。濡れた枕紙が氷のごとく冷えて、不吉の予覚に震えるおぬいの頬を驚かした。

おぬいの口からはまた長い嘆息が漏れた。

身動きするのも憚はばられるような気持で、眼を大きく開いて、老境の来たのを思わせるような母の後姿を見やりながらおぬいはいろいろなことを思い耽ふけった。

何かに不安を感じずにつけていつまでも思うのは、おぬいが十四の時に亡くなった父のことだった。細面で瘦やせぎすな彼女の父は、いつでも青白い不精ぶしょうひげ髯を生やした、そしてじつと柔和な眼をすえて物を見やっている、そうした形でおぬいには思いだされるのだった。ある小さな銀行の常務取締役だったが、銀行には一週に一度より出勤せずに、漢籍かんせきと聖書に関する書物ばかり読んでいた。煙草も吸わず、酒も飲まず、道楽といつては読書のほかには、書生に学資を貢みつぐぐらいのものだった。その関係から白官舎やそのほかの学生たちも今だに心おきなく遊あそびに来たりするのだった。

父はおぬいの十二の時に脊髓せきずい結核けつかくにかかって、しまいには半身不随ふずいになったので、床にばかりついていた。気丈きじょうな母は良人の病が不治だということを知らず、毎晩家事が片づいてから農学校の学生に来てもらって、作文、習字、生理学、英語というようなもの

を勉強し始めた。そして三月の後には区立病院の産婆養成所の入学試験に及第した。その名前が新聞に載せられた時、それを父に気づかれまいとして母が苦心したのを、おぬいは昨日のこのように思いだすことができる。

その父はいい父だった。少なくともおぬいにとっては汲みつくせない慈愛を恵んでくれた親だった。

「あれはどこからどこまであまり美しいから早死をしなければいいが」

そう父が母に言っているのを偷み聞きしたこともあった。そして病気がちなおぬいが加減でも悪くすると、自分の床の側におぬいの床を敷かせて、自分の病気は忘れたように検温から薬の世話まで他人手にはかけなかった。

それよりも何よりも、おぬいが父を思いだす時思いださずにはいられないのは、父が死ぬちようど一週間前、突然おぬいに、部屋の中を一まわり歩いてみたいから肩を貸してくれとお願いした時のことだった。おぬいももとより驚いたが、母はそれを思いもよらぬことだとさえいつてとめて聴かなかつた。父は母とおぬいとを静かに見やりながらいった。

「お前がたは分らないかもしれないが、男には、一生に一度、自分の力がどれほどあるものか、それを出しきらなければ死ねないような気持が起るものだ。わしは今までお前が

たに牽かれてそれをようしなかつた。……もうしかしわしは死ぬものとは相場がきまつた。今日はひとつわしの心にどれほど力があるかやってみるのだ。腰から下に通う神経は腐つて死んでいると医者もいうが、わしはお前がたに奇蹟を見せてやろう。案じることはない」

父は歩いた。おぬいも自分の肩に思ったより軽い父の重みを感じながら歩いた。歩きながら父はいった。

「おぬい、お前はもう十四になるなあ。強い肩になった。立派にお父さんの力になってくれる。……お前もやがて人の妻になるのだが、なつたら、今日の心持を忘れないで良人といつしよに歩くんだぞ。忘れちゃあいけないよ」

父の手がおぬいの肩でかすかに震えはじめた。

父が首尾よく部屋を一周して病床に腰を卸すと親子三人はひとりでに手を取り合っていた。そして泣いていた。

「お前がたは何をそう泣くのだ。わしは喜んで涙を流しているのに。……今日のような嬉しい日はない。……だがこんなことは医者にさえいふ必要はないことだよ。こんな嬉しいことはめいめいの心の中に大事にしまっておくべきことだからな」

苦しい呼吸の間から父はようやくこれだけのことをいって横になった。

この出来事については母もおぬいも父の言葉どおり誰にもいわないでいるうちにおぬいにとつては、それがとても口には出せないほど尊いものになっていた。

おぬいは老境に來たのを思わせるような母の後姿を見つめながら、これを思いだすと、涙がまたもや眼頭から熱く流れだしてきた。噉泣すすりなきになろうとするのをじつと堪えた。

……不斷は柔和で打ち沈んだ父だったけれども何んという男らしい人だったろう。あの強い烈しい底力、それはもうこの家には、どの隅にも塵ほども残っていない。……淋しい、父が欲しい。父がもう一度欲しい。父のあの骨ばった手をもう一度自分の肩に感じてみたい。

力の不足、自分一人ではどうしようもない力の不足——倚よりすがることのできるものにも何もかも打ち任まかして倚よりすがりたい憧あこがれ、——そしてどこにもそんなものない喰い入るような物足らなさ。……氣を鎮しずめて眠ろうとすればするほど、悲しみはあとからあとからと湧き返つて、涙のために痛みながらも眠が冴さえるばかりだった。

おぬいはとうとうそつと起き上つた。そして箆たんす筒の上に飾つてある父の写真を取つて床に歸つた。父がまだ達者だったころのもので、細面の清すがすが々しい顔がやや横向きになつて

遠い所をじつと見詰めていた。おぬいはそれを幾度も幾度も自分の頬に押しあてた。冷たいガラスの面が快い感触をほてつた皮膚に伝えた。おぬいはその感触に甘やかされて、今度は写真を両手で胸のところに抱きしめた。

涙がまた新たに流れはじめた。

二度と悪夢に襲われないために、このままで夜の明けるのを待とうとおぬいは決心した。夜は深いのだろう。母の寝息は少しも乱れずに静かに聞こえつづけていた。おぬいはようこそ母を起さなかつたと思つた。

* * *

夜学校を教えるために、夜食をすますとすぐ白官舎を出た柿江は、創成川つぶちで奇妙な物売に出遇つた。

その町筋は車力や出面（労働者の地方名）や雑穀商などが、ことに夕刻は忙がしく行き来している所なのだが、その奇妙な物売だけはことに柿江の注意を牽ひいた。

鉢巻の取れた子供の羅紗帽（らしやぼう）を長く延びたざんぎり頭に乘せて、厚衣（あつし）の恰好をした古ぼけたカキ色の外套を着て、兵隊脚（へいたいきやはん）絆（は）をはいていた。二十四五とみえる男で支那人のような冷静で伶俐な顔つきをしていた。それが手ごろの風呂敷包を二枚の板の間に挟んで、

棒を通して挟み箱のように肩にかついでいた。そして右の手には鼠色になった白木綿しろもめんの小旗を持つているのだが、その小旗には「日本服を改良しましょう。すぐしましょう」と少しも気取らない、しかもかなり上品な書体で黒く書いてあった。

その小旗が風に靡なびいて拡がれば拡がったまま、風がなくなつて垂れば垂れたままで、少しの頓着もなく売声はもとより立てずに悠々ゆうゆうと歩いていくのだった。

柿江も二十五だった。彼は何んとなくその物売に話しかけたくなつた。そしてつかつかとその方に寄つていこうとした。その時彼は先夜西山と闘たたかわした議論のことを思つた。

「貴様のように自分にも訳の判らない高尚ぶつたことをいいながら実行力の伴わないのを軽薄というんだ」と西山の言つた言葉がどうも耳の底に残つていて離れないでいた。それとこれとは何んの関係もないようだが、柿江にはきゆうにその物売に話しかけるのに気がひけだした。それゆえ彼は物売をやり過ぎて創成川を渡つてしまった。

次の瞬間に、柿江は今夜の夜学校の修身の時間にはあの物売の話をして聞かせようと考へていた。実行家とはああいう人間のことをいうのだと教えてみよう。そしてもしうまく書けたら新聞の寄書としても十分役立つに違いないとも思いめぐらしていた。左手を深々と内懐から帯の下にさし入れて、右手の爪をぶつりぶつりと嚙かみ切りながら。

* * *

柿江は自分でまた始まったなと思った。けれども何んといつても、その興奮が来ると、むりに抑えつける気持にはなれなかった。自分の眼には、二十四五人の高等科の男女の生徒が、柿江の興奮に誘われてめいめいの度合いに興奮しながら、眼を輝かして柿江の能弁に聞き入っていた。それに誘われて柿江は自分がさらに興奮してゆくのを感じた。

「いいか、その旗には『日本服を改良しましょう。すぐしましょう』と書いてあるんだ。とうとうその男は先生が一生懸命に介抱してやったにもかかわらず、だんだん氣息が細つて死んでしまった。……何しろ深い谷の底のことではあるし、堅雪にはなっていたが、上部の解けた所に踏みこむと胸まで埋まるくらい積もっているのだから、先生にはどうしていいか分らなかつた。……とうとうそのえらあい若者は、日本服の改良を仕遂げないうちに、無残にも谷底へすべり落ちて死んでしまったんだ。なんぼう気の毒なことではないか」

醜いほど血肥りな、肉感的な、そしてヒステリカルに涙脆い渡井という十六になる女の生徒が、穢ない手拭を眼にあてあて聞いていたが、突然教室じゆうに聞こえわたるような啜泣きをやり始めた。その女の生徒は谷底で死んだというえらあい男を、自分の心の中で情人に仕立てあげてしまって、その死んだのを誠に自分の恋人の上のこのように痛

み悲しんでいる……そうだなと柿江は直感すると、嫉妬しつとというのではないが、何か苦々しい感情を胸の中に湧き立たせた。男の生徒たちはおおっぴらに女の方を見やる機会を得て、等しく物好きらしい眼を、渡井のしゃくり上げる肩のところから、手拭の下に真赤にしている横顔へと向けた。

とにかく柿江はまた一つのセンチションを惹ひき起した。柿江はじつと渡井を見やりながら、今までの感傷的な顔色をやわらげて、なだめるような笑顔を見せた。

「はははは、何もそう泣かんでもいいよ。……その男は気の毒な死に方をしたけれども、いわば自分の大切な使命のために死んだんだから、悔くむこともなかったろう……」

「それだでおのこと気の毒だ、わし」

と渡井が涙の中から無分別げな、自分の感情に溺れきつたような声を出した。男の生徒たちは、「おおげさなまねをする奴だ」というように、柿江の笑いに同じた。

その時尋常四年生の教室——それは壁一重に廊下を隔てた所にあるのだが——がきゆうに賑やかになって、砂きしみのする引戸を開くとがやがやと廊下に飛びだす子供らの聲あしお音がうるさく聞こえだした。めいめいが硯すずりを洗いに、ながしに集まるのだった。柿江は話の腰を折られて……

「先生その人はそれからどうかして生き返るんだろう」

と一人の男生がその騒がしさの中から中腰に立ち上って柿江に尋ねた。

終業の拍子木が鳴った。

「いや死んでしまったんだ」

大半の生徒は拍子木の声に勇みを覚えたように、机の蓋ふたをばたんばたんと言わせて風呂敷包を作りはじめる。その中にも今まで聞いていた話の後を知ろうとあせるものがあつた。

「先生、先生はどうしてその人を谷底から上に持ち上げた？」

「先生か、先生は持ち上げられなかつたから、一人でがけ崖を這い上って、村の人に告げた」

「先生、その旗を見せてくれえよ」

柿江は話の都合上、自分は一枚の珍らしい旗を持っている。その旗の持主がまた珍らしい人なのだと言置きをして、その夜の修身を語りはじめたのだった。

「よしよし次の晩旗も見せてやるし、先生がその男の死んだのを村の人に告げてからの話もしてやる。村の人がどれほどその男の偉さに感心したか……」

柿江はそういうと、耳を聳かがえらせるような騒々しさの中で、今までの話を続けたい気持ちにされていた。自分でも思い設けぬような戯曲的な光景があとから口を衝いて出てきそ

うな気がした。その時突然、

「先生それは皆んな作り話だなあ」

というものがあつた。柿江はぎよつとした。そしてその声のする方を見ると、少し低能じみた、そんな見分けのつきそうにもない小柄な少年の戸沢だった。柿江は安心して大胆になつた。

「いいや、本当も本当、先生が自分で遇つてきた出来事なんだ」

この会話で教室内の空気がちよつと鎮しずまつた。生徒たちは隙でも窺うかがうように柿江の顔つきに注意した。

「だつて俺今夜こけへ来る時、その人に往来で遇つたもの」

柿江はしまった……と思つたが、思つた瞬間に努力したのはそれを顔色に現さないことだつた。そして咄嗟とつさに、習慣的になつている彼の不思議な機智は彼をこの急場からも救いだした。

「戸沢は夢でも見たんだろう。……あ、解つた。戸沢はその男の似而非者にせものに遇つたんだな。その男のことが先生の生れた釧路の方で評判になると、似而非者が五六人できて、北海道をあちこちと歩き廻るようになったんだ。……それに違いない。それにお前は遇つたんだ」

その少年はまだ疑わしそうな顔をしながら黙ってしまった。そしてそこにはもう、その問題をなお追究しようというような生徒はなかった。一同は立ったりいたりして帰り支度にせわしかつたから。

柿江はとにかく戸沢が疑わしげながら納^{なっとく}得するのを見ると、自分の今まで能弁に話して聞かせていたまったくの作り話がいよいよ本当の出来事のように思えだした。

その貧民小学校の教師をして農学校に通う学生の二三人が自炊している事務所を兼ねた一室に來ると、尋常四年を受持つている森村が一人だけ、こわれかかった椅子に腰をかけて、いつでも疲れているような瘦せしよびれた小さな顔を上向き加減にして、股火鉢を置いていた、干からびた唇を大事そうに結びながら。

煤^{すす}けたホヤのランプがそこにも一つの簡単な鉄^{はりがね}条の自在鍵にぶら下って、鈍い光を黄色く放っていた。柿江はそれを見ると、ふとまた考えてはならぬものを考えだしてしまっていた。自分だけに向って送ってよこす女の笑顔、自分と女とのほかには侵入者のない部屋、すべてを忘れさす酒、その香い、化粧の香い……そしてそれらのすべてを淫^{みだ}らに包む黄色い夜の燈火。……柿江は思わずそれを考えている自分の顔つきが、森村という鏡に映つてもいるように、素早くその顔を窃^{ぬす}みみた。しかし森村の顔は木彫^{きぼり}のようだった。

「おい貴様この包を帰り途みちに白官舎に投げこんでおいてくれないか」

と何げない風にいながら、柿江はぼろぼろになった自分の袴を脱いで、それに書物包みをくるみ始めた。森村は見向きもせず前どおりな無表情な顔を眼の前の窓の鴨居かもいあたりに向けたままで、

「これからまたどこかに行くんか」

とぼんやりいった。柿江は、

「うむ」

と事もなげに答えるつもりだったが、自分ながら悒鬱ゆううつだと思われるような返事になっていた。

「そこにおいとけ」

ややしばらくして森村がこういった。

まだ生徒たちは帰りきらないで、廊下で取組合いをするものもあるし、玄関に五六人ずつかたまつて、教師といっしょに帰ろうと待ちながら、大声でわめいているものもあるし、煤掃すすはきのような音を立てて、教室の椅子いす卓つくえを片づけているものもあった。柿江が戸外に出れば、「先生」と呼びかけて、取りすがってくる生徒が十四五人もいるのはわかりきつ

ていた。柿江はそわそわした気分で、低い天井とすれすれにかけてある八角時計を見た。もう九時が十七分過ぎていた。しかしぐずぐずしていると、他の教師たちがその部屋にはいつてくるのは知れている。それは面倒だ。柿江は已む^やを得ず、

「それじゃ貴様頼むぞ」

と言いつ残して、留守番の台所口に乱雑に脱ぎ捨ててある教師たちの履物^{はきもの}の中から、自分の分を真暗らな中で手さぐりに捜しあてて、戸外に出た。

戸外は寒く真暗らだった。するとそこで柿江は自分の顔がきゆうにあつくなくて、酔った時のように赤らんだのを感じた。心臓が音を立てんばかりに強く打ちだしたのを感じた。なるべく生徒の眼に触れぬようと、生垣に沿うて素早く歩きだしたが、小さな生徒たちの鋭い眼はもちろんそれを見のがしはしなかった。柿江の身のまわりには鈴なりに子供たちがからみついていた。

「ゆんべはおつかなかつたよ、先生、酔っぱらいのおやじが、両手を拡げて追ってくるんだもの」

「なあ」

「先生は今夜わしの方へと廻っておくれよ」そのほかいろいろな言葉が一度に、不思議な

後ろめたさに興奮している柿江の耳に騒々しく響いてきた。柿江はわざと例のとぼけたような声を取りだして、生徒たちからなるべく早くのがれようと試みつつ、暗い貧乏町の往来に出た。

自分にまつわりついている生徒たちのほかに、そこにもここにも子供がいて、ややともすると柿江に話しかけようとした。

「先生は今日は用事があるんだから、明日の晩……じゃない、明後日の晩には皆なを送つてやるから、今日はめいめいで帰つてくれ、な。おい、いかんよ、そんなにからまりついちや」

そんなことを言つて柿江はどうとう子供たちから離れて夜道を西へ向いて急いだ。

創成川を渡ると町の姿が變つてきゆうに小さな都会の町らしくなっていた。夜寒ではあるけれども、町並の店には灯が輝いて人の往来も相当にあつた。

ふと柿江の眼の前には大黒座の絵看板があつた。薄野遊廓の一隅に来てしまったことを柿江は覚つた。そこには一丈もありそうな棒矢来の塀と、昔風に黒渋で塗られた火の見櫓があつた。柿江はまた思わず自分の顔が火照るのを痛々しく感じた。

ガンベだった、その奇怪な世界の中に柿江を誘つていったのは。おそらく彼は何んの意

味もない酔興から柿江をそこに連れていったのだろう。しかし柿江にとつては、この上もない迷惑なことであつて、この上もない蠱惑こわくてき的な冒険だつた。「俺はいやだよ、よせよ」と自分からみついてくるガンベの鉄のような力強い腕を払い退けながら、柿江の足は我にもなくガンベの歩く方に跟ついていった。二人はいつの間にか制帽ふとこを懐ろの中にたくしこんでいた。昼間見たら垢あかび光かりがしているだろうと思われるような、厚織りの紺のれんの暖簾のれんを潜くつた。白官舎のとは反対に、新しくはあるけれども、踏むたびごとにしないきしむ階子段を登つて、油じみと焼けこげだらけな畳の上に坐らせられた。眼をそむきたいほど淫らな感じのする女が現われて、べたべたと柿江の膝の上に乗るかからんばかりに横とんびに坐つた。ガンベが何か大声で一人ではしやいでいるうちに酒が出た。柿江は早く自分を忘れたいばかりに、さされる盃を受けつづけた。飲むというほど飲んだことのない酒はすぐ頭へとひどくこたえだした。眼の中が熱くなって、そこに映るものが不断とは変つてきた。こんな場合、当然起つてくべきはずの性慾はますます退縮して、ただわくわくするような興奮で身の内が火のように震えだした。そして時々氷が……それは言葉どおりに氷だつた……氷の小さい塊が溶けながら喉許から胸の奥にと薄気味悪く流れ下つた。

「どうだ、ありがたかろう」

床の正面に、半分枯れかかった樺色と白との野菊を生けて、駄菓子でこね上げたような花瓶のおいてあったのを、障子の隅におろしてしまつて、その代りに自分の懐ろから制帽を取りだして恭しく飾りながら、ガンベが拝むような様子をしてこういつたつけ。柿江はいやな夢でも見ているような心持になつたが、どういうつもりだったか、奇怪にも我れ知らず笑いだした。大声を上げていつまでもげらげらと。女たちがそれをおかしがるとなお笑つた。

柿江は大黒座を左に折れて、遊廓の大門を大急ぎで通り越しながら、こんなことを不安に満たされた胸の中で回想していた。

柿江は自分が何の気なしにすることが、どうかすると人には頓狂とんきやうに見えて、それが一つの愛嬌あいきやうにされているのを意識していた。あの時もそんな気持が動いていたのだなと思つた。取り返しのつかないようないやな心持がした。どうせああいう種類の女だ。かまうものかとも思つた。それから今考えても自分に愛想の尽つきるような気持を起させるのはその翌日のことだ。眼を覚ますと、もう朝日がいっぱいに射していたが、小恥かしい気分の中で真先に意識に上つてきたのはガンベのあの醜みにくい皮肉な片眼の顔だった。彼奴は憎々しいほくそ笑みを今ごろどこかで漏もらしているのだらう。しかも話の合う仲間の処に行

つて、三文にもならないような道徳面どうとくづらをして、女を見てもこれが女かといったような無頓着さを装っている柿江の野郎が、一も二もなく俺の策略にかかって、すっかり面皮つらのかわを剥がれてしまったと、仲間をどつと笑わすことだろう。そう思うと柿江は自分というものがめちやくちやになつてしまったのを感じた。そういえばかんと日の高くなつた時分に、その家の鬩しきいを跨またいで戸外に出る時のいうに言われない焦躁しょうそうがまのあたりのように柿江の心に甦よみがえつた。

それでも柿江の足は依然として行くべき方に歩いていて、いつの間にか彼は遊廓うまごやしの南側まで歩いてきていた。往來の少ない通りなので、そこには枯れ枯れになつた苜蓿うまごやしが一面に生えていて、遊廓との界に一間ほどの溝みぞのある九間道路が淋しく西に走つていた。そこを曲りさえすれば、鼻をつままれそんな暗さだから、人に見尤みとがめられる心配はさらになつた。柿江は眼まぐろしく自分の前後うかがを窺うかがつておいて、飛びこむようにその道路へと折れ曲つた。溜息ためいきがひとりでに腹の底から湧いてでた。

何、かまうものか。ガンベは日ごろからちやらつぽばかりいつている男だから、あいつが何んといったつて、俺がそんなことをしたと信ずる奴はなからう。もしガンベが何か言いだしたら俺はそうだガンベのいうとおり昨夕薄野に行つて女郎というものと始めて寝

てみたど逆襲してやるだけのことだ。それを信ずる奴があつたら「へえ柿江がかい」と愛嬌にしないとも限らないし、しかしたいの奴は「ガンベのちやらつぽこもいい加減にしろ」と笑つてしまふに違ひない。こう柿江は腹をきめて何喰わぬ顔で教室に出てみた。

ガンベも教室に来ていた。が彼は昨夜のことなどはまったく忘れてしまつたようなけろりとした顔をしていた。柿江はガンベを野放図のほうずもない男だと思つて、妙なところに敬意のよなものを感じさせした。そしてその日はできるだけさしひかえて神妙まじにしていた。いつガンベに小賢こぎかしいという感じを与えて、油を搾しぼられないとも限らない不安がつき纏まとつて離れなかつたから。

「俺はその時、こんな経験は一度だけすればそれでいいと決めていたんだ。まったくそれに違ひないのだ。これ以上のことをしたら俺はたしかに墮落だらくをし始めたのだといわなければならぬ」

淋しい道路に折れ曲るときゆうに歩度をゆるめた柿江は、しんみりした気持になつてこゝろ自分にいい聞かせた。彼は始めて我に返つたように、いわば今まで興奮のために緊張しきつていたような筋肉をゆるめて、肩を落しながらそこらを見廻わした。夜学校を出た時真暗らだと思われていた空は實際は初冬らしくこうこうと冴えわたつて、無数の星が一面

に光っていた。道路の左側は林檎園りんごえんになつていて、おおかた葉の散りつくした林檎の木立が、高麗垣の上にうぎうぎするほど枝先を空に向けて立ち連なつていた。思いなしか、そのずつと先の方に恵庭えにわの奇峰が夜目にもかすかに見やられるようだ。柿江にはその景色は親しましいものだった。彼がひとりで散策をする時、それはどこにでもいて彼を待ち設けている山だった。習慣として彼は家にいるより戸外にいる方が多かつた。そして一人である方が多かつた。そういう時にだけ柿江は朋輩たちの軽い軽侮けいぶから自由になつて、自分で自分の評価をすることができたのだつた。慣れすぎて、今は格別の感激の種にはならなかつたけれども、それだけ札幌の自然は彼の心をよく知り抜いてくれていた。

「そうだ、もう帰ろう」

柿江はかなり強い決心をもつて、西の方を向いてゆるゆると歩みを続けた。そして道路の右側にはなるべく眼をやるまいとした。

しかしそれはできない相談だつた。窓という窓には眼隠しの板が張つてあつて、何軒となく立ちならんでいる妓楼ぎろうは、ただ真黒なものの高たか低ひくの連なりにすぎないけれども、そのどの家からも、女のはしやぎきつた、すさんだ声^{こゝろ}が手に取るように聞こえていた。本通りの大まがきの方からは、拍子をはずませて打ちだす太鼓の音が、変に肉感と冒険心とを

そそりたてて響いてきた。ただ一度の遊興は柿江の心をよけい空想的にして、わずかな光も漏らさない窓のかなたに催されている淫蕩いんとうな光景が、必要以上にみだらな色彩をもつて思いやられた。彼よりも先に床にあつて、彼の方に手をさし延べて彼を誘つた女、童貞であるとの彼の正直な告白を聞くと、異常な興味を現わして彼を迎えた女、少しの美しさも持つてはいないが、女であるだけに、柿江がかつて触れてみなかった、皮膚の柔らかさと、滑らかさと、温かさと、匂いともつて彼を有頂天にした女、……柿江はたんなる肉慾のいかに力強いかを感じはじめねならなかった。彼は自分が恐ろしくなつた。自分がこんなものだとはゆめにも思わなかつたのだから。これはいけないとみずからをたしなめながら、すがりつくように左の方の淋しい林檎園を見入つたけれども、それは何んの力にもならなかつた。自分の家のことを大急ぎで思いだしてみた。何んの感じもない。白官舎のものたちの思わくを考えてみた。何んの利き目もない。夜学校の教師たる自分の立場を省みてみた。ところが驚くべきことには、そこにいる女の生徒の顔や、襟足や、手足が、今までにもある感じを与えられていないことはなかつたが、すぐ無視することのできたそれらのものが……柿江は本当に恐ろしくなつてきた。……全身は悪寒おかんではなく、病的な熱感で震えはじめていた。頭の中には血綿らしいものがいっぱいにつまんで、鼻の奥まで塞

がつていた。頭の重さというものが感ぜられるほど何かでいっぱいになっていた。そして柿江が何かを反省しようとする、弾ね返すように断定的な答えを投げつけてよこした。たとえば、世の中にはずつと清潔な心と自制心を持った男がと考える暇もなく、それは嘘だ、皆んな貴様と同様なのだ、たぶん貴様以上なのだ。法螺吹きのくせに正直者の貴様には今までそれが見えなかったただけだ、と彼の頭は断定的に答えるのだ。彼はそしてその答えに一言もないような気がした。

それなら行こう、と柿江が実際自分の体を遊廓の方にふり向けようとする、まあ待つてくれと引きとめるものがどこかにいた。女に引きとめられたらそんな感じがするのだろうか、その力は弱いけれども、何かしら没義道もぎしうにふりきることができなかつた。今度が二度目だ。二度行つたら三度行くだろう。三度行つたら四度、五度、六度と度重なるだろう。どこからそんなことをする金が出てくるか。そのうちにすべての経緯いきざつが人に知れわたつたらいつたいどうする。

柿江はきゆうに頭から寒くなつた。何んといつてもそれは重大な問題だ。柿江は自分がどうい骨組で成り立っているかを知りぬいているのだから。彼奴は妙に並外れた空想家で、おまけに常識はずれの振舞いをする男だが、あれできまりどころは案外きまつていて、

根が正直で生れながらの道徳家だ、そういう印象を誰にでも与えている。彼はそれを意識していた。そしてそれに倚りかかって自分というものの存在を守っていた。万一、人々が彼に対して持っているこの印象を我から進んで崩したら、彼は立つ瀬がなくなるのだ。

柿江はいつの間にか遊廓に沿うてその西の端れまで歩いてきてしまっていた。そこには新川という溝のような細い川がせせらぎを作つて流れている、その川音が上ずった耳にも響いてきた。柿江はその川を越して遊廓から離れるべきだったのに、離れる代りに、また東の方に向いて元と来た道を歩きはじめた。柿江の心がどつちに傾いてもその足は目指すところを離れようとはしなかった。のみならず、彼は吸い寄せられるように、遊廓に沿うて流れている溝川の方へとだんだん寄つていつて、右手の爪を血の出るほど深くぶつりぶつりと噛みながら少し歩いては立ち停り、また少し歩いては立ち停つた。そしてとうとう一本だけ渡してある小さな板橋の所に来て動かなくなつてしまつた。

柿江は自分をそこに見出すと、また窺むようにきよときよとあたりを見廻した。人通りはまったく途絶えていた。そこいらには煙草の吸殻や、菓子のであつたらしい折木や、まるめた紙屑や、欠けた瀬戸物類が一面に散らばっていた。柿江はその一つずつに物語を読んだ。すべてがすでに乱れきつた彼の心をさらにときめかすような物語だった。

突然柿江は橋の奥の路地をこちらに近寄ってくる人影らしいものに気がついた。はつと思つた拍子に彼は、たつた今大急ぎでそこに来かかったのだというような早足で、まっしぐら地に板橋を渡りはじめていた。そして危くむこうからも急ぎ足で来る人——使い走りをするらしい穢きたない身なりの女だったが——に衝きあたろうとして、その側を夢中ですりぬけながら、ガンベといつしよに来た時のように制帽を懐ろにたくしこんだ。廓内の往来に出ると、暖かい黄色い灯の光に柿江は眩まぶしく取り巻かれていた。彼は慌てて袖の中を探つた。財布はたしかに左の袖の底にあつた。今夜はよその家にはいるのが得策だと心であせつたが、どういふものかそれができないで、まずいことだとは知りながら、彼はひとりでにガンベに誘いこまれた敷波楼の暖簾のれんを飛びこむようにして潜つた。

「日本服を改良しましょう、すぐしましょう」と書いた旗が、どういふきつかけだったか、その瞬間に柿江の眼にまざまざと映つて、それが見る間に煙のようにたなびいて消えていった。

* * *

「星野清逸兄。

「俺はやつぱり東京はおもしろい所だと思つよ。室蘭むろらんか、函館はこだてまで来る間に、俺は

綺麗さっぱり北海道と今までの生活とに別れたいと思って、北海道の土のこびりついて
いる下駄を、海の中に葬ってくれた。葬っても別に惜しいと思うほどの下駄ではむろん
ないがね。あれは柿江と共通にはいていたんだが、柿江の奴今ごろは困っているだろう。
青森では夜学校の生徒の奴らが餓^{せんべつ}別にくれた新しい下駄をおろして、久しぶりで内地
の土を歩いた。けれどもだ、北海道に行つてから足かけ六年内地は見なかったんだが、
ちつとも變つてはいない。貴様にはまだ内地は Virgin 《ヴァージン》 soil 《ソイル》な
んだな。

「郷里にもちよつと寄つたがね、おやじもおふくろも、額の皺が五六本ふえて少しな
びたくらいの変化だった。相変らずぼそぼそと生きるにいいだけのことをして、内輪に
内輪にと暮している。何をいつて聞かせたつてろくろく分りはしないのだから、俺は札
幌の方を優等で卒業したから、これから東京に出て、もっとえらい大学で研^みぎをかける
んだといい聞かせておいた。何しろ英語を三つ四つ話の中にまぜれば、何をいつても偉い
ことのように聞こえるんだから、じつに簡単に気持がいいよ。たとえばこういう具合だ。
『おとうさまは知るまいが東京には University 《ユニヴァーシティ》』という大学があつ
て、象山先生の学問に輪をかけたような偉い学問ができる。そこに行く俺でも Stude

nt《ステューデント》という名前を貰って、Sociology《ソシオロジイ》and《アンド》
English《イングリッシュ》grammar《グラマー》and《アンド》Chinese《チャイニー
ズ》Literature《リタラチャー》というようなむずかしいものを習うだ。どうだね、も
う二三年がところ留守にしてもいいすら』

『げえもねえことを……象山先生より偉くなったらどうする気だ』

俺の方では佐久間象山より偉い人間は出てこようがないとしてあるんだ。けれどもだ、
おやじは俺が大の自慢で、長男は俺の後嗣あとつぎ相当に生れついているが、次男坊はやくぎ
な暴れ者だで、よその空でのたれ死でもしくさるだろうと、近所の者をつかまえて眼を
細くしている。おふくろは六年も留守にしていた俺がいとしくって手放しかねるようだ
が、何一つ口を出さない。そして土間の隅で洗いものなどをしながら、鼻水を鹽たらひに垂ら
して、大急ぎですすり上げたりしていた。

「けれどもだ、何をいうにも東京なら近いからということだ、俺はどうとう郷里を出た。
Studentになると学資ぐらいは自分で働きたすのだといって聞かせたら感心していたよ
うだった。

「東京は俺にとっては Virgin soil だ。俺は真先に神田の三崎町にあるトウキョー館に

行つて円山さんに会つた。ちょうど昼飯時だったが、先生、台所の棚の上に膳を載せて、壁の方に向いて立つたなりで飯を喰つていた。湯づけにでもしていたのだろう、それがかつこむ音が上り口からよくきこえた。東京にこんなことをやって生きている人間があるろうとは俺は思わなかつたよ。トウキンビー館といえは、札幌の演武場くらいを俺は想像していたんだが、行つてみたら、白官舎を半分にしてかび黴を生やしたような建物だった。俺もやはり英語に出喰わすと、国のおやじにひけを取らない田舎者だと思つて感心した。『ダントン小伝』を寄稿したのは俺だといつて自分を紹介したら、円山さんはぶつちようづ仏頂ら面に笑い一つ見せないで、そんなら上れといった。俺もそんなら上つた。とにかく西洋館で、——とにかく西洋窓のついた日本座敷で、日曜学校で使いそうな長い腰かけと四角なテーブルがおいてあつた。円山さんというのがいつたい西洋窓のついた日本座敷みたいに、こちんこちんした無愛想な男だ。『何しに来た』、『修業に来た』、『何んの修業に来た』、『社会問題の修業に来た』、『学資がないんだろう』、『そうだ』、『俺にしゅうせん周旋しろというのか』、『まあそうだ』、『家は貧乏か』、『信州の土百姓だ』、『俺たちといつしよに働く気か』、『それはまだ分らない』、『その答はよし』
 (なんだべらぼうめ——べらぼうという言葉は東京の書生がことごとく使う言葉で、俺

はその後に使い覚えた。けれどもだ、この場合の俺の心持を現わすにはじつに都合がいい。本当は俺はその時、円山さんは恐ろしく高飛車に出たもんだなど、胸の中で長たらく感心していたんだ)。円山曰く『どこで修業するつもりだ』、『W専門学校に行つて矢部さんの講義を聞こうとおもう』、『札幌から紹介状でも貰つてきたか』、『来ん』、『じゃ俺が書くからこれから行つてみる』……辞儀を一つする……貰いものの下駄をはく……歩く(ここは長し)……早稲田という所は田圃たんぼの多いところだ。名詮みようせんじし自じ称ようだ。……大隈の大きな屋敷を外から見た。W専門学校に着いた……他の奇なし。

「矢部さんは円山さんよりよほど愛想がいい。写真で片眼のべっかんこなのは知つていたが、ひどい若白髪だ。これはだいぶクリスチャンらしかった。俺も相当 鞠躬きつきゆうじよ如じよたらざるを得なかつた。知合いの信者の家に空間があるかもしれないからいつしよに出かけてみようといつて、学校から七八町くらいだ、表書きの家は、そこに連れていつてくれた。そこのお内儀さんが矢部さんを見るとマルタがキリスト督とくにでも出喰わしたように頭を下げるので、俺は困つた。俺は白状すると矢部さんよりもマルタの方によけい頭が下げたいぐら이었다から。東京の女は俺の眼から見ると皆な天使のようだぞ。

「俺の部屋は四畳半で二階の西角だ。東隣りは大きな部屋だが畳を上げて物置になつて

いて、どういふものか鼠の奴がうんという。夜になると盛んに遊ゆうよくをやって賑にぎやかでいい。けれどもだ、俺の所には喰うものはないからややもすれば足の先および耳鼻の類が危険だから、俺はかじられないだけの用心はしている。これより先、じつは俺は足の先をすでにかじられかかったんだ。けれどもだ、縁の先には大きな葡萄ぶどう棚があつて、来年新芽を吹きだしたら、俺は王おうこう侯の気持になれそうだ。

「何しろ学校で袴はかまと草履ぞうりをはかかないのは俺だけだ。足の裏が丈夫なら草履ははかなくともいいが袴ははかなければいかんといやがる。けれどもだ、袴をはけとは規則書に書いてないから勝手じゃないかと俺はいうた。足の裏はもとより丈夫だが、脛すねつぶし——というものがあるかないか、腕つぶしがある以上はありそうなものだ——だつて丈夫だからな。俺はこれをサンキロテイズムに対してサンバカミズム (Sanskamism) と呼ぶだ。」「矢部さんの講義は何んといつても異色だ。斬ざん然ぜん足角を現わしている。経済学史を講じているんだが『富国論』と『資本論』との比較なんかさせるとなかなか足角が現われる。馬脚が現われなければいいなと他人ながら心配がるくらいだ。図書館の本も札幌なんかのと比べものにならない。俺は今リカードの鉄則と取っ組合をしている。」「さてこれからまた取っ組むかな。

「大事にしろよ。」

十月二十五日夜

* * *

「ガンベさん、あなた今日から三隅さんの所に教えにいらしたの」

渡瀬は教えに行つた旨むねを答えて、ちようど顔のところまで持ち上げて湯気の立つ黄金色を眺めていた、その猪口ちよこに口をつけた。

「おぬいさんって可愛い方ね」

そういうだろうと思つて、渡瀬は酒をふくみながらその答えまで考えていたのだから、

「あなたほどじゃありませんね」

とさそくに受けて、今度は「憎らしい」と来るだろうと待っていると、新井田の奥さんは思う壺にらどおり、やさ睨にらみをしながら、

「憎らしい」

といった。そこで渡瀬はおかしくなつてきて、片眼をかがやかして鬼おにがわら瓦わらのような顔をして笑つた。笑う時にはなお鬼瓦おにがわらに似てくるのを渡瀬はよく知っていた。

「この女は俺の顔の醜いみにくのを見て、どんなに気をゆるしてふざけても、遠慮からめつたなことはしないくらいに俺を見くびっているな。醜い奴には男の心がないとでも思っているのか。ひとついきなり嚙かじりついてどのくらい俺が苦しめられているか思い知らしてやろうかしらん」

渡瀬は真剣にそうおもうことがよくあった。そのくらい新井田の夫人は渡瀬に対して開けっ放しに振舞ったし、渡瀬は心の中で、ありえない誘惑に誘惑されていたのだ。この瞬間にも彼にはそうした衝動が来た。渡瀬は笑いからすぐ渋い顔になった。

「あら変ね、何がそんなにおかしいこと」

といいながら、銚ちようし子の裾の方を器用に支えて、渡瀬の方にさし延べた。渡瀬もそれを受けに手を延ばした。親指の股に仕事いぼ疣いぼのはいった巖丈な手が、不覚にも心持ち戦ふるえるのを感じた。

「でもおぬいさんは星野さんに夢中なんですよってね」

女郎じようろう上りめ……渡瀬は不思議に今の言葉で不愉快にされていた。「おぬいさん」と

「夢中」という二つの言葉がいつしよに使われるのが何んということなしに不愉快だった。人の噂からおぬいさんを弁護する、そんなしやら臭い気持は渡瀬には頭からなかったけれ

ども、やはり不愉快だった。

「焼けますかね」

渡瀬は額越しに睨みかえした。

「それはお間違いでしょう」

今度は奥さんの方が待ち設けていたようにびったりと迫ってきた。

「ははあん、この女はやはり俺をすっかり虜にした気で得意なんだが、おぬいさんに少々プライドを傷けられているな……ひとつやっつけてやるかな」

渡瀬の胸の中でいたずら者がむずむずし始めた。奥さんが、ごくわずかの間であつたけれども、苦界というものに身を沈めていて、今年の始に新井田氏の後妻として買い上げられたのだという事実は渡瀬の心をよけい放埒にした。うんと翻弄してやろう……もしも冗談から駒が出たら——何かまうもんか、その時はその時のことだ……という万一の僥倖をも、心の奥底では度外視してはいなかった。

「凶星をさされたね」

渡瀬はまたからからと笑って、酒に火照ってきた顔から、五分刈が八分ほどに延びた頭にかけて、むちやくちやに撫でまわした。

「ところが奥さん、あれは高根の花です。ピュリティーそのものなんです。さすがの僕もおぬいさんの前に出ると、慎^{つつし}みの心が無性に湧き上るんだから手がつけられない……そんなに笑つちやだめですよ、奥さん、それはまったくの話です。……何、信用しない……それはひどいですよ、奥さん。僕なんざあともおぬいさんのマツチではない。マツチですか。マツチという相方かな（これはしまったと思って、渡瀬は素早く奥さんの顔色を窺^{うかが}ったが、案外平気なので、おつかぶせて言葉を続けた）相手かな……相手になれないと諦める気ばかり先に立つのです。おぬいさんの前に出ると、このガンベもまったく前^{ぜん}非^びを後悔しますね」

「そんなに後悔することがたくさんおありなさるの」

「ばかにしちやいけません。ばかにしちやあ……」

渡瀬はまたあとを高笑で塗りつぶした。この女は生れてから満足した男に出遇ったことがないに違いない。ずいぶんいろいろな男の手から手に渡ったらしいのに、それだからたまには不愉快なほど人擦れがしているくせに、どこかさぐり寄るような人なつつこいところも持っている。こういう女に限って若い男が近づくと、どんなにしゃんとしているように見えても、変に誘惑的な隙を見せる。おまけにこの女は少し露骨すぎる。星野に対して

はあの近づきがたいような頭の良さと、色の青白い華きゃしゃ車な姿とに興味をそそられているらしいし、俺を見ると、遠慮つ気のない、開けっ放しな頑強さにつけ入ろうとしている。

そのくせいい加減なところに埒を造つて、そこから先にはなかなか出てこようとほしない。いわば星野でも、俺でも、そのほかあの女の側に来る若い男たちは、一人残らず体ていのいいおもちゃにされているんだ。おもちゃにされるのが不愉快じゃないが、それですまされたのでは間ま尺しゃくに合わない。埒に手をかけて揺ぶつてやるくらいの事はしても、そしてこの女がぎよつとして後すぎりをするくらいなことになつても、薬にはなるとも毒にはなるまい。渡瀬は片眼をかがやかしながら、膳から猪口を取り上げて、無遠慮に奥さんの方にそれをつきだした。奥さんは失礼だという顔もせず、すぐに銚子を近づけた。

「奥さん、あなたも杯を持つてきませんか。一人で飲んでるんじゃない気がひけますよ」

渡瀬はそう無遠慮に出かけてみた。

「私、飲めないもの」

酌をしながら、美しい眼が下向きに、滴り落ちる酒にそそがれて、上瞼の長い睫毛まつげのやや上反りになったのが、黒い瞳のほほ笑みを隠した。やや荒すざんだ声で言われた下卑たその言葉と、その時渡瀬の眼に映つた奥さんの睫毛まつげの初々しきとの不調和さが、渡瀬を妙に調

子づかせた。

「飲めないことがあるものか、始終晩酌の御相伴はやっているくせに」

「じゃそれで一杯いたたくわ」

渡瀬はこりやと思つた。埒がゆさゆさと揺ぶられても、この女は逃げを張らないのみか、一と足こつちに近づこうとするらしい。構えるように膝の上に上体を立てなおして、企みもしないのに、肩から、膝の上に上向きに重ねた手の平までの、やや血肥りな腕に美しい線を作つて、ほほ笑んだ瞳をそのままこちらに向けて、小首をかしげるようにしたその姿は、自分のいいだした言葉、しようとしていることを、まったく知らない無邪気さかとみえるほど平気なものだった。渡瀬に残されたただ一つのは、どたん場で背負投げを喰わない用心だけだ。

「いいんですか」

「何がよ」

すぐこういう答えが出た。

「ははは、何がっていわれればそれまでだが、じゃいいんですね」

「だから何がっていつてるじゃありませんか」

「だから何がつていわれればそれまでだが……それまでだから一つあげましょう。循環小
数みたいですね」

もとよりそこに盃洗などはなかった。渡瀬は膳の角でしずくを切つて……もう俺の知つたことじゃないぞ……胡座あぐらから坐りなおつて、正面を切つて杯を奥さんの方にさしだししかつた。

「一人で飲んでいちや気が引けるとおつしやられるとね」

と落着いた調子でいいながら奥さんは踏たらいもせず手を出すのだった。

「御同情いたみ入ります」

渡瀬は冗談じゃないぞと心の中でつぶやきながら急場で踏みこたえた。そして杯にちよつと黙礼するような様子をして手を引きこめた。

「あら」

「味が変わつているといけないと思つてね、はははは……奥さん、僕はこれで己惚うぬぼれが強いから、たいていの事は真に受けますよ。これから冗談はあらかじめ断つてからいうことにしましょう」

「まったくあなたは己惚れが強いわねえ」

といいきらないうちに奥さんは口許に袖口を持って行って漣さざなみのように笑った……眼許にはすぎるほどの好意らしいものを見せながら。思ったより手ごわいぞと考えつつも、渡瀬はやはりその眼の色に牽ひかれていた。そして奥さんの今の言葉は、渡瀬を大きなだっ子にしていつているもののようにも取れば取れないこともなかった。渡瀬はしかし面倒臭くなってきた。いわば結局互に何んの結果に来るものではないのを知り抜いていながら、書いて不意な結果でも来るかのごとくめいめいの心に空想を描いて、けち臭い操りっこをしているのが多少ばかりしくなってきた。そして渡瀬の腹には、どうせほんものにはなる気づかいはないという諦めも働いていないではなかった。おまけに新井田氏の帰宅が近づいているのも考えの中に入れなければならなかった。

ちようどその時、渡瀬の後ろのドアがせわしなく開いたとおもうと、そこに新井田氏が小柄な痩せた姿を現わしたらしかった。渡瀬は前のように考えながらも、やはり奥さんに十分の未練を持っている自分を見出ださねばならなかった。なぜかというと新井田氏はいつてきた瞬間に、その眼は思わず鋭くなって、奥さんが良人をどういう態度で迎えるかを観察するのを忘れなかったからだ。

「お帰りなさいまし」

と簡単にいうと、奥さんは体全体で媚こびながらいそいそと立ち上った。渡瀬が注意せず
にいられなかったのは立ち上った奥さんの節ふしなが長に延びた腰から下に垂れ下っている前まえだ
垂れの、うにいわれないなまめかしい感じだけだった。そんなものが眼に焼きつくほど
に、奥さんは平生と少しも異ならない奥さんにすぎなかった。彼は坐りなおした自分の膝
頭を見やりながら俯つ向いて、苦笑いの影を唇に漂わせるほかはなかった。

強い黄色い光を部屋じゆうに送る大きな空気ランプの下にいても、新井田氏は血色の悪
い人だった。一種の空想家らしくきらぎらとかがやく大きな眼が、強度の眼鏡越しに、す
わり悪く活き活きと動いた。

「どうも失礼。おはじめでしたか。え、どうぞ。ちよつと用が片づかなかつたもんですか
らおそくなつて。……日が短かくなりましたなあ。それに戸外はずいぶん寒うござんすよ」
新井田氏は蛇の皮のように上光りのする綿入うわの上ん前を右手できりりと引張りつけなが
ら奥さんの今まで坐っていたところにきちんと坐った。そして煙管筒を大きな音をさせて
抜き取ると、女持ちのような華きやしや車な煙管を摘みだした。

十分ほどの後、新井田氏と渡瀬とは夕食をすませて、二人の間に研究室と呼びならさ
れる暗室のような窓のない小部屋に、四角な粗末な卓を隔てて向いあっていた。小さなラ

ムプのえがらつぽいような匂いと、今まで人気のなかったための寒さどが重くよどんでいた。

渡瀬は、代数の計算と下手な機械のダイヤグラムとが一面に書きつづられているフールス・キャップ四枚を自分の前において、イーグル鉛筆を固く握りしめながら新井田氏に項式の説明を試みているのだった。新井田氏はそのころ流行し始めた活動写真機に興味を持って、その研究なるものをやっていたのだ。自分の手で発声蓄音機を組立ててみたいというのが氏の野心だった。映画用のフィルムの運動の遅速によって蓄音機の方の速度が調節されるようにするのがあたり前だと渡瀬は考えた。しかし日本に來ている蓄音機は簡単な機械であるために、勢い蓄音機の方の改造は諦めて、それが有する速さに応じて写真機の方の速度を調節するように研究せねばならなかった。これならしかし割合に簡単なことで、渡瀬の工夫になる小さな中間機を使用すれば、実際においてある程度までの効果を挙げることができたのだ。新井田氏はその成功に喜び勇んで早く実用的な機械の製作にかかりたいとあせるのだけれども、渡瀬にとつてはそれはさして興味のあることではなかった。渡瀬は蓄音機の機械をどれだけ複雑にすれば、最小限度の複雑化によって最大の効果を挙げうるかを数理的に解決したかったのだ。それゆえ彼は毎日その計算にばかり熱中して、新

井田氏が機械の製作に取りかかろうというのを一日延ばしに延ばさせていた。始めの間こそは新井田氏もより進んだ発見が工作費用を節減するものと感じて根気よくその成就を待っているようだったが、計算の仕事がいつまで経つても片づかないのを知ると、そしてその問題が解決されても、日本ではそういう蓄音機を実際に製作するのが困難らしいということをはのめかされると、だんだん性急になってきた。計算計算といって長びいているのは、たんに仕事を長びかせるための渡瀬の魂胆こんたんではないかと邪推したらしいのを渡瀬は感じた。いい加減に切り上げようかと渡瀬の思ったのもたびたびだったが、そうするとこの方の研究は早速打ち切りになって、他の研究がはじまるのを覚悟せねばならない。それは彼にとつては惜しいことだった。それゆえ彼は新井田氏の思わくをできるだけ無視しようとした。

渡瀬は今日もまた新井田氏と罫紙けいしとをかたみ代りに見やりながら続けた。

「これがシャッターの回転数と蓄音機の円盤の回転数との関係を示した項式です。こういう具合にシャッターの方をAとし、円盤の方をBとすると、AとTとの積は、一定時間におけるAのヴェロシテイすなわちVだから、それからこの項式が出てくるのです。そこに持ってきてBの方はこうなるでしょう」

新井田氏は半分解らないながらも、中腰になったまま、卓によりかかって神妙に渡瀬の説明に耳を傾けているらしくみえた。渡瀬はできるだけ解りやすく、嘯みくたくようにものをいつていたが符号ふごうや数字が眼の前に数限りなくなっているのを辿たどっていくと、新井田氏の存在などはだんだん薄ぼやけてきた。今まで奥さんを眼の前にすえてふやけていた彼の頭はみるみる緊張して、水晶のような透明さを持ちはじめた。数字がたんなる数字ではなくなった。いわばそれらは大きな兵士の群のようだった。そのおのおのが持つている任務と力量とを彼は指揮官のように知っていた。彼はそれを用いてある勝敗を争おうとするのだ。彼の得意とする将棋しょうぎや囲碁いご以上にこれは興味のあるものだった。どんな弱い敵に向つても、どんな優秀な立場にあつても、天運というものが思わざる邪魔をしないと限らない、そこに自分の力量をだけ信用してはいられない投機的な不思議があるとともに、そうした場合自分の力量が、どれほどしなやかに機変に応じうるかを見きわめたい誘惑は大きかった。

渡瀬は説明を続けているうちに、だんだん一つの不安心な箇所かしよに近づいていった。その個所を突破しさえすれば問題の解決は著いちじるしくはかどるのだ。そこにもう一度ぶつかつて、それを征服してしまおうとの熱意がいよいよ燃えてきた。彼の眼の前で数字が堂々たる陣

容を整えて展開した。それが罫紙けいしの上をあるいは右に、あるいは左に、前後上下に働きはじめた。渡瀬は仕事たこのできた太い指の間にイーグル鉛筆を握って、数字と数字との間を縦横に駈けめぐった。しばらくの間鉛筆は紙の余白に細かい数字を連ねていたが、そして渡瀬は神文でも現われてくるのを見る人のように夢中で鉛筆のあとを追っていたが、やがて鉛筆ははたとまってしまった。その瞬間に渡瀬は眼がさめたようになって、今まで書き続けていたところを読み辿ってみた。計算に間違はなかったけれども、項式はもう発展できないように横道に来ていた。

「奇体だなあ」

彼は思わず鉛筆を心もち紙の表面からもち上げて、自分に対して必死の抵抗を試みようとする項式をまじまじと眺めた。

「そこがどうなんです」

新井田氏が依然としてそこにいたのを渡瀬は知った。新井田氏の存在をおぼろげながら意識すると彼がその顧問（新井田氏自身は渡瀬を助手と呼んでいたが）となって、学資の大部分を得ているのを考え合わせないわけではなかったが、それが他人事ひとごとのようにはか感じられなかった。渡瀬は「え」といつてちよつと新井田氏を見上げただけで、またもや手

をかえてその難問題にぶつかろうとした。大きな数がみごとに割り切れた時のような、あのすがすがしい気持を味うまでは、渡瀬の胸のこだわりはどうしても晴れようとはしなかった。彼は鞭むちうつように罫紙を裏返した。それは見るまに数字で埋まってしまった。また一枚を裏返した。それもたちまち埋まっていくとする。しかし計算はますます迷宮に入らばかりで、いつそこから抜けられるのか予想はともつかなくなるばかりだった。

「変だなあ」

そう渡瀬の唇はおのずから言葉となった。そして鉛筆は堅くその手に握られたまま停止してしまった。

「そんなむずかしい計算をしなければこれは分らないのですか」

と新井田氏がそのきっかけをさらって口を入れた。すぐ痼かんしゃく癩いを立てる、こらえ性のない調子が今度の言葉には明かに潜んでいた。渡瀬はそれを聞くと、これはいけないぞと思った。そしてはじめて新井田氏の存在を正当に意識の中に入れてその人を見やりながらつくろうような笑顔を見せた。口をゆるめると、今まで固く噛み合っていた歯はぐきなみが齒齦はぐきからゆるみでるい軽い痛みを感じた。

不断はいかにも平民的で、高等学府に学んでいる秀才を十分に尊敬しているといたげ

な態度を示している新井田氏でありながら、こういう場合になると、にわかには顔つきまで変ってしまつて、少し加減してみせるとすぐつけあがつてきやがると言わんばかりの、傲慢うまんな、見くだしたような眼の色を、遠慮もなく渡瀬の顔に投げてよこすのだった。しかしながら渡瀬はそれしきのことと自分の仕事を中止する気にはなれなかつた。彼は好んでとぼけた様子をしながら、

「それはできないことはありませんがね……ま、もう少し待つてください。じきです。これさえ解ければ完全なものになるんですから……」

といつて、ふたたび罫紙に眼を落した。新井田氏はそれに対して別に何んともいわなかつた。けれどもしづとい奴だと言わんばかりな眼が、渡瀬の額の生えぎわのあたりを意地悪くさまよつているのは、明かに渡瀬の神経にこたえてきた。まだだいじょうぶと渡瀬は思った。そこで彼はふたたび新井田氏をそつちのけにして、行きづまつた計算の緒いとぐち口をたぐりだしにかかつた。

今度こそはと意気組を新たにしておかつた。数字がだんだんとその眼の前で生きかえり始めた。彼は今度は同じ項式の分解を三角法によつてなし遂とげようと企くわてた。彼の頭の中にはこの難問題の解決に役立つかとおもわれるいくつかの定理が隠見した。鉛筆を下す前

にその中からこれこそはと思われる一つを選び取らねばならぬ。彼は鉛筆の尻についているゴムを噛みちぎって、弾力の強い小さな塊を歯の間に弄もてあそびながらいろいろと思ふい耽けつた。

突然インスピレーションのように一つの定理が思いだされた。胸にこみ上げてくる喜びをじつと押し殺して、参謀の提出した方略を採用する指揮官のように、わざと落ちつき払いながら鉛筆を動かし始めた。今度こそはすべてが予期どおりに都合よく行きそうにみえた。一度分解した項式が結合をしておして、だんだん単純化されていくところからみると、ついには単一の結論的項式に落ちつきそうにみえた。渡瀬は今まで口の中に入れていたゴムを所きらわず吐き捨てて、噛りつくように罫紙の上にのしかかった。

けれどもやはりむだだった。八分というところに来て、ようやく二つに纏まとめ上げた項式をいよいよ一つに結び合せようとする段になって、どうしてもそれが不可能であるのを発見してしまった。

「畜生」

思わず渡瀬は鉛筆を紙の上にたたきつけてこう叫んだ。

「渡瀬さん、私はもう行きます」

その瞬間にこう鋭くいい放された新井田氏の声を聞いて、渡瀬はまたもや現実の世界に

引き戻された。もうそこいらには新井田氏の 癩かんしゃく 癩かんしゃく の気分がいつぱいに漂っていた。渡瀬は思わず突つ立った。

「どうも私はこういうことは困りますな。なるほど研究には違いなかるうけれども、私の機械がともかくできてさえくれればそれでいいんです。君のなさるようなことを、ここでごうしてぼんやり眺めていたところが、何んの薬にもなりませんから、私はごめん蒙こうむります。すつかり冷えこんでしまいましたお蔭で……」

「ははん、先生、腹立ちまぎれに明日から俺を抛ほうりだそうと考えているな。こりやこうしちやいられないぞ」……渡瀬の頭に咄とつ嗟さに浮んだのはこれだった。しかし彼は驚きはしなかつた。彼にはこの危地から自分を救いだす方策はすぐにでき上っていた。彼は得意先を丸めこもうとする呉服屋のような意気で、ぴよこぴよこ頭を下げた。そのくせその言葉はずうずうしいまでに磊らい落らくだった。

「やあすみませんまつたく。こちらに来るまでに計算はこのとおりやっておいて、結果が出るばかりになつていたのでから、すぐできるとたかをくくっていたんですが、……これで計算という奴は曲者ですからなあ。今日はそれじゃ僕は失敬して家でうんと考えてみます。作るくらいならあんまり不器用な……」

「そりやそうですとも、作る以上は完全なものにしたいのは私も同じことじゃありませんが、計算までここでやってるんじや、私は手持無沙汰^{ぶさた}で、まどろっこしくって困りますよ」

計算だつて研究の一つだい。道具を家で研ぎ^とすましておいて仕事場に來る大工があつてたまるものか。いい加減な眼腐れ金をくれているのにつけあがつて、我儘もほどほどしろ。渡瀬は腹の中でこう思いながらも、顔つきにはその氣配も見せなかつた。

「じつは僕もこの仕事は早く片をつけたいんです。学校のラボラトリーでやっている実験ですが、五升芋^{ごしょういも}（馬鈴薯^{ばれいしょ}の地方名）から立派なウヰスキーの採^とれる方法に成功しそうになつてゐるんです。これがうまくゆきさえすれば、それもひとつ見ていただきたいと思つてゐるもんだから……」

新らしがりと、好奇心と、慾との三調子で生きてゐるような新井田氏にこれが訴えてゐないはずがない。渡瀬は新井田氏の顔が、今までの冷やかにも倨傲^{きよこう}な表情から、少し取り入るような——しかもその急激な変化に自分自身多少のうしろめたさを示さないではない——それによつていくのを見てしすましたりと思つた。

「それもまあそれでしようがね。それにつけてもこつちの方を片づけていただかないじゃあね」

渋い顔には相違なかつたが、それは喉のどの奥から手の出そうな渋い顔だつた。発声蓄音機の方は成功したところが、そう需用じゅようのたくさんありそうなものではない。日本酒が高価になるばかりな時節に、ウヰスキーは当るに違いない。これは新井田氏がすぐ気のつきそうなことだ。ウヰスキーという新時代のものらしい名前そのものも、新井田氏には十分の誘惑になつてゐるはずだ。

渡瀬は計算用の原稿紙を一まとめにして懐ろにしまいこみながら、馬鈴薯から安価な焼し酎ようちゆうと、そのころ恐ろしく高価なウヰスキーとが造りだされる化学上の手續を素人しろうとわ

かりがするように話して聞かせた。新井田氏の顔はだんだん和らいできた。投機者には通と有らしい、めまぐるしく動く大きな眼——それはもう一步というところで詐欺師さぎしのそれと一致するものだが——の眼尻に、この人に意外な愛嬌を添える小皺ができてはじめて。それは自分の意見に他人を牽ひき寄せようとする時には、いつでも自然に現われてくるのだつた。人相見にでもいわせたら、これはこの人が天から授かつた徳相とくそうだともいふのだろう。

研究室はまったく寒い部屋だつた。渡瀬は計算に夢中である間は少しも気がつかなかつたが、これでは新井田氏が不平をこぼしたのもむりがないと思つた。火鉢一つでは、こんな天井の高い家ではもう凌しのげる時節ではない。それに宵よいもだいぶふけたらしかつた。おま

けに酒の酔いもさめぎわになっていた。

玄関に来て帰りの挨拶をしかけると、新井田氏がきゆうに思いついたように、ちよつと待つてくれといつてそそくさと奥にはいつていった。渡瀬はやむを得ずそこに突立つて自分の下駄と新井田氏が脱ぎ捨てた履物はきものとを較べなどしていた。その時頭のすぐ上で突然音がした。ちよつと驚いて見上げてみると玄関のつきあたりの少しすすけた白壁に、金縁の大きな丸時計がかかつていて、その金色の針がちょうど九時を指していた。玄関に時計をおくとは変な贅ぜいたく沢たくをしたもんだなあと思ひながら、渡瀬はまじまじと大ぎような金色に輝くその懸時計を見守つて値ぶみをしていた。

間もなく新井田氏が奥さんにつきまとわれるようにして出てきた。渡瀬が夕食の馳走になつた部屋のドアが開けはなしにしてあるので、生暖かい空気とともに、今まで女がいたらしいなまめかしい匂いが、遠慮なく寒い玄関の空気の中に漂いでてきた。

「どうもお待たせしてすみませんでした」

新井田氏の口調は、第三者の前でいつでも新井田氏が渡瀬に対してみせるあの尊大で同時に懸いんぎん懃ごんな調子になっていた。

「今月の何んです、今月のお礼ですが、都合がいいから今夜お渡ししておきます。で、と、

明日はおいでのない日でしたな。ところが明後日は私ちよつとはずせない用があるんですが、どうでしょう明日に繰り上げていただいちや、おさしさわりになりますか」

「ははん、活動写真は明日から廃業だな。先生ウキスキーで夢中になっているな。子供だなあ」

月末にはまだ三日もある今夜報ほうしゅう酬うをくれるというのもそれで読めた。ところで俺の方からいうと、報酬を貰った以上、今月はもう来ないというのは予定の行動だ。

「ええ差支えありません。来ますとも」

「どうぞいらしつてちようだいね」

奥さんが……主人の加勢をするように主人には聞こえ、渡瀬を誘惑するように渡瀬には聞こえるそんな調子で。

「何しろ新井田は果報者だて」

渡瀬は往来に出て、寒い空気に触れるにつけて、暖かそうな奥さんの笑顔と肉体とを実感的に想像して、こう心の中で呟いた。けれども同時に、彼の懐ろの内も暖いのを彼は拒むことができなかつた。あれだけをおつかあに渡して、あれだけを卯三公にやって、あれだけであるの本を買って……と、残るぞ。二晩は遊べるな。……と、待てよ。きゆうにさつ

きまで考えつめていた計算のことが頭に浮んだ。ふむ……待てよ。渡瀬はたちまちすべてを忘れてしまった。数字の連なりが眼の前で躍りはじめた。渡瀬はしたり顔に一度首をかしげると、堅く腕を胸高に組合せて霜の花でもちらちら飛び交わしているかと訝えた寒空の下を、深く考えこみながら、南に向いてこつりこつりと歩いていった。

* * *

ガンベが「園にそうたびたびねだるのだけはやめろ、よ。あんなお坊ちゃんをいじめるのは貴様可哀そうじゃねえか。貴様あんまりけちだぞそれじゃ。俺なんざこれで一度だつて園にせびつたことはないんだ。それに、まさかという時の用意に一人くらいとつきを作っておかないとうそだぞ貴様、はははは」といつて笑ったことがあった。人見は隣の園の部屋に行こうかと思つて座を立ちかけた瞬間にこれを思いだした。しかし今の場合、園の所に行つて話を持ちかけるほかに道がないのだ。

人見は痩せてひよろ長い体を机の前に立ちあがらせると、気持の悪い生なま欠あく伸びをした。彼は自体、園にこんなことをたびたび頼むのは、自分の見識からいつても、いかがなものだとは知っていたんだが、まず何んといつても一番無事に話のつきそうなのは、園のほかにはないのだからしかたがない。取りあつてくれない奴だの、ばかにして話に乗らない奴

だの、自分の金の不足になったことだけを知っていて、油を搾しぼろうとする奴だのにかつてはまったく面倒だ……それとももう一度婆やを泣かせようかとも思ったが、はした金にありつくのに、婆やの長たらしい泣き言を辛抱して聞いているのはやりきれない。やはり園が一番いい。すべての点において抵抗力が最も少ない。よかろう……人見は自分の部屋を出て、隣りの部屋のドアに手をかけた。また生欠伸が出た。

「園君いる？」

「ああ、はいりたまえ」

すぐこういう返事が小さく響いたが、机に向いたまままでいつているらしく、声がゆがんで聞こえてきた。勉強をしているなどおもいながら、人見はそつと戸を開いた。

きちんと整頓せいとんした広い部屋の一隅に小さな机があつて、ホヤの綺麗に掃除された置ラムプの光の下で、園ははたして落ち着いて書見していた。戸外では雨も雪もまじえない風がもの凄く吹きすさんでいたが、この部屋はしんみりとなごいていた。人見は音のしないように戸をたてると、静かに机の方によつていった。やがて園ははじめて顔を挙げて人見を見かえった。光に背いて暗らくはあつたけれどもその顔には格別不快らしい色は見えないようにみえた。そして「ひどい風になったねえ」といいながら、静かに座を立て、座

蒲団の上に敷きそえていた、毛布の畳んだのを火鉢の向うにおきなおした。人見はちよつと遠慮するような恰好でそれに坐つた、それは園の体温でちよつとよく暖たまつていた。

綺麗に掃除されたラムプの油壺は瑠璃色のガラスで、その下には乳色のガラスの台がついていた。ありきたりの品物だけれども、大事に取り扱われているためか、その瑠璃色の部分が透明で、美しい光沢を持っていた。骨を入れて蝙蝠傘ことうもりがきのような形に作つた白紙の笠、これとてもありきたりのものだが、何んとなく清々すがすがしくつて、注意してみると、一カ所、針の先でいくつとなく孔あなを明けた所があつた。園が何か深く考えこみながら、無意識にその辺にあつた縫針でいたずらをしたものに違いない。あの子供のよう澄んだ眼でじつとラムプを見つめながら、ぶつりぶつりと乾いた西洋紙に孔を明けている園の様子が見えるようだった。

「何を勉強しているの」

園に対してはどうもひとりで人見は声を柔らげなければならなかつた。

「僕には少し方面ちがいのものだけれども、星野君が家に帰る時、読んでみろつておいていったものだから」と答えながら園は書物を裏返して表紙を人見に見せた。濃い藍の表紙に、金文字でたんに『Mutual』《ミューチュアル》『Aid』《エイド》とだけ書いてあつた。

「倫理学の問題でも取りあつたものかい」

「著者は Prince P. Kropotkin という人で……」

「何、クロポトキン……それじゃ君、それは露^{ロシア}西亜の有名な無政府主義者だ」

人見は星野や西山たちが議論する座に加わつて、この人の名はたびたび耳に入れたのだが、自分は学校で「農政および農業経済科」を選んでいくせに、その人にどんな著書があるかをさえ調べてみたことはなかつたのだ。

「そうだつてね。僕にはその無政府主義のことはよく分らないけれども、この本の序文で見るとダーウキン派の生物学者が極力主張する生存競争のほかにも、動物界にはこの mutual aid……何んと訳すんだろう、とにかくこの現象があつて、それはダーウキンもいつているのだそうだ。……そうだ、いつてはいるね。『種の起源』にも『旅行記』にも僕は書いてあつたと思うが……。それがこの本の第一編にはかなり綿密に書いてあるようだよ」

「科学的にも価値がありそうかい」

「ずいぶんデータはよく集めてあるよ」

そういいながら園はそこにあつた葉書をしおりにはさんで書物を伏せた。柿江——彼は驚くべき多読者だが——などが書物を読んでいるのを見ても、そうは思わないが、園の前

に書物があるのを見ると、人見はある圧迫を感じないわけにはいかなかった。園はあの落ち着いた態度で書物の言葉の重さを一つずつ計りながら、そこに蓄えられている滋養分を綺麗に吸い取ってしまいそうに見えた。そして読み終えられた書物には少しの油気も残ってはいまいと思わされた。実際園が書物に見入っていると、傍から見ていると、一刻一刻園が成長してゆくのが見えるようで、人見はおいてきぼりを喰いそうで、不安になるくらいだった。といって彼の書見に反対を称^{とな}える理由はさらにないのだ。

話題が途切れると、園は静かな口調で、今まで読んだところを人見に話し始めたが、人見にとっては初耳で珍しい事実が次から次へと語りだされるのだった。そして園は著者の提供した議論に対して、も相当に見識があると思われる批評を下すのを忘れなかった。生娘のように単純らしく思われる園の頭がよくこれだけのことを吸収しうるものだ。つまりあいつの頭は学者という特別な仕事に向くようにできているんだと人見は（自分の持っている実際の働きにある自信を加えて）思った。したがって園の話すところは、珍らしく、驚くべき事実であるには相違ないけれども、人見にとつては直接何んの関係もないことだった。そんなことを覚えていたところが、それは彼にとつては鶏^{けい}肋^{ろく}のようなもので、捨てるにもあたらないけれども、しまいこんでおくにはどこにおくにも始末の悪い代物だっ

た。結局その場のぼつを合わせるために、そうかといつて聞いておけば、それですむような事柄なのだ。で、人見は聞きながらもだんだん興味からは遠ざかっていった。それよりも機を見計らつてこつちから切りだそうとする問題が、ややともすると彼の頭をよけい支配した。

人見の顔からは興味の薄らいでゆくのを見て取つてか、園はやがて話を途中で切つて黙つてしまった。それがしかし人見を軽蔑しての上のことでないのはその顔色にもよく窺うかがわれるし、かえつて自分で出すぎたことをいつて退のけたと反省して遠慮するらしい様子が見えた。

この辺でこつちが今度は切りだす番だ。ちようどいい潮時だと人見は思ったが、園に向つていと変にぎごちない気分が先き立つた。彼は自分を促うながしたてるように、明日に迫る月末の苦しさを一度に思い起してみた。それと同時に、何度も園からせびり取りながら、そして一時的な融通を頼むようなことをいつでもいいながら、一度も返済したことの無い後ろめたさが思い起されるのだつた。今度借りたら、今度こそは一度でも綺麗に返金しておかないとまずいことになる。そうしよう。そうして借りようとうとう人見は腹をきめた。

人見は星野の真似をして襟首に巻いていた古ぼけたハンケチに手をやって結びなおしながら上眼で園を見やった。

「時に園君どうだろう。君の所に少しでもよぶんの金はないだろうか。（おつかぶせるように）じつは君にはたびたび迷惑をかけているのですまないんだが、またすっかり行きつまっちゃったもんだから……西山か星野でもいるとどうにかさせるんだが（こりや少しうそがすぎたかなと思つたが園がその言葉には無関心らしく見えるのですぐ追っかけて）ちようどいもないもんだから切羽せつぽつまつたのさ。本屋の払いが嵩かさみすぎて……もう三月ほど支払を滞らしているから今度は払っておいてやらないとあとがきかなくなるんだ。……そうだねえ五円もあれば（五円といえ一カ月の食費だが少し大きい）すぎたかしらんと思つて人見はまた園の様子を窺うかがつた）……何、それだけがむずかしければ内輪うちわになつてもかまわないんだが……」

園は人見の眼に射られると、かえつて自分で恥じるように視線をそらして、火鉢の火のあたりを見やったが、じつとそれを見やってしばらく考えているらしく、返事をしなかつた。

人見は園が格別裕福な書生であるとは思われなかつた。が、少なくとも白官舎にまがり

こまねばならぬほどの書生ではなく、ここに来たのは星野がいつしよにいようと勧めたからのことであるのを知っていた。それにしても、足りないながらも国許から毎月自分へ送ってくる学資をよそに消費しておいて——消費するというと大きく聞こえるが、ほんの少しばかりをおたけとクレオパトラのために消費するだけなのだ——不足を園にぶちかけるのは少し虫がよすぎるようだ。しかしこの場合金があることだけはたしかなのだ。園が何んと返事をするかと人見はそれに興味をさえかけた。

「だいぶ切迫して必要なの」

とややしばらくして園がはじめて顔を上げて静かに人見を見た。これはまた園があまり真剣に考えすぎたなと思うと、人見には即座に返事をするのが躡ちゆうちよ躡ちゆうちよされた。その時ふつと考えついた思案をすぐ実行に移した。彼は懐中を探さぐつて蠶がまぐち口を取りだした。そしてその中からありつたけの一円五十銭だけ、大小の銀貨を取りまぜて掴みだした。

「もつともこれだけはあるんだが、これは何んの足しにもならないが、僕の君に対する借金借金の返済の一部とするつもりで取っておいたんだ。ところが昨日日本屋の奴が来やがって、いやに催促がましいことをいうもんだから、ひとまず君にはすまないが——そっちを綺麗にして鼻をあかしてやれという気になったのさ。で、これをまず君の方に納めて、あらた

めて五円にして貸してくれるわけにはいくまいかな」

「いいとも」

園はその長口上を少しまどろこしそうに聞いているらしかったが、人見の言葉が終るとすぐにこういつて、机の方に向きなおった。園は例のとおり、ポツケツトの中から、机の抽出しから、手帳の間から、札びらや銀貨を取りだした。あの几帳面きちょうめんに見える園には不思議な現象だと人見の思うのはこのことだけだった。あれで園はいつでもどこにいくら入れたということをやんと諳記あんきしているのかもしれないと思つた。園は取りだした金を机の上で下手糞へたくそに勘定していたが、やがてちやうど五円だけにしてそれを人見の前においた。そして自分の方が金を借りでもしたかのように、男には珍らしい滑なめらかな頬の皮膚をやや紅くした。

「どうもすまないよ。どうもありがとう」

人見は思わずせきこんでこういつたが、何か自分の言葉が下品に響いたようだった。

戸外では寒いからつ風が勢いこんで吹きすすんでいるらしく、建てつけの悪い障子が磨りすへらされた溝ときしり合つて、けたたましい音を立てていた。この時始めてそれに気がつくと、人見は話の糸目を探りあてたように思つて、落着きを見せて畳の上の金を臺口

にしまいこみながら、

「こりやいよいよ冬が来るんだよ。また今年もてんちようせつ天長節には大雪だろうね。星野はどうしているかしらん」

と園の心を占めているらしくみえる名前の方に漕ぎ寄せていった。

「星野君からは昨日手紙を貰ったつけ。すっかり冬が来るまでは千歳にいたのだそうだ。別に健康が悪いというのでもなさそうだが、氣候の変わり目はあの病気にやはりよくないだろうね」

そういつて園は静かに人見を見上げたが、その眼は人見を見ているというよりも、遠い千歳の方を見すかしているように見えた。人見は人見で、今臺口をしまいこんだポケットの中に、おたけから来た手紙が二つに折ってしまいこまれてあるのを意識していた。彼はそれを撫なでてみた。園に対して感じるとはまったく違った暖かい、ふくよかな感じが、みるみる胸みなぞいっばいに漲みなぎってきた。

「君はこのごろはどうなの」

園がしばらくしてからこういった。園の眼は今度はまさしく人見を見やっていた。人見は不意を衝かれたように思つて、ちよつと尻ごみをしていたが、慌て気味に手が襟巻のと

ころに行つたと思うと、今まで少しも出なかつた咳が軽く喉許を擽るのを覺えた。しかし人見はわざとその咳を呑みこんでしまった。

「なあに、僕のはたいしたことはないんだよ」

まったく医者が見てくれるたびごと、たいしたことはないのだが、それが何か物足らないのだけれども、この場合やはり医者がいうというのが恰好だと人見は思つたのだ。そして園という男は變にストイックじみた奴だなど思つた。

* * *

紺の上つぱりを着て、古ぼけた手拭で姉さんかぶりをした母が、後ろ向きに店の隅に立つて、素^{そうめん}麵箱の中をせせりながら、

「またこの寒いにお前どこかに出けるのけえ」

というのを聞き流しにして清逸は家を出た。

夕方だった。道を隔てて眼の前にふさがるように切り立つた高い岨^{がけ}の上に、やや黄味を帯びた青空が寒々と冴^さえて、ガラス板を張りつめたように平らに広がっていた。家の中にも火種の足りない火鉢にしがみついて、しきりに盗^{すきまかぜ}風の忍びこむのに震えていなければならぬ清逸にとつては、屋外の寒さもそう気にならなかつたが、とにかく冬が紙一

重に逼せまつてきた山間の空気は針を刺すように身にこたえた。彼は首をすくめ、懐ふとしろ手をしながら、落葉や朽葉とともにぬかるみになった粘土質の県道を、難なんじゆう澁じゆうし抜いて孵ふかじよ化化場うの方へと川沿いを溯さかのぼつていった。

風は死んだようにおさまっている。それだのに枝頭を離れて地に落ちる木の葉の音は繁かった。かさこそと雑木の葉が、ばさりと朴ぼくの木の広葉が、……朴の木の葉は雪のように白く曝さらされていた。

自分の家からやや一町も離れた所まで来ると、清逸は川べりの方に自分で踏みならした細道を見出して、その方へと下りていった。赤に、黄に、紫に、からからに乾いて蝕くまれた野葡萄のぶどうの葉と、枯蓬よもぎとが虫の音も絶えはてた地面の上に干からびて縦横に折り重なっていた。常住しゆめ湿り気の乾ききらないような黒土と混つて、大小の丸石が歩む人の足を妨げるようにおびただしく転ころがっていた。その高低を体の中心を取りながら辿たどつていくと、水みず嵩さの減つた千歳川が、四間ほどの幅を眼まぐるしく流れていた。清逸はいつもの所に行つて落葉をかきのけた。一夜の間に落ちる木の葉の数はそれほどおびただしかった。袂たもとの中から紙屑をつぎつぎに取りだしてそれをその穴に捨てた。夕方のかすかな光の中に青白い印象を清逸の眼に残して、その紙屑は一つ一つ地に落ちた。喀痰かくたんの中に新鮮な血の

交ったのがいくつも出てくるのを見ると、知らず知らず溜息が出た。古い紙屑の上に新しい紙屑がぼろぼろと白く重なっていった。清逸はやがて大儀そうにその上をまた落葉で掩おほうて立ち上った。そして何んということもなくそこに佇たたずんで川面を眺めやった。半年という長い眠りにはいりこもうとするような自然は、それを眺める人の心を、寒く閉ざしていく静かさをもって、静かに最後の呼吸をしているようだった。枝を離れた一枚の木の葉が、流れに漂う小舟のように、その重く澱よどんだ空気の中を落ちもせず、ひらひらと漕すべっていくのを見た。清逸はふとそれに気を取られて、どこまでもその静かに動いていく行く手を見とどけようとした。たくさんな落葉の中でその木の葉だけは、動くともなく岸から遠ざかっていったが、およそ十間近くも下流の方に下って、一つの瀬に近づいたとおもころ、その瀬によつて惹ひき起される空気の動揺に捲きこまれたのだろうか、たちまち慌あわだしく動き始め、もんどりを打って、横さまに二三度閃いたと思うと、みるみる水の方へと吸いこまれて見えなくなった。そこまで見とどけると清逸は胸の奥に何かなしに淋しいほほ笑みを感じた。そしてまた溜息が出た。

どこもここも住み憂い所のようにこのごろ清逸は感ずるのだった。札幌にいて、入らざる費用をかけていながら学校に出ないのはばからしいし、学校に出るのもばからしかった。

彼が専門に研究している農政の講義などは、一日引籠つて読書すれば、半月分の講義の材料ができるほど稀薄きはくなものだった。自然科学の研究なども、プレパラートと見取り図とを作ることに彼は不器用だったが、それさえ除けば、あまり分りきつた事実の排列はいれつにすぎなかった。応用農学は学というべきものではなかった。百姓のしていることに秩序を立てて、それに章節を加えたまでのものと思われた。語学だの数学だのという基礎学は、癩やくにさわるほど同級の者たちが呑込みがおおいのでただもどかしさをそそられるばかりだった。それゆえ彼は第一学期の試験が来るまで、じつと自分の家において養生をしながら過ごそうと思いついたのだ。しかしながらここも住みよい所ではなかった。あの父、あの母、あの弟。父は暇さえあれば母をつかまえて小言と自慢話ばかりしているし、弟は誰の神経でもいらだたせずにはおかないような鈍いしぶとさを臆面もなくはだけて、一日三界人々の侮蔑ぶべつと嘆きとの種になっている。そしてその上に、健康いちじくを著しく損そんじて、自分でさえかなり我儘で気むずかしくなつたと思うような清逸自身が加わるのだ。自分の家に帰ると、清逸は一人の高慢な無用の長物にすぎないのだ。しかもそれは恐ろしい伝染性の血を吐く危険な厄介物やっかいものでもあるのだ。朋友の間には畏敬いけいをもって迎えられる清逸だけれども、自分の家では掃除そうじ一つしようにもしない怠け者になつてしまうのだ。彼の帰つたのは彼の

家にどれだけの不愉快な動揺を与える結果になったか。そのために父の酒はまずくなる。母と弟とはいい争いをする。これまでとにもかくにも澱よどんだなりに静かだった家の内が、きゆうにいらいらした気分でかき乱されはじめた。清逸はその不愉快な気持を舌の上に乗せているように思った。彼の口は自然に唾を吐いて捨てたいような衝動を感じた。

とって彼は即そつこく刻東京に出かけてゆく手段を持つてはいないのだ。神経衰弱の養生のために、家族を挙げて亜メリカアメリカに行っている戸田教授でもいたら、相談に乗ってくれるかもしれない。新井田氏でも、三隅のおばさんでも頼んでみたら、考えてくれないこともないかもしれないが、清逸としてはかりにもそんな所に頼むのはいやだった。それにつけて、清逸はその瞬間ふと農学校の一人の先輩の出世談なるものを思いだした。品川弥二郎が農商務大臣をしていたころ、その人は省の門の側に立つて大臣の退出を待っていた。大臣が勢いよく馬車に乗って出てくるのを見ると、すぐ駈けだして行って、否いや応おうなしにその馬車に飛び乗った。そして馬車が官舎に着くまで滔とうとう々と意見を披露して大臣に口をきく暇をさえ与えなかつた。官舎に着くと大臣に先立つて官舎に駈けこんで、自分がその家の主人でもあるように大臣を迎えた。そして自分の意見の続きをしゃべりこくつた。大臣もとうとう根気負けがして、注意深くその人のいうことを傾聴するようになったが、その結

果としてその人は欧米への視察旅行を命ぜられ、帰朝すると、すぐいわゆる要路ようろの位置についたというのだ。清逸はそれを聞いた時、木下藤吉郎の出世談と甲乙のないほど卑劣ひれつぷ愉快ゆかいなものだと思つた。実力がないのではない、実力があればこそ、そんな突飛な冒険にも成功したのだ。けれども藤吉郎もその人も、自分の実力を認めさせないで、認められようとした。それが悪いことだといわれない。結局認めさせるのも、認められるのも同じようなことだ。それにもかかわらず、清逸にはそれがとても我慢のできない悪い趣味だとしてより思えなかつた。この気持は三隅にも新井田氏にも彼自身を訴えてみる企てくわだをどこまでも否定させた。渡瀬にでもさせておけば似合わしいことかもしれないと清逸は思つた。清逸は、どんな夜になつていこうとする河の面をじつと見つめ続けながら考えた。

「俺は世話を焼くのも嫌いだ。世話を焼かれるのも嫌いだ。……俺はエゴイストに違いな。ところが俺のエゴイズムは、俺の頭が少し優れているところから来ていると誰もが考えそうなことだが、そんな浅薄なものではないんだ。たとえ頭は少しは優れていようとも、俺は貧乏でしかも死病に取りつかれているんだから、喜んで世話を焼いてもらう資格は十分にあるんだ。それにもかかわらず、俺は世話を焼かれるのはいやだ。……俺はもつと自然に近くありたいのだ。自然は俺をこんなに生みつけた、こんなに病気にした。

しかもそれは自然の知ったことじゃないんだ。自然というものは心憎い姿を持っている」
 清逸はどんどん流れてゆく河の水を見つめながらこんなことを考えた。そしてそのとたん、気がついたように眼をあげてあたりを眺めまわした。実際清逸に見やられる自然は、清逸とは何んのかかわりもないもののように、ただ忙がしく夜につながろうとしていた。河は思い存分に流れていた。空は思い存分に暗くなりまわっていた。木の葉は思い存分に散っていた。枯枝は思い存分に強直していた。その間には何らの連絡もないもののように。清逸は深い淋しさを感じた。同時に強いさきよさを感じた。長く立ちつづけていた彼の足は少ししびれて、感覚を失うほど冷えこんでいた。それに反してその頭は勇ましい興奮をもつて熱していた。

昂奮こうふんが崇たたつたのか、寒い夜気がこたえたのか、帰途につこうとしていた清逸はいきなり激しい咳に襲われだした。喀かっけつ血の習慣を得てから咳は彼には大禁物だった。死おびやかの脅おびしがすぐ彼には感ぜられた。彼はほとんど衝動的にその場にうずくまって、胸をかがめて、膝頭に押しつけるようにして、なるべく軽く咳をせこうと勉つとめたが、胸の中から破裂するようにつきあげてくる力には容易に勝てないで、二三十度も続けさまに重い氣息いきをはげしく吐きださねばならなかった。一度血管が破れたら、そこからどれほどの血が流れでるか、

それは誰も知ることができない。もし四合五合という血が出たら、それで命は彼からやすやすと離れていくのだ。清逸は喀血のたびごとにそれをもの凄く感ぜねばならなかった。

「兄さんでねえか」

道の方から木叢こむらごしにこう呼びかける弟の声がした。清逸は面倒なところで嗅ぎつけられたと思つて、もちろん答えることもできなかつたが、答えようともしなかつた。

やがて咳をしるべに純次が小道を下りてきた。孵化場ふかじょうから今帰りがけのところとみえて、彼が近づくと生臭い香いがあたりに香つた。ぼんやりした黒い影が清逸の後ろに突つ立つた。

「今ごろ何んだつてこんな所に来るだ。病気が悪くなるにきまつてるに。兄さんはまるで自分の病気を考えねえからだめだよ。皆んな迷惑するだ」

いかにも突慳つっけんどんにその声はほざかれた。

「背中をさすつてくれ」

清逸はきれぎれな氣息の中からそういつた。ごつごつした手がぶきつちように清逸の背中を上下に動いた。清逸はその手の下でしばらくの間咳きつづけた。

咳がやんでも純次はやはりさすり続けていた。清逸は喀痰かくたんを紙に受けていくらかの明

るみにすかしてみた。黒い色に見えて血がかなり多量に吐きだされていた。彼は咄嗟にそれを丸めて水中に投げようとしたが、思いかえして自分の下駄の下に踏みにじった。この川下に住む人たちは河の水をそのまま飲料に用いているからだ。

純次はまだ懸命に兄の背中をさすり続けていた。清逸は一種の親しみを純次に感じて、「もうよくなった。さあ帰ろう。お前は仕事が終わるとずいぶん疲れるだろうな」

と行ってやった。

「あたりまえよ」

純次の答えはこうだった。そして河^{かわぎし}岸まで行って、清逸の背中を撫でていた両手をごしごしと洗った。清逸は同情なしにはなく、じつと淋しくそれを見やった。

弟が泥靴のまままでぬかるみの中をかまわず歩いてゆく間に、清逸は下駄をいたわりながら、遅れがちに続いた。たそがれというべき暗らさになって、行く手には清逸の家の灯だけが、枯れた木叢の間にたった一つ見やられた。純次は時々立ち停っては、もどかしそうに兄の方を顧みた。先に帰れと清逸がいつてもそうはしなかった。

「兄さん、お前はまた札幌に帰るのか」

とある所で純次は兄を待ちながら突然にいった。清逸はそうだと答えた。

「死んでしまふぞ。帰らねえがいい」

それがいつか、母に向つて、「肺病はうつるもんだよ」といった弟の言葉だった。純次はどうせ辻褄つじつまの合わないことをいう低能者ではあつた。しかし今の言葉に清逸は、低能でない何人からも求められない純粹な親切を感じずにはいられなかつた。

純次は兄の近づくのを待つてまたこういつた。

「お前は偉くなろうとそんなことばかり思つてゐるから肺病に取りつかれるんだ。田舎にいろよ、じきなおるに」

「そうだなあ、俺もこのごろは時々そう思う。おせいにも可哀そうだしな」

「そんだとも、皆んな可哀そうだな。姉さん泣いてべえさ」

清逸は不思議にも黙つて考えこみたいような気分になつた。そしてすべての人から軽蔑されているだらしない純次の姿が、何となくなつかしいものに眺めやられた。その上彼の偶然な言葉には一つ一つ逆説的な誠があると思つた。純次はどことなく締りのない風をして、無性に長い足をよじれるように運ばせながら、両手を外套の衣かぶし囊かぶしに突つこんだまま、おぼつかなく清逸の眼の前を歩いていつた。人生というものが暗く清逸の眼に映つた。

その夜清逸は純次の部屋でおそくまで働いた。純次の机の上からつまらぬ雑誌類やくだ

らぬ玩具じみたものを払いのけて、原稿用紙に向った。純次はそのすぐそばで前後も知らず寝入っていた。丹前を着て、その上に毛布を被つてもなお滲み透ってくるような寒さを冒して、清逸は「折焚く柴の記と新井白石」という論文を仕上げようとした。物に熱中した時の徴候のように、不思議にも咳は出てこなかった。たまさかに木の葉の落ちる音と、遠い川音とのほかには、純次の躰がいぎたなく聞こえるばかりだった。清逸は時おりペンを措いて、手を火鉢にかざさねばならなかった。そのたびごとに弟の寝顔をふりかえつてみた。仰向けに寝て（清逸には仰向けに寝るということがどうしてもできなかつた。仰向けに寝る奴は鈍物だときめていた）放図なく口を開いて、鼻と口との奥にさわるものでもあるらしい、苦しそうな呼吸を大きくしていた。うす眼を開いているのだが、その瞳は上瞼に隠れそうにつり上っていた。helpless 《ヘルプレス》という感じが、そのしづとそんな顔の奥に積み重なっているように見えた。

清逸は手のあたたまる間、それを熟視して、また原稿紙に向った。清逸は白石は徳川時代における傑出した哲学者であり、また人間であると思つた。儒学最盛期の荻生徂徠が濫りに外来の思想を生嚼りして、それを自己という人間にまで還元することなく、思いあがった態度で吹聴しているのに比べると、白石の思想は一見平凡にも単

調にも思えるけれども、自分の面目めんもくと生活とから生れでていないものは一つもなく、しかもその範囲はんいにおいては、すべての人がかりそめに考えるような平凡な思想家ではけつしてなかったということを証明しなかったのだ。徂徠が野にいたのも、白石が官儒として立ったのも、たんなる表面観察では誤りに陥りおちいやすいことを論定しなかった。この事業は清逸にとつてはたんなる遊戯ではなかった。彼はこの論文において彼自身を主張しようとするのだ。これは西山、および西山一派の青年に対する挑戦のようなものだった。

白石文集、ことに「折焚おりたく柴しばの記き」からの綿密な書きぬきを対照しながら、清逸はほとんど寒さも忘れはてて筆を走らせた。彼はあらゆる熱情を胸の奥深く葬ってしまった。氷のように冷かな正確な論理によつて、自分の主張を事実によつて裏書きしようとした。やもすれば筆の先に迸りほとぼしでようとする感激を、しいて呑みくだすように押えつけた。彼のペンは容易にはかどらなかつた。

アイヌと、熊と、樺戸監獄の脱獄囚との隠れ家だとされているこの千歳の山の中から、一個の榴りゅうだん弾を中央の学界に送るのだ。そしてそれは同時に清逸自身の存在を明瞭にし、それが縁になつて、東京に遊学すべき手蔓てづるを見出されな限らない。清逸は少し疲れてきた頭を休めて、手を火鉢に暖ためながらこう思った。そして何事も知らぬげに眠つて

いる純次の寝顔を、つくづくと見守った。それとともに小樽にいる妹のことを考えた。三人のきょうだいの間にはさまったおびただしい距離……人生の多様を今更ながら恐ろしく思いやつてみねばならぬ距離……。けれども彼はすぐその心持を女々しいものとして鞭つた。とにかく彼は彼の道を何物にも妨げられることなく突き進まねばならない。小さな顧慮や思いやりが結局何になる。木の葉がたつた一つ重い空気の中を群から離れて漂っていく。そうだ自然のように、あの大自然のように。清逸は冷然として弟の顔から眼を原稿紙の方に振り向けた。そこには余白が彼の頭の支配を待つもののように横たわっていた。彼ははずまいを正して、おお掩いかぶさるようにその上にのしかかった。そして彼は書いて書いて書き続けた。

ふとランプの光が薄暗くなった。見ると、小さな油壺の中の石油はまったく尽きはてて、灯は芯しんだけが含んでいる油で、盛んな油煙を吐きだしながら、真黄色になってともっていた。芯の先には大きな丁ちやうじ子こができて、もぐさのように燃えていた。気がついてみると、小さな部屋の中はむせるような瓦斯ガスでいっぱいになっていた。それに気がつくやうに清逸はきゆうに咳のどもとを喉許のどもとに感じて、思わず鼻先で手をふりながら座を立ち上った。

純次は何事も知らぬげに寝つづけていた。

石油を母屋おもやまで取りに行くにはいろいろの点で不都合だった。第一清逸は咳が襲つてきそうなのを恐れた。しかも今、清逸の頭の中には表現すべきものが群がり集まつて、はけ口を求めながら眼まぐるしく渦を巻いているのだ。この機会を逸したならば、その思想のあるものは永遠に彼には帰つてこないかもしれないのだ。清逸は慌あわてて机の前に坐つてみたが、灯の寿命はもう五分とは保つように見えなかつた。芯をねじり上げてみた。と、光のない真黄色な灯がきゆうに大きくなつて、ホヤの内部を真黒にくすべながら、物の怪けのように燃え立つた。

もうだめだ。清逸は思いきつて芯を下げてからホヤの口に氣息いきをふきこんだ。ぶずぶずと臭い香いを立てて燃える丁子の紅い火だけを残して灯は消えてしまった。煙つたい暗黒の中に丁子だけがかつちりと燃え残つていた。絶望した清逸は憤りを胸みなぎに漲みなぎらしながら、それを睨にらみつけて坐りつづけていた。

「おい純次起きろ。起きるんだ、おい」

と清逸は弟の蒲団に手をかけてゆすぶつた。しばらく何事も知らずにいた純次は気がつくといきなりがばと暗闇の中に跳び起きたらしがつた。

「純次」

返事がない。

「おい純次。お前母屋おもやまで行って、ランプの油をさしてこい」

「ランプをどうする？」

「このランプに石油をさしてくるんだ。行ってこい」

清逸は我れ知らず威いた丈け高になって、そう厳命した。

「お前、行ってくればいいでねえか」

薄ぼんやりと、しかもしぶとい声で純次がこう答えた。清逸は夜気に触れると咳が出るし、石油のありかもよく知らないから、行ってきてくれと頼むべきだったのだ。しかしそんなことをいうのはまどろしかった。

「ばか、手前は兄のいうことを聞け」

弟は何んとも答えなかった。少しばかりの沈黙が続いた。と思うと純次はいきなり立ち上って、清逸の方に近づくが早いか、拳を固めて清逸の頭から顔にかけてところきらわず続けさまになぐりつけた。それは思わず清逸をたじろがすほどの意外な素早さだった。

「出ていけ、これは俺の部屋だい。出ていかねばたたき殺すぞ」

やがて牛のうめき声のような口惜し泣きが、立ったままの純次の口からおめきだされた。

清逸は体じゆうがしびれるのを覚えて、俯向うつむいたまま黙っているほかはなかった。

「出ていかねえか」

純次は泣きじやくりの中から、こう叫んでいらだちきつたように激しく地だんだを踏んだ。次の瞬間には何をしだすか分らないような狂暴さが清逸に迫ってきた。

清逸はしんとした心の中で、孵化場ふかじょうあたりから来るらしい一番鶏の啼き声をかすかに聞いたように思った。部屋の中はしかし真暗闇だった。

純次は何か手ごろの得物をさぐっているのらしくごそごそと臥床ふしどのまわりを動きはじめた。だんだん激しくなり増さるような泣きじやくりの声だけがもの凄く部屋じゆうに響いていた。

「待て純次、俺は母屋に行くから待て」

清逸は不思議な恐怖に襲われ、不意の襲撃に対して用心をしながら座を立って二三歩入口の方に動かねばならなかった。しかしその瞬間に、しかけていた仕事のことを考えると、慌あわてて立った所から上体を机の方に延ばして、手に触れるにまかせて原稿紙をかき集めた。そしてそれを大事に小脇にかかえて、板壁によりそいながら入口へとさぐり寄った。

部屋の中では純次が狂暴に泣きわめいていた。清逸は誰のともしれない下駄を突っかけ

て、身を切るような明け方近い空気の中に立った。

その時清逸はまたある一種の笑いの衝動を感じた。しかし彼の顔は笑ってはいなかった。

* * *

隣りの間で往診の支度をしていた母が、

「ぬいさん」

と言葉をかけた。おぬいはユニオンの第四読本からすぐ眼を放して、母のいる方に少し顔を向け気味にして、

「はい」

と答えたが、母はしばらく言葉をつがなかった。

「今日は渡瀬さんがいらつしやる日ね」

やがてそういった。おぬいは母が何か胸に持ちながらもをいつているのをすぐ察することができた。

「あなたはあの方をどう思つてだえ」

おぬいがそうだと答えると、母はまたややしばらくしてからいった。

おぬいは変なことを尋ねられるとおもった。そして渡瀬さんに対する自分の考えをいお

うとしているうちに、母は支度をすまして茶の間にはいつてきた。いつものとおり地味すぎるような被布を着て、こげ茶のシヨールと診察用の器具を包んだ小さい風呂敷包とを、折り曲げた左の肘ひじのところの上に抱きにしていた。いつさいの香料を用いないで、綺麗さっぱりとした身だしなみは母にふさわしいものだった。母はストーヴの火具合を見てから、親しみ深くおぬいのそばに来て坐った。そして遊んでいる右の手でおぬいの羽織の衣紋がぬけかけているのを引き上げながら、

「どう思うの」

ともう一度静かに尋ねた。

「快活なおもしろい方だと思いますわ」

とおぬいは平気で思ったとおりを答えた。

「あなたにあつては誰でもいい方になつてしまふのね」

ほほえみながらそういつて母はちよつと言葉を途切らしたが、

「私もほんとはあなたの思つてるとおりに思うのだけれども、世間ではそうはいっていないらしい。中にも教会の方などには聞き苦しいとおもうほどひどい評判をなさるのもあつて、どうして星野さんが、あんな人を推すい薦せんなさつたんでしようと、星野さんまで疑うら

しい口ぶりでした。私としてもあなたのようにあの方をいい方だとばかり極めるわけには
 いかないと思うところもあるのだけれども、星野さんがおっしゃってくださるのだから私
 は信じていていいと思います。……けれども噂というものもあながちばかにはできないか
 ら、あなたもその辺は考えておつきあいなさいよ。遊廓なんぞにも平気でいらつしやると
 いう人もあるんだから……」

おぬいは遊廓という言葉をもの口から聞くと、身がすくみそうに恥じらわしくなって、
 顔の火照るのを覚えた。母はそれを見て少し違った意味に取つたらしい。

「そうね、私は星野さんや渡瀬さんを信ずるよりあなたを信じましょうね。渡瀬さんに用
 心するより、あなたが真直な心をさえ持つていれば少しもこわいことはありませんよ。ど
 んなことがあつても人様を疑うのはよくないものね。正しい心がけで、そのほかは神様に
 おまかせしておけば安心です。……ではこれから出かけてきますからね、渡瀬さんがいら
 したらよろしく」

こういい残して母はかいがいしく、雪のちらちら降る中を病家へと出かけていった。

母を送りだして茶の間に帰つたおぬいは、ストーヴに薪を^{まき}入れ添えて、火口のところに
 ごぼれ落ちた灰を掃除しながら時計を見るともう三時になっていた。部屋の中は綺麗に片

づいていて、客を迎えるのに少しの手落ちもなかった。自分の身なりをも調べてみて、ふたたび机の前に坐ろうとした時、ふと母のいい残した言葉が気になった。渡瀬さんの来る時には今までいつでもお母がよく母がいたのに今日は留守になるので、それであれだけのことをいいおいたのかと思えた。そう思ってみると、その言葉の一つ一つにはかりそめに聞き流してはいられないものがあるようだった。そういえば渡瀬さんという人は、星野さんや園さん、そのほか農学校にいる書生さんたちとは少し違ったところがある。あの人の前に出るとははじめから自由な気持で何んでもいえそうだけれども。そして困ったことでもあった時、相談をしかけたら、すぐてきぱき始末をつけてくれそうだけれども、その先の先がどう変つてゆくのか、渡瀬さん自身でさえ無頓着むとんちやくでいるようにも見える。他人のことはすぐ見ぬいてしまつて、しかもけつして急所を突くようなことはしない代りに、自分のことになることと自由すぎるほどのんきなようにも見える。そうかと思うと、どんな些細さいさいなことでも自分を中心にしなければ取り合わないようなところもある。けれどもあの人は真から悪い人ではない、そして真から悪いという人が世の中には本当にあるものだろうか。：おぬいは読本に眼をやりながら、その一語をも読むことなしに、こんなことを考えた。渡瀬はがさつで下品でいけないと家に来られる書生さんたちはよくいうけれども……私に

はついぞそうしたようなことは見当らない。……私はいつたい、他の人たちとは生れつきがちがうのだろうか。少しぼんやりしすぎて生れてきたのではないだろうか。あまりに人々と自分との考え方はかけちがつている。……本当にかけちがつている。まだ何んにも知らないからなのだろう。……おぬいは非常に恥かしいところに突きあたったような気がした。そして知らず識らず体じゆうが熱くなった。

そんなことを思っていると、ふとおぬいは心の中に不思議な警戒を感じた。彼女は緋鹿ひかの子の帯揚おびあけが胸のところにごぼれているのを見つけたすと、慌あわてたように帯の間にたくしこんで、胸をかたく合せた。藤紫の半襟が、なるべく隠れるように襟元をつめた。束髪にはリボン一つかけていないのを知って、やや安心しながら、後れ毛のないようにかき上げた。そして袖口をきちんと揃えて、坐りなおすと、はじめて心が落着くのを感じた。おぬいはしんみりと読本に向いて勉強をしはじめた。

ややしばらくしてから、格子戸が力強く引き開けられた。それは渡瀬さんに違いなかった。おぬいは別に慌てることもなく、すなおな気持で立ち上って迎いにしようとしたが、部屋の出口の柱に、母とおぬいとの襷がかけてあるのを見ると、派手な色合いの自分の襷を素早くはずして袂の中にしまいこんだ。

「いつものとおり胡坐をかきますよ。敲き大工の息子ですから、几帳面に長く坐つていと立てなくりますよ」

渡瀬さんはそういつて、片眼をかがやかしながら、からからと笑つて膝を崩した。からからといつても、渡瀬さんの笑いには声は出なかつた。

「茶なんざあ、あとでいいですよ。さあやりましょう」

おぬいは渡瀬さんのいうとおりにして、その人と向合いに坐つた。渡瀬さんの氣息はいつものように酒くさかつた。飲んだばかりの酒の匂いではなく、常習的な酒癖のために、体臭になつたかと思われるような匂いだった。おぬいはそのすえたような匂いをかぐと、軽い嘔気さえ催すのだった。けれども、それだからといつて渡瀬さんを卑しむ気にはなれなかつた。父の時代から一滴の酒も入れない家庭に育ちながら、そして母も自分も禁酒会の会員でありながら、他人の飲酒をいちがいに卑しむ心持は起らなかつた。これは自分の心持に忠実な態度だろうかとおぬいはよく考えてみるのだった。禁酒会員である以上は、自分の力の及ぶかぎり飲酒を諫めなければならぬと思つた。その人が溺れている悪い習慣の結果を考えるなら、不愉快を忍んでも諫めだてをするのが当然だった。けれどもおぬいには心持としてそれがどうしてもできなかつた。なぜだかおぬい自身には判らないけ

れどもどうしてもできなかつた。自分が卑怯ひきようだからそうなのかと考えてもみたが、あながちそうでもない。面倒だからか。そうでもない。どういう心持なのだろう……おぬいはその解決を求めるように渡瀬さんの方を見た。酒焼けというのだろうか、きめの荒そうな皮膚が紫がかっていて、顔全体にむくみが来て、鋭い光を放つてかがやく眼だけでも、その白眼は見るも痛々しいほど充血していた。……酷むごたらしい、どうして渡瀬さんは酒なんぞお飲みなさるのだろう。それにしても、あれほどの害をまざまざと受けながら、飲みつづけていられるのは、自分たちには分らない訳があることに違いない。私は渡瀬さんが何んだかお気の毒だ。けれども何も知らない私の力ではどうしようもないではないか……つまりこれだけしか分らなかつた。

「さてと、今日はどこから……おや、あなた僕の顔を見えていますね。はははは。僕の顔は出来損いですよ。それとも何かついていきますか」

渡瀬さんはいきなりそのこね固めたような奇怪な顔を少し突きだすようにした。おぬいは大変な悪いことをしたとおもつた。人の醜みにくい部分に臆おくめん面もなく注意を向けていたのを……そのつもりではなかつたのだが……すまなく思った。といつても、いい訳もできなかつた。ただ渡瀬さんの顔の醜みにくいのを物好きに眺めていたのではない。それを知らせたい

めに、十分の好意をもって、かすかに微笑んだ。

すると渡瀬さんは途轍とてつもなく、

「失礼、あなたはいくつになりますね」

と尋ねた。素直に十九だと答えると感心したように、

「ふーむ、珍らしいな、奇体だなあ」

と嘆息するようにいいながら、今度は渡瀬さんがしげしげとおぬいの顔を見た。おぬいは軽い羞恥と、さらにかすかな恐れをも感ぜずにはいられなかった。けれどもその場合、恥かしがることとも恐れることも少しもないはずだと思うと、すぐに不断のと通りの気持ちに帰ることができて、

「それでは始めていただきます」

といいながら、書物を机の真中の方に持つていった。渡瀬さんもそのつもりらしく、上体を机の上に乗らした。

おぬいは何もかも忘れて、懸命にこの前教えられたところを復習した。第四読本は少し力にあまるのだけれども、書いてあることが第三読本よりはるかに身があるので、読むには励はげみがあった。アーヴィングという人の「悲恋」(Broken《ブローケン》Heart《ハー

ト》)という条くだりだった。星野さんがこの書物を始める時、目次によって内容をあらかじめ話してくれた時、この章に書いてあるのは、アイルランドのある若い勇ましい愛国者と、その婚約の娘との間に起った実際の出来事だといったので、おぬいにはよけい興味のあるものだった。渡瀬さんがこの前それを講義してくれた時も、おぬいは幾度となく美しい悲しさを覚えて、涙のこぼれ落ちそうになるのをじっと我慢しながら、平気な顔をして、数学でも解とくように講義している渡瀬さんを不思議に思った。そして渡瀬さんが帰ってから、その一伍いちぶしじゅう一什を母に話して聞かせようとして、ふと母の境涯を考えると、とんでもないことをいいかけたと思つて、そのまま口には出さないうでしまったのだった。

今日その章を声を出して読むことは、おぬいにはかなり苦しいことだった。もしもこの前のように感情が書いてあることに誘ひこまれたら、どうしようと危ぶまずにはいられなかった。どこまでも作り話だと思つて読もうと勉めながら、おぬいは始めの方から意識していった。けれども冒頭からもう涙ぐましい氣持にされていた。おぬいはかねてから、自分の身の上にも、いつかは恋愛が来るだろうとは覺悟していた。けれどもそれは、本当に来るのだろうかと疑わねばならぬほど遠いところにあるもので、しかもそれに襲われたが最後、知りながら否応なしに、苦しみと悲しみとに落ちこんでいかねばならぬものとなぜ

とはなく思いこんでいた。彼女の心の底をゆり動かす怖れと云っては実際それだけだった。今おぬいの眼の前には、彼女の心の怖れを裏書きするような事実が語られているのだ。読んでゆくうちにおぬいの心は幾度となく悲しさと悩ましさとのために戦おののいた。あるところでは言葉が震え、あるところでは涙が溢れでようとしたけれども、おぬいは露ほどもそれを渡瀬さんに気取られたくはなかった。そういうところに来ると彼女は已やむを得ず口を噤つぶんで、解らないところに出遇でっくわしたように装った（おお何という悪いことだろう、私はこのごろ人様の前で自分を偽いつわらねばいられないようになってきた、とおぬいは心の中で嘆息するのだった）。

「そこですか。それは何んでもないじゃありませんか」

と渡瀬さんは無遠慮に云って、頭のいい人らしくはつきり解るように教えてくれた。おぬいはその間にようやく感情を抑えつけて、また先きを読みつづけてゆくことができた。そしてこういうことが二度三度と重なっていった。おぬいはまた烈しい感情で心を揺り動かされて、胸のところすに酸すっぱく衝つき上げてくるようなものを感じながら黙ってしまった。しかし渡瀬さんは今度は即座には教えてくれなかった。不思議には思いながらも、しばらくたつてから、ようやく顔を上げてみると、渡瀬さんは充じゅうけつ血けつして、多少ぼんやりした

ような顔つきで、おぬいの額ぎわをじつと見つめていたのだと知れた。おぬいは不思議にもそれを知ると本能的にはつと思つた。渡瀬さんも日ごろの渡瀬さんに似合わず、少し慌てながら顔を紅くして、すぐに書物に眼を落したが、

「ええと、それは……どこでしたかね」

といいながら、やきもきと顔を書物の方につきだした。

おぬいはその時はからず母のいいおいていった言葉を思いだしていた。そして渡瀬さんに対して、恐ろしい不安を感じないではいられなくなった。渡瀬さんと向い合つて人気がない家にいるのがたまらないほど無気味になった。おぬいは思わず「天にある父様」と念じながら（神様という言葉はきらいだった。父が亡くなってからは天にある父様という言葉がこの上もなくなくなつた）、力でも求めるように、素早くあたりを見まわした。

「もし私が知らずに渡瀬さんを誘惑しましたら、どうかどうかお許しくさいますし」

「正しい心がけで、そのほかは神様におまかせしておけば安心です」……その母の言葉、

それがまた思いだされた。おぬいは眼がさめたように自分の今までの卑怯ひきょうな態度を思い

知つた。自分の心の姿を渡瀬さんに見せまいとしていたのが間違이었다と気がついた。

そこに気がつくとき、きゆうにすがすがしく力を感じた、落着いてふたたび書物に向うこと

ができた。読んでゆく間に、もちろん感情は昂められたけれども、口を嚙むほどのことはなくて、しまいまで読みつづけた。渡瀬さんもそれからかなり注意しておぬいの訳読を見えてくれた。

読み終わるとおぬいは眼に涙をためていた。もうそれを渡瀬さんに隠そうとはしなかった。

「たびたび読みつかえたのをごめんくださいまし。意味が分らなかつたのではないんですけれども、あんまり悲しいことが書いてあるものですから、つい黙ってしまいました。作り話ではどんな悲しいことが書いてあつても、私そんなに悲しいとは思いませんけれども、こんな本当のお話を読みますと……」

ハンケチで涙を拭いながら何事も打ち明けてこういった。

「これは本当の話ですか」

渡瀬さんは恥かしげもなくこう聞き返した。

「星野さんがそういうふうにおっしゃってでしたけれども」

「本当であつたところが要するに作り話ですよ。文学者なんて奴は、尾鰭おひれをつけることがうまいですからね」

渡瀬さんはこだわりなさそうに笑ったが、やがていくらかまじめになって、

「今日はお母さんは……お留守ですか」

「診察に出かけました……よろしくと申していました」

正しい心がけで……おぬいは怖れることは露ほどもないと心を落ちつけた。

「じゃ先をやりますかな……」

渡瀬さんは書物を手に取り上げて、しばらくどこともなく頁ページをくっていたが、少し失礼だと思うほどまともにおぬいを見やりながら、

「おぬいさん」

といった。渡瀬さんから自分の名を呼ばれるのはおぬいには始めてだった。

「はい」

おぬいもまじろがずに渡瀬さんを見た。

「やあ困るな、そうまじめに出られちゃ……あなたは今の話で涙が出るといいましたが、

……あなたにもそんな経験があつたんですか」

「いいえ」

おぬいはここぞと思つて、きつぱりと答えた。

「それで泣くというのは変ですねえ」

渡瀬さんは少し大きようにこういいながら、立ち上つてストーヴに薪をくべに行こうとした。おぬいも反射的に立ち上つてその方に行きかけたが、二人が触れあわんばかりに互に近寄つた時、渡瀬の全身から何か脅かすおどようなものが迸りほとばしでるのを感じて、急いで身をひるがえしてもとの座になおつた。

渡瀬さんは薪をくべると手をはたき合せながら机の向うに歸つた。

「経験のないところに感動するってわけはないでしょう」

この二の句を聞くと、おぬいはあまりに押しつけがましいと思つた。噂のとおり少し無遠慮すぎると思つた。

「これはただそう思うだけでございますけれども、恋というものは恐ろしい悲しいものように思います。私にもそんな時が来るとしたら、私は死にはしないかと、今から悲しゅうございます。だもんですから、ああいうお話を讀みますと、つい自分のように感じてしまふのでございませうか」

「あなたは實際、たとえば星野か園かに恋を感じたことはないのかなあ」

おぬいはもうこの上我慢がしていられなかつた。母がいてくれさえすればと思つた。口

惜涙を抑えようとしても抑えることができなかった。そしてハンケチを取りだす暇もないので、両方の中指を眼がしらのところにあてて、俯向うつむいたままじつと涙腺を押えていた。

渡瀬さんはしばらくぼんやりしていたが、きゆうに慌てはじめたようだった。

「悪かったおぬいさん。僕が悪かった。……僕はどうもあなたみたいな人を取りあつかったことがないものだから……失敬しました。……僕はこんな乱暴者だが、今日という今日は、我を折りました。……許してください。僕はこうやって心からあやまるから」

おぬいは眼をふさいでいたけれども、渡瀬さんが坐りなおって、頭を下げているのがよくわかった。そして切れ切れにいいだされた今の言葉がけっして出まかせでないのが一つ一つ胸にこたえた。

しかしおぬいが一たび受けた感じは容易に散りそうにはなかった。で、しかたなしにはずみ上る言葉をようやく抑えつげながら、

「ええもう何んとも思つてはいませんから……いませんから、私をこそお許してくださいまし。けれども今日は、もうこれで、お帰りを願ひとうございますの」
とだけようやくいって退けた。

「え、……帰ります」

渡瀬さんはそういったなり、立ち上って部屋を出た。おぬいは何かもつと和解の心を現わして、渡瀬さんの心をやすめたいと思つたけれども、何かいうのがどうしても不自然だったので何もいわないことにして、上り口まで送つてでた。

「どうか許してください」

下駄をはくと、渡瀬さんはこつちを向いてこう挨拶した。おぬいも好意をもつて眼を上げた。渡瀬さんはこにこしていた。そして意外だったのは、つぶれていない方の眼に涙がたまっているのではないかと思えたことだった。

たった一人になるとおぬいはほつと溜息が出た。何か自分が思いもかけない結果を渡瀬さんに与えたのではないかと思うと、自分というものが怖ろしいようだった。彼女の知らない力があつて、ともすると願ひもしないところに彼女を連れこんでいこうとするかにさえ感じられた。そういう時に父のいないのがこの上なく淋しかった。おぬいは障子を半ば締めたまま、こんこんと大降りになりだした往来の雪を、ぼんやりと瞬またたきもせずに眺めながら、渡瀬さんを送りだしたその姿勢から立ち上りえずにいた。

ややしばらくして、何という弱々しいことだと自分をたしなめて、おぬいは立ち上ると、障子を締め、その足でラムプを茶の間に運んで火をともした。時計はもう五時半近くにな

っていた。夕方の支度がおそくなりかけていた。

おぬいは大急ぎで書物をしまい、机を片づけ、台所に出て、白いエプロンを袂ごと胸高に締め、しばられた袂の中からようようの思いで襷たすきをさぐりだすと、それをつむりに潜くぐらせようとしたが、華はなやかなその色が、夕暗の中で痛いように眼に映った。おぬいは一度のばしたその襷を、ぐちゃぐちゃに丸めて、それを柱にあてがって顔を伏せると、誰のためにも、誰にもなく祈りたい気持でいっぱいになった。

おぬいはそうしたまま、灯もともさない台所の隅で、しばらくの間慄こるえるような胸をじつと抑えて、何んとなくそこにつき上げてくるえたいの知れない不安を逐い退けようとして佇たたずんでいた。

* * *

創成川を渡る時、一つ下の橋しもを自分と反対の方向に渡ってゆく婦人は、降りはじめた雪のためいくらかぼんやりしていたけれども、三隅のおばさんに違いないと渡瀬は見て取った。今日こそはおぬいさん一人だぞという意識がすぐいたずららしい微笑となつて彼の頬くすくを擦すった。

行ってみるとおぬいさん一人らしかった。脱ぎ取った帽子の雪をその人が丁ていねい寧ねいに払っ

てくれた。いつものとおり茶の間はストーヴでいい加減に暖まっていた。そして女世帯らしい細やかさと香においが、家じゆうに満ちていて、どこからどこまで乱雑で薄汚ない彼の家とは雲泥うんでいの相違そつうだった。渡瀬はその茶の間にしめやかな落着きを感じるよりも、ある強い誘惑を感じた。けれども机に向っておぬいさんと対坐すると、どうしてもいつもの彼の調子が出にくかった。道々彼が思いめぐらしてきたような気持は否応なしに押しひしがれそうだった。いつ見てもおぬいさんはきちんとしすぎるほどつつましく身だしなみをしていた。そんな気持ではないのではないかもしれないが、そしてそうでない証拠にはすべての拳ものこし止しがいかにもこだわりのない自然さを持っているのだが、後れ毛一つ下げていないほどそれを清く守っているのを見ると、どこと違ってつけ入る隙もないように見えた。けれども、それが渡瀬にとつてはかえって冒険心をそそる種になった。何、おぬいさんだって女一疋いっぴぎにすぎないんだ。びくびくしているがものはない。崩せるだけ崩してみてもやれという気がむらむらと起つてきて、彼はいきなり胡坐あぐらをかきながら。

「いつものとおり胡坐をかきますよ。敲たたき大工の息子ですから、几帳面に長く坐っている
と立てなくなりませうよ」

といつて思いきり彼らしい調子を上げて笑い崩した。おぬいさんはその時立って茶棚の

前に行っていたが、肩越しにこちらを振り返って、別に驚きもしないようになにこしな
 がら「どうぞ」といった。

茶なんぞ飲むよりもおぬいさんと一分でも長く向い合っていたかった。茶はいらないと
 いうと、せつかく茶器を取りだしかけていたおぬいさんは素直にそのままそれをそこにお
 いて、机の座に戻ってきた。ここで彼は新井田の奥さんとおぬいさんとを眼まぐるしく心
 の中で比較していた。とてもだめだ、比べものなんぞになるものか。二十近い年までこん
 なに色気というものなしに育ってきた娘がいったいあるものだろうか。新井田の奥さんの
 方が顔の造作は立ち勝っているかもしれないが……待てよそういういちはいえないぞ。
 第一こっちはまるで化粧なしだ。おまけにコケトリなしだ。それなのにこの娘から滴り落
 ちる……滴り落ちる何んだな……滴り落ちるX、そのXの量ときたらどうだ。それがしか
 も今のところまるつきりむだになつて滴り落ちているんだ。おぬいさんはそれを惜しいも
 のとも思つてはいないのだ。そこにいくと新井田の奥さんの方はさもしさの限りだ。一滴
 落すにもこれ見よがしだ。あれで色気が出なかつたら出る色気はない。中央寺の坊主のい
 い草ではないが珍重珍重だ。おぬいさんがあのXの全量を誰かに滴らす段になつてみる……
 ……。渡瀬は思わず身ぶるいを感じた。

まず作戦はあと廻わしにして、

「さてと、今日はどこから……」

といいながらおぬいさんを見ると、書物に見入っているとばかり思っていたその人は、潤いうるおの細やかなその眼をぱつちりと開けて、探るように彼を見ているのだった。渡瀬はこの不意撃ちにちよつとどぎまぎしたが、すぐ立ちなおっていかなる機会をも掴つかもうとした。「おやあなた僕の顔を見えていますね。ははは。僕の顔は出来損いですよ。それとも何かついていますか」

そういつて彼は 剽ひょう 軽きんらしくわざと顔をつきだしてみせた。この場合あたりまえの娘ならば、真紅な顔になつてはにかんでしまふか、おたけさん級の娘なら、低能じみた高笑いをして、男に隙を見せるか、伶俐りじょうを鼻にかけた娘なら、己惚うぬぼれはよしてくださいといわんばかりにつんとするに極こつていた。渡瀬はそのどれをも取りひしぐ自信を持っていた。ところがおぬいさんは顔をあからめもせず、すましもせず、高笑いもせずに、不ふ断だんのとおりの心置こころきない表情へいじょうに少しほほ笑みながら「いいえ」とだけいつて、俯うつむ向き加減かへんになつた。

似に而非物せものでは断ことじてない。俺おれがいつたんでは不ふ合あひだが、まず神こゝろ々々しい innocence

《イノセンス》だ。そういうことを許してもいい。十九……十九……まったくこれが十九という娘の仕業しわざだろうか。渡瀬は少し憚りはばかながらも、まじまじとおぬいさんを眺めなおさずにはいられなくなつた。骨節の延び延びとした、やや痩せぎすのしなやかさは十六七の娘という方が適当かもしれないが、争あらしわれないのは胸のあたりの暖かい肉づき、小鼻と生えぎわの滑かな脂肪しぼうだつた。そしてその顔にはちよつと見よりも堅けんじつ実な思慮分別の色が明かに読まれた。それにしてもあまり自然に見える、子供のように神々しい無邪気。渡瀬は承知しながらもおぬいさんの齡を聞いてみたくなつた。そして突然、

「失礼、あなたはいくつになりますね」

と尋ねてみた。さすがにおぬいさんは少し顔を赤らめたが、少しも隠し隔へだてなく、渡瀬を信頼しきつているように、

「もう十九になりますの」

とおとなしやかに答えた。又はつねに滴り落ちてゐる。しかしながら渡瀬は容易にそこに近寄れないの知らねばならなかつた。そして感歎のあまり、

「ふーむ、珍らしいな、奇体だなあ」

と口に出してしまった。実際考えてみると、渡瀬が今まで交渉を持ったのは、多少の程

度こそあれ男というものを知った娘ばかりだった。本当に男を知らない女性が、こんなに不思議なものを秘していようとはまったく思いもかけなかった。渡瀬にはその宝に触れてみる資格が取り上げられているようにさえみえた。彼は少しあつけに取られた。

「それでは始めていただきます」

そうおぬいさんが凛々しく響くような声でいって、書物をぼんやりしかけた渡瀬の前にひろげたので渡瀬はようやく我に返った。おぬいさんの復習したのは、アーヴィングの「スケッチ・ブック」の中にある、ある甘ったるい失恋の場面を取りあつかったもので、渡瀬がこの前読んで聞かせた時には、くだらない夢のようなことを、男のくせによくこうのめのめ書いたものだと思つたのだが、今日おぬいさんがそれを復習しているのを聞いてみると、あながち夢のようなことには思えなかった。誰にもつばら聞かそうというそれは声なのだろう。どこまでも澄みきつていながら、しかも震いつきたいほどの暖かみを持つたそのしなやかな声は、悲しい物語を、見るように渡瀬の耳の奥に運んできた。始めのうち、おぬいさんがつかえるとすぐに見てやっていたが、だんだんそんな注意は遠退いて、ほれぼれとその声に聴き入らずにはいられなくなった。おぬいの声にもしだいに熱情が加わってくるようにみえた。渡瀬は知らず知らず書物から眼を離して、自分のすぐ前にある

おぬいさんの髪、額、鼻筋、細長い眉、睫毛、物いうごとにかすかに動くやや上気した頬の上部、それらを見るともなく見やりはじめた。すべてが何んという憎むべき蠱惑だろう。これはやりきれない御馳走だ。耳と眼とが酔ったくれていることを聴かなくなってしまうと渡瀬はわくわくしながら考えた。それが渡瀬には容易に専有することのできない宝だと考えれば考えるほど、無体な欲求は激しくなった。教師としてこれほど信頼されているのをという後ろめたさを彼は知らず知らずだんだんに踏み越えていった。しびれるような欲望の熱感が健康すぎるほどの彼の五体をめぐり始めた。

色慾の遊戯に慣れた渡瀬には、恋愛などというしやら臭いものは、要するに肉の接触到衣をかけたまやかしものにすぎない。男女の間の情愛は肉をとおして後に開かれるのだと、今までの経験からも決めていた。渡瀬には、これほど嵩じてきた恐ろしい衝動を堰きとめる力はもうなくなりかけていた。彼は顔にまで充血を感じながら、「おぬいさん逃げるなら今のうちだ。早く逃げないと僕は何をするか、自分でも分らないよ」と憫れむがごとくに自分の前にうづくまる豊麗な新鮮な肉体に心の中でささやいたが、同時に、「逃げるなら逃げてみる。逃げようとして逃がしてたまるか」と頑張るものがますます勢いを逞しくした。眼の前がかすみ始めた。

いつの間にかおぬいさんの声がしなくなっていた。それに気づくとさすがに渡瀬は我れに返った。そしてさすがに自分を恥じた。おぬいさんは渡瀬が今まで妄想していたところよりあまりかけ離れた清いところにいた。彼は書物の方に顔を寄せながら、ともかく、

「ええと、それは」

といったが、どこに不審の箇所があるのか皆か目知れなかった。

「どこでしたかね」

自分ながら薄のろい声で彼はこう尋ねばならなかった。

おぬいさんはきつとした、少し恨めしうらそうに青ざめた顔を心もち震わせながら、つかえたところを指さした。それがまたむやみにやさしいところだった。渡瀬は、今日はおぬいさんも変だなと思った。

復習を終えたおぬいさんはひどく顔色を青くしていた。しかも眼には涙がたまっていた。渡瀬はそれを見ると自分の心持が気取けどられたなど思った。できない相談には決はまっているが、たとえおぬいさんとの結婚をおばさんに打ちだしてみたところが、ひと弾はじきに弾かれるのは知れきっている。万が一おぬいさんを彼の力の下においてみたところ、どこまでいっしょにやっていけるかそれもおぼつかない。なぜというに渡瀬はおぬいさんのような人を

どう取り扱えばいいかの自信がありえなかったから。それだからといって、この気持を捨てられないのも知れきっている。いつそう……そう思った時、おぬいさんが静かに、

「たびたび読みつかえたのをごめんくださいまし。意味が解らなかつたのではないんですけれども、あんまり悲しいことが書いてあるものですから、つい黙ってしまいましたの」

といつて、少し恥じらうようにこちらに瞳ひとみを定めた、渡瀬は背負しよいなげ投を喰つたように思った。たとえば憎悪でもかまわない、自分についておぬいさんが悩んでいてくれたら渡瀬は嬉しかったろう。彼は思い存分の皮肉がいい放ちたくなつた。そしてわざと高笑いをしながら、

「文学者なんて奴は、尾鰭おひれをつけることがうまいですからね」

といつた。もちろんそれだけでは復讐がし足りなかつた。何らの手管てくだもなく、たつた純潔一つで操あやつられていると思うと渡瀬は心外でたまらなかつた。純潔——そんなものの無力を心でつねに主張している彼には（そして彼は十七歳の時から立派に純潔を踏みにじつてきているのだ）小癩こしやくにさわつた。それにしても何んという可憐な動物だ。彼の酷むじたらしい抱擁ほうようの下に、死ぬほどに苦しみ悶えながら彼女の純潔が奪われていく瞬間を想像すると、渡瀬はふたたび眩惑げんわくするような欲望の衝動を感じないではいられなかつた。その後

に彼女が彼から離れてしまおうと、ますます牽ひきつけられてこようと、それはたいした問題ではなかった。

渡瀬は茶の間を見廻わした。そして真剣な準備を仮想的に目論見もくろみながら、

「今日はお母さんはお留守ですか」

と尋ねてみた。この言葉はおぬいさんを（もし彼女があたり前の事を知った女なら）怖れさすに十分だと同時に、反抗か屈服かの覚悟を強いるに十分な言葉なはずだ。

ところがおぬいさんはその言葉にすら怖れる様子は見せなかった。そして自分の教師を頼みきっているように、

「診察に出かけました……よろしく申していました」

と他意なく母の留守を披露ひろうした。赤子の手をねじり上げることができようか。渡瀬はまた腰を折られてしようことなしに机の上にある読本を取り上げて、いじくりまわした。

けれども渡瀬はどうしてもそのまま引き下る気にはなれなかった。彼は無恥むちらしい眼を挙げておぬいさんを見上げ見おろした。その時、ふと考えついたのは、おぬいさんがすでに意中の人を持つているなということだった。恋に酔っている女性ほど、他の男に対して無慾に見えるものはない。おぬいさんの無邪気らしさに欺あざむかれかけたのはあまりばからし

いことだった。十九の女に恋がない……彼は何を考えていたのだろうかと思った。

彼はおぬいさんを見やりながら、

「おぬいさん」

と呼んだ。彼はばかばかしい嫉妬しつとの情の中にも、自分の声に酔いしれたようになった。おぬいさんに向ってその名を呼びかけたのはこれが始めてなのだ。

「あなたは今の話で涙が出ると思いました、……あなたにもそんな経験があつたんですか」

今度はとつちめてみせるぞ。

即座に、

「いいえ」

と答えた彼女の答えは、少しの隠しだてもなく、きつぱりとしたものだった。渡瀬は明かにそれを感じないではいられなかった。何んという、簡単な敗北を見なければならぬだろう。あまりに簡単だ。しかしあまりに明快だ。何もかも素直に投げだして、背水はいすいの陣しんを布いたらしく見える彼女を思うと、渡瀬はふと奇怪な涙ぐましさをさえ感じた。渡瀬はもとよりおぬいさんを憎んでいるのではない。けれども一日おきに向い合っているうち

に、二人の距離と、彼自身の中に否応なしに育っていく無体な欲念との間に、ほとんど憎しみともいえそうな根深い執着を感じはじめていた。ある残^{ざんぎやく}虐^{ぎやく}な心さえ萌^{もぎ}していた。けれどもおぬいさんと面と向って、その清^{すがすが}々しい心の動きと、白露^{はくろ}のような姿とに接すると、それを微塵^{みじん}に打ち壊そうとあせる自分の焦躁が恐ろしくさえあった。すべてが終わったあとにおぬいさんが受けるであろうその悩みと苦しみを考えてみただけでも、心が寒くなつた。不思議な女もあつたものだと思うほかはなかつた。不思議な自分の心だと思うほかはなかつた。……それにつけても渡瀬はいらだつた。

かまうものか、もつといじめてやれ。渡瀬は何んとなしに残虐なことをしてみたい心になつていた。そして自分で自分をけしかけるように、大きような表情を見せながら、

「それで泣くというのは変じやありませんか」

とむりに追窮した。

「経験のないところに感動するつてわけはないでしょう」

彼は自分ながら皮肉な気持の増長するのを感じた。

おぬいさんはほつと小さく氣息^{いき}をついた。そしてしばらくしてから、やや俯向いたまま震えた声で、しかしはつきりといいだした。

「これはただそう思うだけでございますけれども、恋というものは恐ろしい悲しいもののようにおもいます。私にもそんな時が来るとしたら、私は死にはしないかと今から悲しゅうございます。だもんですからああいうお話を読みますと、つい自分のことのように感じてしまうのでございましょうか」

この女は俺の説でも承^{うけたまわ}ろうとするがいいんだ。そんな抽象論で引きさがるかい。

「あなたは実際、たとえば星野か園かに恋を感じたことはないのかなあ」
このくらいいつでも応えないか。

と、今まで素直に素直にとしていたらしいおぬいさんの顔色がさつと変つて、死んだものように青ざめた。俯向けた前髪が激しく震えだした。今度こそは真^まから腹を立てて、貞女らしい口をきくだろう、そう渡瀬が思っていると、おぬいさんは忙^{いそ}がしく袂を探ろうとしたが、それも間に合わなかったか、いきなり両手を眼のところにもっていつて、じつと押えた。石になつたかと思われるほど彼女は身動きもしなかった。

渡瀬は不意を喰つてきよとんとした。……はじめて彼は今まで自分が何をしていたかを知った。彼は自分がこれほど酷^{むじ}たらしい男だとは思わなかった。どうして残^{ざん}虐^{ぎやく}な気持があとからあとから湧きだして、彼に露骨^{ろうこつ}な言葉を吐かしたかが怪しまれだした。俺は悪

覚だ。俺は悪人だ。その俺にもおぬいさんが善人なのはよくわかる。何、それは前からわかっていたんだ。それなのに俺は何んのためにおぬいさんに嫌われるようなことをたて続けにしゃべっていたのだろう。俺は悪党だが善人を悪党の群に引張りこむほどの悪党ではないんですよ、おぬいさん。

「悪かったおぬいさん、僕が悪るかった。……僕はどうもあなたみたいな人を取りあつたことがないもんだから……失敬しました。……僕はこんな乱暴者だが、今日という今日は我を折りました。……許してください。僕はこうやって心からあやまるから」

そういつて、彼は几帳面に坐りなおると、膝の上に両手をつけて、頭をちよつと下げた。彼はまったくそうした気持ちにされていたのだ。

何をどういつたか、そのあととはよく分らなかつたが、渡瀬はとにかく居心地がいやに悪くなつて、尻から追いたてられるように急いでおぬいさんの家を飛びだした。

とつぷりと日が暮れて、雪は本降りに降りはじめていた。北海道にしては大粒の雪が、ややともすると襟頸に飛びこんで、そのたびごとに彼は寒けを感じた。

彼はとつと新井田氏の方を指して歩いた。「ああいけねえ」と独りごちた。何んだか打ちのめされたようだった。力が抜けてしまった。ばかばかしく淋しかった。寒いよ

うに淋しかった。

「新井田の方はあと廻わしだ」そう彼はまた独りごちて、狸小路たぬきのいきつけの蕎麦屋そばやにはいった。そして煮肴にざかな一皿だけを取りよせて、熱燗を何本となく続けのみにした。十分に酔ったのを確めると彼は店を出た。

しかし渡瀬は酔いがすぐ覚めそうで不安だった。で酒屋の店に出喰わすと、そのたびごとに立ち寄って盛切もつきりをひっかけた。

「何、俺は結局おぬいさんとどうしようというのではなかった。ただ何んとしてもおぬいさんが可愛いんだ。可愛い犬ころをいじくり廻わして、きやんといわさなければ、気がすまなくなるあれなんだ。いわばあれなんだな。だが待てよ、そうでもないのかな」

ある酒屋では小僧がからかうように、
「学生さん、お前さん酔っていますね」

といった。ふむ、俺の酔ってるのが分るのは感心な小僧だ。

「お前はまだ女郎買いはしめえな」

「冗談じゃないよ、学生さん」

渡瀬は十三四らしいその小僧の丸っこい坊主頭を撫でまわした。

「お前は俺が酔ったまぎれに泣いてるでも思うんか。……よし、泣いてると思うなら思え。涙は水の一種類で小便と同じもんだ」

こういいながら彼は、またふらふらとその店を出た。

彼は人通りの少ないアカシヤ通の広い道を、何んだか弱りしよびれた気持になって、北の空から吹きつける雪に刃向って歩いていった。彼は自分が忠義深い士のような心持だった。伏姫にかしづく八房のようでもあった。ああ俺はまったくあの畜生だな。まったく涙がほろりと流れてきた。何んだかばかばかしいと彼は思った。

新井田氏の玄関によろけこむと、渡瀬は拳固げんこで涙と鼻水とをめちやくちやに押しぬぐいながら、

「奥さあん」

と大声を立てて、式台にどつかと尻餅をついた。

奥さんはすぐドアを開けて駈けだしてきた。

「あら大変。あなた、戸も締めないで雪が吹きこむじやないの」

といいながら、そこにあつた下駄を片方の足だけにはいて、斜に身を延ばして、玄関の戸を締めた。股またをはだけた奥さんの腰から下が渡瀬のすぐ眼の前にちらついた。

「無礼者……とは、かく申す拙者せつしやのことですよ……酔っている？ 酔っているかと問われれば、酔っています。……ガンベの酔ったのを見たことがありますか……現在ははは……現在を除いてさ……」

奥さんのしなやかな手が、渡瀬の肩の雪を軽く払っていた。

「いた、……いた、……痛いですよ、奥さん」

「あなた今日は本当にどうかしているわね……さあお上りなさいな」

渡瀬は奥さんの手のさわったところをさすりながら、情けなくなつて、そのあでやかな、そのくせ性せいせいというものばかりででき上つているような顔を見上げた。

「情けないねまつたく……あなたの顔を見るとガンベは……まあいい、……それはそれとして、と……奥さん、僕は今日は、こんなへべれけの酔っぱらいになつちまつたから、レコ……じゃないあなたにだ……あなたのいう『あなた』さ……はははは、その『あなた』に、へべれけの酔っぱらいになつちまつたから、今日は休む……休むといってください。さようなら」

渡瀬はやおら腰を上げにかかったが、また酔のさめるのが不安になった。彼は腰をすえた。

「奥さん、ウヰスキーを一杯後生だから飲ませてください」

「あなた、そんなに飲んでいいの」

奥さんは本当に心配らしく、立ちながら、眉を寄せて渡瀬の顔を覗きこむようにした。渡瀬は確信をもって黙ったまま深々とうなずいた。物をいうと泣き声になりそうだった。

「いけませんよ……じゃあ待つていらつしやいよ」

待つている間、涙がつづけさまに流れ落ちた。

渡瀬の眼の前につきだされたのは、なみなみと水を盛った大きなコップだった。渡瀬はめちやくちやに悲しくなってきた。それを一呑みに飲み干したい欲求はいっぱいだったが、酔いがさめそうだから飲んではならないのだ。

「や、さようなら」

あつけに取られて、コップを持ったまま見送っている奥さんに胸の中で感謝しながら、渡瀬は玄関を出て往来に立った。

雪はますます降りしきっていたが、渡瀬はどうしても自分の家に帰る気にはなれなかった。薄野^{すすきの}薄野という声は、酒を飲みはじめた時から絶えず耳^{みみもと}許に聞こえていたけれど、手ごわい邪魔物がいて——熊のような奴だった、そいつは——がつきりと渡瀬を抱き

とめた。渡瀬の足はひとりでに白官舎の方に向いた。

「おぬいさん……僕は君を守る……命がけで守るよ……守ってくれなくともいいって……そんなことをいうのは残酷だ……僕は君みたいな神様をまだ見たことがなかったんだ……何んにも知らなかったんだ……星野って奴はひどいことをしやがる奴だな……あいつのお蔭で俺は、……俺は今日、救われない俺の墮落を見せつけられっちまったんだ。美しいなあおぬいさんは……涙が出るぞ。土下座をして拝みたくならあ……それなのに、今でも俺は、今でも俺は……機会さえあれば、手ごめにしても思いがとげたいんだ。俺はいつたい、気狂か……けだものか……はははは、けだものがどうしたというんだ。俺だって、おぬいさんくらい美しく生れついて、銀行の重役の家に育って、いい加減から貧乏になつてみる、俺だって今ごろは神様になつて……神様もけだものもあるかい。……おぬいさんが可哀そうだ……俺は何んといつてもおぬいさんが可哀そうだ。……理窟なしに可哀そうだ……可愛さあまつて可哀そうだ……俺は何んといつても悪かったなあ……生れ代つてでもこなければ、おぬいさんの指の先きにも、……現在触つてみたところが結局触つたにならない俺なんだ……俺は自分までが可哀そうになってきたぞ……」

いつの間にか彼は白官舎の入口に立っていた。

暗いランプの下のチャブ台で五人ほどの頭が飯を食っていた。渡瀬はいきなりそれらの間に割りこんで坐った。

「ガンベか。ただ今食事中だ、あすこの隅にいつて遠慮している。今夜はばかに景気がいいじゃないか」

といったのは人見だった。そこには園もいた。あとは誰と誰だかよく解らなかった。

「貴様は誰だ。(顔を近づけると知れた)うむ柿江か。誰だそこにいる貴様二人は」

「森村と石岡じゃないか。西山の代りに今度白官舎にはいったんだよ。臭いなあ……貴様はまだ石岡にやられるぞ。そつちにいつてろつたら」

とまた人見がいつた。渡瀬は動かなかった。

「何をいうかい。今日は石岡も石金もあるもんか……酔ったぐらいで人をばかにしやがると承知しないぞ、ははは……おい人見、ここには酒はないのか、酒は。……ねえ? ねえとくりや買うだけだ。おい婆や……もつとよく顔を見せろ。ふむ、お前も末座ながら善人の顔だ……酒を買ってきてくれ。誰かそこいらに金を持っている奴はないか。俺の寿命を延ばすとおもって買ってきてくれ。飯なんぞもぞと食ってる奴があるかい、仙人みたい奴らだな」

柿江がそうそうに飯をしまつて立とうとした。それを見ると渡瀬はぐつと癩しやくにさわつた。
 「柿江……貴様あ逃げかくれをするな。俺は今日は貴様の面皮めんびを剥ぎに来たんだ。まあい
 いから坐つてろ。……俺は柿江の面皮を剥ぎに来た、と。……だ、それでもねえ。俺は皆
 んなに泣いてもらいに来たんだ。石岡、貴様はだめだ。貴様のようなフアナティクはだ
 めだとしてだ、……おい、皆んな立つなよ。……何んだ、試験だ……試験ぐらい貴様、教
 場に行つて居眠りをしていりやあ、その間に書けつちまうじゃねえか」

「俺に用がなければ行くぞ」

石岡が顔色も動かさずに素晴らしいながら座をはずしかけた。

「石岡、貴様はクリスチャンじゃねえか。一人の罪人が……貴様はいつでも俺のことをそ
 ういうな。いんやそういう。……罪人が泣いてもらいたいといっているのが聞こえなかつ
 たんか。……たとえ俺がだめだといったところが、貴様の方で……まあ坐れ、坐つてくれ
 ……一人でも減ると俺はおもしろくないんだ……坐れえおい。俺が命令するぞ」

婆やが何かいいながらチャブ台を引いた。壁ぎわに行つてばらばらにそれに倚よりかかっ
 ている五人が、朦朧もうろうと渡瀬の眼に映つた。ただ何んということもなく涙が湧いてきた。
 彼はばかばかしくなつて大声を揚げて笑つた。

「園君じゃねえ、園はいるか園は。それか。君……君はじゃねえ貴様はおぬいさんに惚れほているだろう。白状しろ。うむ俺は惚れてる。悲しいかな惚れている。悲しいかなだ。真に悲しいかなだ。俺は罪人だからなあ。悔くい改めよ、その人は天国に入るべければなり……へへ、悔い改めら、ら、られるような罪人なら、俺は初めから罪なんか犯すかい。わたくしは罪人でございます。へえ悔い改めました。へえ天国に入れてもらいます……ばか……おやじが博奕打ばくちうちの酒喰らいで、お袋の腹の中が梅毒腐れで……俺の眼を見てくれ……沢庵たくあんと味噌汁みそじるだけで育ち上った人間……が僭越けんえつならけどものでもいい。追従しゆいにいつてるんでねえぞ。俺は今日け——だ——も——のということがはつきり分つたんだから。星野の奴がたくらみやがったことだ」

「おいガンベ、そんなに泣き泣き物をいったって貴様のいうことはよく分らんよ。今日はこれだけにして酔っていない時にあとを聞こうじゃないか」

それが石岡の声らしかった。

「ばかいえ貴様、そうきゆうにわかつてたまるものか。飲んだくれ本性たがわずということを知らん。……婆や、酒はどうした、酒は……。けれどもだ……貴様のけれどもだ、おい西山……ふむ、西山はもういねえのか。とにかくけれどもだ、貴様たちは俺が罪人な

ることを悲しんでいないと思うと間違ってるぞ。……はははそんなことはどうでもいい。それは第一貴様たちの知ったこっちゃないや、なあ。……とにかく……皆んな貴様たちはおぬいさんを知ってるな。けれども、貴様たちは一人だって、どれほどあの娘が天^{エンジェル}使であるかつてことは知るまい。俺は今日それを知ったんだ。この発見のお蔭で俺はこのとおり酔った。わかるか」

「わからないな」

それは人見だった。申し合わせたように二三人が笑った。

「ははは……（彼はやたらに涙を拭った）俺にもわからんよ。……園、貴様はおぬいさんに惚れてるんだろう」

園はほほえみながら静かに頭をふった。

「そんなことはない」

「じゃ惚れる。断じて惚れる。いいか。俺は万^{ばんなん}難を排して貴様たちに加勢してやる。俺は死を賭^として加勢してやる。……園、俺は今日一つの真理を発見した。人生は俺が思っていたよりはるかに立派だった。ところが……じゃいかん……だからだ。whereas 《フエラアーズ》じゃない。therefore 《ゼアフォー》だ。それゆえにだ……俺のようなやつが、

住むにはあまり不適當だ。こういうんだ。悲觀せざるを得ないじゃないか。……しかし俺は貴様たちを呪うようなことは断じてしないぞ。……安心しろ貴様たちを祝福してやるんだ、俺は死を賭して貴様たちに加勢してやる。……ははは……とか何とかいったもんだ。どうだ石岡。石金先生、……相変らず貴様はせわしいんか。貴様が俺に酒の小言さえいわなけりや、一枚男が上るんだがなあ……しかし貴様の老爺親切には俺はひそかに泣いてるぞ。……余子碌々……おいおい貴様たちは何んとか物をいえよ、俺にばかりしゃべらしておかずに……園、貴様惚れる。いいか惚れる」

「ガンベはだめだよ。貴様いつでも独りぎめだからなあ。他人の自由意志を尊重しろ、園君には園君の考えがあるだろう」

帽子を被ったままの言ったんで、森村だと渡瀬にも分った。

「ふむ、そうか。……そんなものかなあ……」

「園君、君はもうあつちに行くといい……。そしてガンベもう帰れ、俺が送っていつてやるから。今夜は雪だからおそくなると難儀だ」

そう人見がとりなし顔にいったけれども、園は座を立とうとしなかった。渡瀬はどうしてもうんといわせたかった。園が不断から言葉少なで遠慮がちな男だとは知っていたけ

れども、これだけいうのに黙っていられるのは、癪しやくにさわらないでもなかった。それよりも渡瀬はすべてが頼りなくなってきた。自分でも知らずに長く抑えつけていた孤独の感じが一度に堰せきを切つて迸りほとぼしでたかと淋しかった。

「園、貴様何んとかいつてもいいじゃないか。俺は酔っぱらっているさ。……酔っぱらっているからって渡瀬作造は渡瀬作造だ。それとも渡瀬作造なるものに……まあいい園、俺と握手をしろ。そうだもつと握れ。俺が貴様の自由意志を尊重していないとしたらだな……俺はあやまる……。どうだ」

澄んだ眼を持った園の顔はすぐ眼の前にあつた。それを涙がぼやかしてしまった。園の手が堅く渡瀬の手を握つたかと思うと、

「僕は君の言葉をありがたくさつきから聞いていたんだよ。よく考えてみよう」

「考えてみよう？……好男子、惜しむらくは兵法を知らず……まあいい、もう行け」

「僕も人見君といつしよに君を送ろう」

「酔不成欲惨別か……柿江、貴様ははじめから黙つたまま爪ばかり噛んでいやがるな……

……皆な聞け、あいつは偽善者だ。あいつは俺といつしよに女郎を買つたんだ」

「おいおいガンベ、酔うのはいいが恥を知れ」

それはすべてを冗談にしてしまおうとするような調子だった。

「恥を知れ？　はははは、うまいことを言いやがるな。……」

まだいい募りたかったが、その時渡瀬は酔のさめてくるのを感じた。それは何よりも心淋しかった。寝こんでしまつて自然に酔いがさめるのでなければ、酔ぎめの淋しさはとも渡瀬には我慢ができなかつた。彼は立ち上つた。

「便所か」

と人見も同時に立つてきた。廊下に出るときゆうに刺すような寒気が襲つてきた。婆やまでが心配そうにして介抱しに来た。渡瀬は用を足しながら、

「婆や、小便是涙の一種類で、水とおん同なじもんだ……じゃなかつたかな……とにかくそういうことを知つてるか、はははは」

といつて笑つてみたが、自分ながら少しもおかしくはなかつた。何しろ酒にありつかなければもういられなくなつた。

彼は人見と園とにつき添われて、白官舎から、真白に雪の降りつもつた往来へとよろけでた。

* * *

どうしても気の許せないようなところのある男だった。それが、ともかく表面は信じきっているように見える父の前に書類をひろげてまたしゃべりだした。（父は実際はその言葉を少しも信じてはいないのに、おせいの前をつくろって信じているらしくみせているのではないか。つまり父までがぐるになつていっているのではないかとさえ疑った）

「こうした依頼を受けているんです。土地としては立派なもんだし、このとおり七十三町歩がちよつと切れているだけだから、なかなかたいしたものだが、金高が少し嵩むので、勸業が融通をつけるかどうかと思つてはいるんですがね……もつともこのほかにもあの人の財産は偉いもので、十勝とかちの方の牧場には、あれで牛馬あわせて五十頭からいるし、自分の住居というのがこれまたなかなかことでさあ。このほか有価証券ゆうかしょうけん、預金の類をひつくるめると、十五万はたしかなところですから、銀行の方でも信用をしてくれるとは思つているんですが」

そういう間にも、その男は金縁きんぐちの眼鏡の奥から、おせいの様子をちらりちらりと探るようを見た。優しいかと思うときゆうに怖くなるような眼だった。

「で、その金を借りだしてどうなさろうというのかな」

父は書類を取り上げながらこう尋ねた。待つていたと言わんばかりに、その男はまた折

鞆の中から他の書類を取り出した。

「それがこれになろうと言うんです。これがまた偉いもんですぜ。胆振国イフリ長万部オシヤマンベ字トナツブ原野ですな。あすこに百町歩ほどの貸下げを道庁に願いで、新たに開墾かいこんを始めようというんです。今日来がけにちよつと道庁に寄っていただいたが、その用というのがこれです。たいていだいじようぶ行きます。……何しろあの若さでこれだけの事をやり上げようというんだから……若さといつても四十だが、なあに男の四十じゃあなた、これから花というところです。やあ、どうも話がわき道に外れそちやつたが、どうでしょうな、お嬢さんのお考えは……ただどうも問題になりそうなのは年のちがいじゃあるが」

と、まともにおせいの方を見て、

「あなたが三十におんななさる時を思やあ、むこうはやつと四十九だ。ちようどいつり合いになりまさあ。どうも男つて奴は、これで五十やそこらのうちに細君が四十だ四十一だなんてことになるよ、つい浮気になりたがるものですよ。……ねえお父さん、お互にまんざら覚えのないことでもないしさ」

おせいはいこんなことをいわれるのを聞いていると、とてもこの話は承諾はできないと思つた。聞いているうちに、その人が憎らしくなつて、いつそ帰つてしまおうかと思つた。

父は袖の下に腕を組んでじつと考えこむようにしていた。おせいは二日前に兄の清逸から届いた手紙のことを心の中で始終繰り返していた。お父さんは家のものに何んにも相談しないが、お前の結婚のことを考えているらしい。昨日も浅田という元躰ふかじょう化場で同僚だった鞆さやとり取のような男が札幌から来て、長いこと話していった。お母さんが立ち聴きした様子から考えると、どうもそうらしい。しかもお前を貰いたいというのは札幌の梶という男じゃないかと思う。それならその男は評判な高利貸でしかも妾めかけを幾人も自分の家の中に置いているという男だ。どんなことがあつてもいうことを聴いてはいけな。自分のところは極端に貧乏している。しかも自分がいつまでも書生生活をしているばかりで、お前にまだ長い間苦勞をかける。お前の婚期がおくれるくらいになっているのを知りながら、それをどうすることもできない自分を思うと、自分は苦しい。けれども今度のだけは是ぜが非ひでも断れ。そんなことが書いてあつた。

「どうでしょうな」

五つ紋の古い紬つむぎの羽織を着たその男は、おせいの方をも一度じつと見て、その眼を父の方に移した。

「どうだな、おせい」

父はまたその男の眼を避けるようにおせいを見るのだった。おせいは身がすくむような気がして、恨めしそうに父を見かえした。

「浅田さんもさつきからこれほど事をわけて話してくださるんだから、お前、何んとか御挨拶をしないじやならんぞ。お父さんもそうたびたび千歳からかけて足を運ぶわけにはいかないしよ」

と父は、いつそう腕を固く組んで、顔を落して説き伏せるように一語一語に力を入れた。それでもおせいは何んと答えようもなかった。ようやくのことで唾を呑みこんで、居住まいをなおしながら下を向いた。

「いや、こりや私がいちやかえって御相談がまともりますまい。私は勸業の方の人に用もありませんししますから、これでひとまずお暇とします。……じやお嬢さん、ひとつよくお考えなすつて。仲人口なこうどぐちと取られちや困りますが、お父さんと私とは古いおなじみだから、けつして仇やおろそかに申すんじゃないんですから、どうか、そこんところをお忘れなく……」

そしてその人は父と簡単な挨拶を取り交わすと、そこにあった書類をいちいち綿密に鞆の中にしまいこんで座を立つた。おせいが父のあとについて送りだそうとすると、浅田は、

「お嬢さん、もうようございます。何、星野さんちよつとお顔を」

いったので、おせいはわざと遠慮した。二人は部屋の外の階子段の上で、あれこれ十分ほどもほそぼそと話をしていた。なぜともなく五体が震えるのを、寒さのせいかと思つて、腰を折つて火鉢の上に手をかざした。壁が崩れ落ちたと思うところに、にっしやうき 日章旗を交叉した間に、かんていりゆう 勘亭流で「祝開店、佐渡屋さん」と書いたびらをつるして隠してあるような六畳の部屋だった。建てつけの悪いガラス窓が風のためにひどい音を立てて、すきまかぜ 盗風が屋外のように流れこんだ。

父はやがて小むずかしい顔をして帰ってきた。「寒い家だどうも」とあたりを見まわしているのが、千歳の家を知りぬいているおせいには気恥かしいくらいだった。

「どうだ」

「私はいやです」

おせいは即座に答えた。父はむつとしたらしかつたが、やがてしいて言葉を和らげながら、

「そうにべ膠なくいって話も何もできはしないがな。浅田さんのいうとおり、年のところに行くと少し明きすぎるようだが、わしらのような暮しでは一から十まで註文どおりにいか

ないのは覚悟してくれんと埒らちはあくものではないぞ。……先方では支度も何もいらな
いと言うのだ。支度がいるようでは恥かしい話だが、今のところお父さんには何んとも工
面がつかんからなあ」

「先様は何んという人です」

「先方はお前、今も浅田さんがいうとおりなかなか○持ちで、自分が貧乏から仕上げたの
だから、嫁は学問がなくてもやはり苦労して育つたしとやかなのが欲しいと、まず当世に
珍らしい……」

「何という人なんです」

「名か、名はその、梶といって、札幌では……」

はたして兄からいつてきたとおりだった。おせいはいあまりといえは父もあまりだと思っ
た。

「そんなら私はどうしてもいやです。幾人も妾めかけを持っているような高利貸のところになん
ぞ……お父さんもちつと考えてくださればいいに」

といううちに、彼女は胸が熱くなつて涙ぐんでしまった。兄さんですら、小さい時、あ
れほど自分を可愛がつてくれた兄さんですら、まるで自分の事しか考えてはいないし、お

父さんはお父さんで、自分の娘だか、他人の娘だか区別のないような仕向け方をする、と思うと、おせいは誰にたよるあて的もないのを感じた。彼女はこの五年の間の苦しい女中奉公の生活——それは光明も何も無い、長い苦しみの一つらなりだった——を思いめぐらした。始めて小樽に連れだされたのは十七だった。まるで山の中から拾ってきた猿のようなあしらいを受けた。箸の上げおろしにも笑いさいなまれ、枕につくたびごとに、家恋しさと口惜しさのために忍び泣きで通した半年ほど。貰った給金は残らず家の方に仕送って家からたまに届けてよこす衣類といつては、とても小樽では着られないものばかりなので、奥さんからは皮肉な眼を向けられ、朋輩からは蔭かげくち口をたたかれる。それをじつと堪らえて、はいはいといつていなければならぬ辛らさ。月日は経ったけれども、小学校で少しばかり習い覚えた文字すら忘れがちになるのに、そこのお嬢さんたちが裕ゆたかに勉強して、一日一日と物識りになり、美しくなっていくのを、黙って見ていなければならぬ恨めしさ。七時過ぎまでは食事もできないで、晩食後の片づけに小皿一つ粗そそうをしまいと血眼ちまなこになつている時、奥では一家の人たちが何んの苦勞もなく寄り合つて、ばか騒ぎと思われるほどに笑い興じているのを聞かなければならぬ妬ねたましき。それにも増して苦しかつたのは奥さんの意地悪だ。妙な癖で、奥さんは家内のものの中にならず一人は目のかたきになる人を

作っておかなければ気がすまないのだ。その呪いの的になる人は時々変りはしたけれども、
 どういうものかおせいは貧乏籤びんぼうくじをひいた。露ほどの覚えもないことをひがんで取って、
 奥様一流の針のような皮肉で、いたたまれないほど責めさいなむのだった。これが嵩こそうじると
 自分までヒステリーのようになって、暇を取ったくらいでは気がすまないで、面あてに
 首くびでも縊くろうかと思う時さえあった。さらにそれにも増していやらしかったのは旦那様の
 淫みだらなことだった。奥さんの目棲めづまを忍んでその老人のしかけるいたずらはまるで蛇に巻か
 れるようだった。それをおせいは軽く受け流して逃げなければならなかった。誰に訴えよ
 うもないような醜いことだった。さらにさらに、それにも増して苦しかったのは、若様と
 いわれるその家の長男の情けだった。その人は誰が見ても綺麗な男というような人だ。お
 まけに旦那とはうらはらに、上品で、感情の強い人で、家の人たちには何んとなく憚はばかられ
 ているらしかった。淋しい感じの人だ。おせいは住みこんだ時からこの若様わかしという人に惹
 き寄せられた。朋輩がその人の噂を好いたらしくするのを聞くと、心がひとりでにときめ
 いて、思わず顔が紅くなった。けれども何を思っても及ばないこととしてすっかり諦めて
 いた。諦めようと苦しんでいた。ところが去年のこと、ふとしたおりにその人からおせい
 は挑いどみかけられた。おせいは眼をつぶるようにして一生懸命にその誘惑からのがれた。そ

して底のないような淋しさから声を立てて泣いてしまった。二十という年までじつと、じつと押えつけ、守りぬいていた火のような悲しい思いが、それからのたびたびの危い機会に一度に流れでようとしたのだったが、そしてその人が苦しんでいる様子をみると、いとしくなって何もかも忘れようと思え思う瞬間はいつもあつたのだけれども、彼女はいつでも自分の家の貧しさを思った。健康の弱い兄を思った。白痴同様な弟を思った。貧乏はしても父の名に泥を塗るなど、千歳を出る時きびしくいいわたした父の言葉も思った。自分の心をゆがめきつてしまいはしないかと思われるようなこれらの辛らさ、悲しさ、妬ましさ、苦しさを今まで堪えに堪えてきたのはいったい何のため。

おせいみぞおちは水月に切りこむようにこみ上げてくる痛みを、帯の間に手をさしこんでじつと押えた。父はおせいのあまりに思い入った様子に思わず躊躇ためらつて、しばらくは言葉をつぐこともできなかつた。

二人はお互の間に始めてこんな気づまりな気持を味いながら、顔を見合せるのも憚はばかって対座していた。

「どうしてもお前はいやというのか」

おせいみぞおちはもう涙も出なかつた。乾いたままで唇が無性に震えた。

「お父さん、それだけはどうか勘忍してください」

父は地声になって口をとがらした。

「勘忍してくださいといったところが、これはお前のことだからお前の勝手にするがいいのだが、どういう訳だか訳を言わにや、ただ許してくれではお父さんも困るじゃないか」

「お父さんは私を……私を高利貸の……妾めかけになさるつもりなんですか」

「とんでもないことを……お前はさつきから高利貸高利貸と言うが、それは働きのない人間どもが他人の成功を猜そねんでいうことで、泥棒をして金を儲けたわけじゃなし、お前、金を儲けようという上は、泥棒をしない限り、手段に選み好みがあるべきわけがない。金儲けがいやだとなれば、これはまた別で、お父さんのようになるよりしかたのないことだ。安田でも岩崎でも同じこった、妾囲いとてもそうだ。妾を持つてる手合いは世間ざらにある。あの人は同じ妾囲いをして、隠しだてなどをしないから、世の中でとやかかいうのだが、お父さんは梶はそこはかえって見上げたものだと思ってるくらいだて。それもお前を妾にくれというのじゃなしさ……」

「けれども、あの人にはちゃんと奥さんがあるんじゃないやありませんか」

「そ、それだが……先方では妻にくれるというのだから、今の細君をどうするとかこうす

るとかそれはむこうに思わくがあつてのことに違いないとお父さんは思つてゐるがどうだ。何しろこつちは先方の言い分を信用して……」

おせいあきは惘あきれるばかりだつた。父がどうしてこんなになつたのか、どう思つてみようもなかつた。いくらなんにも知らないおせいにも、自分のような貧乏な、無学な、知り合ひもないような人間を正妻に迎えるわけがないのは分りきつてゐるのに、しらじらしい顔つきをして、自分の娘をごまかそうとするらしい父が邪慳じゃけんの鬼のようにも思えた。

「お前は何んでも世間の見るとおりに物を見ようとすからいけない。高利貸といえばすぐ鬼のような無慈悲な奴、妾を持つといえばすぐ※々《ひひ》のような淫乱者、そう頭から決めてかかるんだが、そういちがいにはいえるもんじやない。何んでも浅田の話では、見たところは小作りな、あれが評判の梶という人かと思つて物わりのいいやさしい人だということだ。それが合田さんの所でお前を二度ほど見かけて、ぜひとことになつたものらしい。お前がお茶でも持つてでた覚えはないかな。あこの左の方にちよつと眼に立つほどの火傷のあとがあるそうだが……」

おせいあきはそれを聞くと身がすくむようだつた。体がかたくなつた。肩が凝りきつた時のように、頸筋くびすじから背中がこわばつて、血のめぐりが鈍く重く五体の奥の方だけを動くよ

うで、それが胸のところを下の方から気味悪く衝き上げた。眼界がだんだん狭まって、火鉢にかざされた、長い指の先がぶるぶる震えどおしている。皺しわくちやな父の両手だけが、切り放したようにぼんやり見えていた。「いつ私はその人に見られていたんだろう」と思うと、怖ろしさと無気味さに氣息いきがとまった。

「お前見たことはないか」

「いいえ」

おせいの眼は父の手からすべり落ちて、膝の上に乗せてある自分の手の方に行つた。涙にとつたハンケチを丸めてぎゅつと握りつめているそのかぼそい手も他人ひとの手のようだった。若様が自分の手の間に挟んで、やさしく撫でてくださろうとした手だ。それをむりにふり放した手だ。……涙がはらはらと彼女の眼から新しくこぼれた。

気まづい沈黙がそのあとに続いた。

いつそ……ああ若様と私とは身分がちがう。

すぐ見棄てられるにきまつている。その時の苦しさを思うとどうしても今までどおりになっているほかはない……と……私はずっといつかは敗けてしまふに決まっている……たとえ、見棄てられても、一度だけでも……おせいは切羽せつぱつまった気持の中で、悲しい嬉し

い瞬間を心に描いた。それがせめてもの腹いせだった。……そして死んでしまえばそれでいいんじゃないか……

「お父さんはたつてと勧めるんじゃない……が、お前はどうしても気が向かないというのだな……」

おせいはいびくりとして夢のようなところから没義道もぎどうにひきもどされた。彼女はいつの間にかハンケチを眼にあてていた。

「まあお父さんの胸の中もひととおり聞いてくれ。俺も五十二になる。昔なら殿様に隠居を願いでて楽しくつろぐ時分だが、時世とはいい条じょう……また、清逸の奴がどういふつもりなのか、あの年になっていて、見さかいのなき加減はない。このごろもお前、家において、毎日の家の様子は見ているくせに、箒ほうき一つ取るでもなく、家いっぱいにひろがって横着をきめている始末だ。学問ができるのなんのつて人がちやほやするのを真まに受けてしまつてからに、有頂天うちようてんになっている。あんな病気を背負いこんで薬代だけでもなみたいでないのに、東京へ出かけようといつてさらに聞かんのだ。俺もこうやってはいるがいざとなればそのくらしいの工面はつくから、苦しいながらあちこち世話をやいてやってみると、そんなところから金を出してもらうのは嫌だとか何んとか、つべこべいいくさる。……」

こういう不平をきつかけに父は母が少しも甲斐性のないことや、純次がますます物わかりが悪くなって、親を睨めかえすしぶとさばかりが募るといふことや、躰化場の所長が代ると経費が節減されて、店の方の実入りが思わしくないといふことや、今度の所長の人格が下司のようだといふことや、あらん限りの憤懣を一時にぶちまけ始めた。それをじつとして聞いているおせいはずがに父が哀れになった。五十二というのに、その人は六十以上に老い耄けていた。これほどの貧乏に陥るのもとはといえは何んといつても父の不精から起つたことだと、苦しいにつけ、辛らいにつけ、おせいは父を恨めしく思う気持になるのだつたが、眼前世の中が力にあまつて、当惑しているような父の姿を見ると、母も母だ、兄も兄だといふ心が起つた。

「愚痴には違いない……愚痴には違いないがお前にでも聞いてもらわにやお父さんは愚痴をこぼすせきもないような身柄になつたよ、いやどうも……それに、これもお前だけに聞いてもらうことだが、じつは俺も、その、苦しさから浅田さんに頼んで、金をば六百円ほど融通してもらつているので……」

おせいはそれが崇つていふのだと始めて始終が見えきつたように思った。

「もつともあれはあれで親切人だから、そのことを根に持つような人柄ではないが、俺は

頑固な昔気質だから、どうも寝ざめがよいのだ。俺は困つとるよ……」

と父は膝のまわりを尋ねまわして、別々になつてゐる煙草入と煙管とを拾い上げると、慌てるようにして煙草をつめたが、吸うかと思つくと火もつけずに、溜息とともにそれを畳の上に戻してしまつた、おせいはおせず父の顔を窺つた。垢染みて、貧乏皺のおびただしくたたまれた、渋紙のような頬げたに、平手で押し拭われたらしい涙のあとが濡れたままで残つてゐる。そこには白髪の本三ほど生えた大きな疣もあつた。小さい時、きょうだいで寄つてたかつて、おちちだといつてしやぶつた疣だ。……思案にあまるといふのはこれだろうか。彼女の心はしーんとしたなりで少しも働こうとはしなかつた。おせいはひとりでに襟の中に顔を埋めた。無性に悲しくなるばかりだつた。

力がなえきつてみえた父は、最後の努力でもするように、おせいの方に向きなおつて、膝の上に両腕をついて丸っこくかこまつた。

「おせい……」

鼻をすすりながらそれを横撫でにした。

「甲斐性のないおやじと下げすんでくれるなよ。俺も若い時に、なまじつかな楽な暮しをしたばかりに、この年になつての貧乏が、骨身にこたえるのだ。俺一人が楽をしようとい

うではけつしてないがな、何しろ、今日日々の米にも困ってな……この四年あまりというもの、お前のしてきた苦労も、俺は胸の中でよつく察している。親というものは子にかけちや神様のようになんでも分る。お前は小さい時から素直な子だったが、素直であればあるほど……」

「お父さんそんなことをいうのはもうよしてください……」

おせいとはほとんど憤りいきじおたいような悲哀に打たれて思わずこう叫んでしまった。

とにかく二三日中にはつきりした返事をする約束しておせいはようやく父の宿を出た。もうまったく日が暮れていた。シヨールに眼から下をすっかり包んで、ややともすると足をさらおうとする雪の坂道を、つまさきに力を入れながらおせいはせつせと登っていった。港の方からは潮騒のような鈍い音が流れてきた。その間に汽船の警笛が、耳の底に沁しみこむように聞こえている。空荷になった荷物にもつぞり櫓が、大きな鈴を喉のどにぶらさげて毛の長い馬に引かれながら何台も何台もおせいのそばを通りぬけた。顔をすっかり頭巾ずきんで包んで、長い手綱で遠くの方から櫓あやつを操っている馬方は、寄り道をするようにしておせいを覗きこみに来た。幾人となく男女の通行人にも遇った。吠えつきに来た犬もあった。けれどもおせいにはそれらのものが、どれもこの世界のものではないようだった。今まで父といっし

よにいたというのも嘘のようだった。万人が行ったり来たりする賑かな往来、そこでおせいが何百人何千人となく行き遇つた人々、その中には、おせいが歩いているような気持で歩いている人がやはりいたのだろうか。それにしても自分は今まで何んというのんきな自分だつたらう。そんな苦勞を持つてゐるらしい人は一人だつて見当らないようだったが。……人間つていうものはやはりこんな離れ離れな心で生きてゆくものなのだ。底のないような孤独を感じて彼女はそう思つた。

主家の大きな門の前に来た。朋輩たちがおせいの帰りの遅いのをぶつぶつ言いながら、彼女の分までも働いているだろうと思つたと気が氣でなかつた、大急ぎで門を駈けこんだ。

こちらから挨拶もしないうちに、台所で働いてる女中の一人が、

「早かつたわね。奥さんがお待ちかねよ」

といつた。

「若様もお待ちかねよ」

ともう一人のがいつた。おせいは何んともいえない淫^{みだ}りがましいいやなことをいう人だと思つた。

おせいは取りあえず奥の間に行つて、講談物か何かを読み耽^{ふけ}つてゐるらしい奥様の前に

手をついた。そして、

「ただいま戻りました。おそくなりまして相すみません。父がよろしくと申されました」
 というと、いつもの癖の眼鏡の上の方から眼を覗かせて、睨むようにこつちを見ていた
 奥様は、

「父がよろしくと申されましたかね。あの（といって柱時計を見かえりながら）お前もう
 御飯を召しあがりましょうね」

と憎さげにまた書物を取り上げた。どうかすると気味が悪るいほど親切で、どうかする
 とこちらがヒステリーになりそうに皮肉なのがこの人の癖だとは知りながらおせいは涙ぐ
 まずにはいられなかった。

奥様に釘を打たれて、その夜おせいは食事を取らなかつた。実際喰べたくもなかつた。
 けれども夜中になると、何んとしても我慢ができないほど餓ひもじくなってきた。そつと女
 中部屋を出て、手さぐりで冷えきつた台所に行つて、戸棚を開けた。そしてそこにあるも
 のを盗み喰いをしようとした。

その瞬間におせいはどつと悲しくなつた。そしてそこに体を倚よせかけたまま、両袖を顔
 にあてて声をひそめながら泣きはじめた。

* * *

父が死んだという電報を受け取ったのは、園がおぬいさんの所に教えに行つて、もう根雪になつた雪道を、灯がともつてから白官舎に帰つてきた時だった。

隣りの人見の部屋には柿江と森村とが集つてゐるらしく、話声で賑わつていたが、園はそこを覗いてみる気持にもなれないで、そつと素通りして自分の部屋にはいった。

渡瀬がひどく酔払つて白官舎に訪ねてきた翌日から、どうしてもおぬいさんを教えるのはいやだといひだしたので、そしてしきりに園に教えに行けといつて聴かないので、彼は已むを得ず、一日おきにまたその家に通うようになったのだった。それがもう半力月のあまりも続いてゐた。

幾度も玄関に出てその帰りを待つていたという婆やが、何か不吉の予感らしいものを顔に現わして園にその電報を手渡した時、園も一種の不安を覚えなかつたが、まさかあの頑丈な父が死ぬものとは思つてゐなかつた。文言を読んだ時でも父が死んだようには考えられなかつた。ただ眼の前に自分の家の様子が普段のままな姿で明かに思ひだされただけだつた。

何か変つたことがあつたのではないかと婆やが尋ねるのに対しても、はつきりしたこと

は告げ知らせもしないで、自分の部屋に帰ってきたのだった。

不思議なことには……と園がふと思つたほど……自分の部屋は何んの変化もない自分の部屋だった。机の側には婆やのいけておいてくれた炭火がかすかに光っていた。園はいつものとおり、ドアの蔭になつてゐる釘に、外套と帽子とをかけて、本箱の隅におきつけてあるマツチを手探りに取りだしてラムプに灯をともした。机の上には二三通の手紙がおいであつた。その中の一つは明かに父からの手紙だった。園は坐りも得せず、その手紙を取り上げてみた。たしかに父の手蹟に相違なかつた。ちびた筆で菱縮いしゆくしたように十一月二十三日と日附がしてあつた。それを見るとややあわてたような氣持になつて、衣囊かぶしの中から電報を取りだして、今度はその日附を調べてみた。十一月二十五日午前九時四十分の発信になつてゐた。

園は手紙と電報とを机の上に戻しながら始めて座についた。そしてしばらくは手紙を開封することもなく、人さし指を立てて机の小端こぼを軽く押えるように続けさまにたたきながら、じつと眼の前の壁を見つめていた。自分ながらそれが何んの真似だかよく解らなかつた。しかしながらかねてからある不安なしにはなく考へていたことが、驀地まつしぐらに近づいてきているような一種の心の圧迫を感じ始めているのは明かだった。自分の研究に一いち

頓挫とんざが来そうな気持がしだいに深まつていった。

園は父の手紙をわざと避けて、他の一通を取り上げてみた。それは絶えて久しい幼友だちの一人から送られたもので、園にとつてはこの場合さして興味あるものではなかった。

他の一通は書体で星野から来たものであるのが明かだった。園はせわしく封を破つて、中から細字で書きこまれてある半紙三枚を取りだした。長い手紙であればあるほどその場合の園には便りが多かつた。園は念を入れてその一字一句を読みはじめた。

「皚がい々たる白雪山川を封じ了んぬ。筆端のおのずから稜りょう峭しょうたるまた已やむを得えざるなり」

とそれは書きだしてあつた。

「昨夜二更一匹の狗子窓下に来てしきりに哀啼あいていす。筆硯ひつけんの妨げらるるを悪にくんで窓を開きみれば、一望月光裡いちぼうげつこうりにあり。寒威かんい惨さんとして揺ゆるがず。かの狗子白毛にて黒斑こくはん、惶々こうこう乎とし屋壁に踞きよきよ躑しよくし、四肢を側立て、眼を我に挙げ、耳と尾とを動かして訴えてやまず。その哀々あいあいの状諦觀視じょうしするに堪えず。彼はたして那辺なへんより来れる。思うに村人ことごとく眠り去つて、灯影の漏るるところたまたま我が小屋あるのみ。彼行くに所なくして、あえてこの無一物裡に一物を庶幾しよきし来れるにあらざらんや。庭辺一片の食な

し。かりに彼を屋内に招かば、狂弟の虐殺するところとならんのみ。我れの有するものただ一編の文章のみ。文章は畢、竟彼において何するところぞ。我れついに断じて窓を閉ず。翌、かの狗子命を我が窓下に絶ちぬ。

ああ何んぞ独り狗子を言わんや。自然の物を遇するすべてまきにこのごとし。我が茅屋の中つねにかの狗子にだに如かざるものを絶たず。日夜の哭、嗽聞こえざるに聞こゆ。筆を折つて世とともに濁波を挙げて笑いかつ生きんとしたること幾度なりしを知らざるは、たまたま我が耿々の志少なきを語るものにはすぎずといえども、あるいは少しく兄の憐みを惹くものなきにしもあらじ。しかも古人の蹟を一顧すれば、たちまち慚汗の背に流るるを覚ゆ。貧、窮、病、弱、菲才、双肩を押し来つて、ややもすれば我れをして後えに、瞳若たらしめんとすといえども、我れあえて心裡の牙兵を叱咤して死戦することを恐れじ。『折焚く柴の記と新井白石』はかろうじて稿を了るに近し。試験を終らば兄は帰省せん。もししからば幸いに稿を携え去つて、四宮霜嶺先生に示すの機会を求むるの労を惜しまざれ。先生にして我が平生付度するところのごとくんば、この稿によつて一点靈犀の相通するあるを認めん。我が東上の好機もまたこれによつて光明を見るに至らんやも保しがたし。さらに兄に依、囑しえべくんば、我が小妹のた

めに一顧を惜しまざれ。彼女は我が一家の犠羊ぎようなり。兄の知れるごとく今小樽こすずきにありてつぶさに辛酸しんさんを嘗なめつつあり。もしさらに一二年を放置せば、心身ともに萎靡いびし終らんとす。坐視ざしするに忍びざるものあり。幸いにして東京に良家のあるありて、彼女のために適所を供さば、たんに心身の更生こうせいを僥ぎよう倖こうしうるのみならず、その生しょう得とくの才能を發揮するの機縁に遇いうるやも計るべからず。我が望むところは、彼女が東上して円山氏につき、勤勞に服するのカタワラ、現代的智識の一班に通ずるを得ば、きわめて幸いななり」

園はこれだけのことを読む間にも、幾度も自家の方のありさまを想像していた。想像したというよりは自分がずっと育つてきた東京郊外の田舎じみた景色や、父、母、兄などの面影おもかげやが、見るように現われたり隠れたりしていた。そのために園は星野からの手紙を静かに読み終ることができないで、それを机の上に置いたなりで、細かく書連ねられた達者な字を見入りながら、だんだんと自分の家のことを思い耽ふけりはじめた。

あるかないかに薄い眉の上に、深い横皺を一本たたんで、黒白半ばするほどの髪の毛のまだらに生え残った三分刈りの大きな頭を少し前こごみにして、じろりと横ざまに眼を走らしながら人の顔を見る父の顔……今年の夏休暇の終に見たその時の顔……その時、父と兄

との間にはもう大きな亀裂きれつが入っていて、いつも以上に不機嫌ぜんそくになっていた。兄は病氣の加減もあつたのかことさらに陰鬱いんうつだつた。若いくせに喘息ぜんそくが嵩こそうじて肺氣腫ぜんそくの氣味になつていたが、ややともすると誰にも口をきかないで一日でも二日でも頑固に押し黙つていふようなことがあつた。園に対しては舐なめるような溺できあい愛あいを示すのに引きかえて、兄に對してはことごとくに氣持を悪くしているらしい愛憎の烈しい母が、二人の中に挟はさまつて、二人の間をかえつてかき乱きせるしていた。いらいらしているのが指の先までも伝つていふ様子で、驚くほど烈しく煙管とげつぼうで吐月峰とげつぼうをたたきつけながら、自分のすぐ後ろにある座敷金庫から十円札を二枚取りだし、乞食にでもやるように、それを園の前に抛ほうりだして苦がりきつていた父の顔、それを取り上げるまでに園は自分でも解らぬような複雑した氣持を味わねばならなかつた。園が黙つたままお辞儀一つして、それに手を延ばすまでの一挙一動はもとより、どういう風に氣持が動いているかを厳しく看守しながら、いささかでも父の權威を冒すような風があつたら、そのままにはしておかないぞというように見えた父の顔……自分の生みの父ながら、あの眉の上の深い横皺は園にはこの上なくいやなものだつた。どうかして鏡に向うようなことのあるたびごとに、園は自分の顔にそれが現われではしないかと神経質に注意した。年のせいかな園にはなかつた。しかし兄には明かにそれが

出ていた。そういう父の顔……それが何よりも色濃く園の眼の前を離れなかった。死顔などはどうしても現われては来なかった。父の死んだということが第一不思議なほど信ぜられなかった。毎日葬式や命日というような儀式は見慣れてきてはいたけれども、自分の家から死者の出たのは、園が生まれてから始めてのことなので、よけいそうした感じが起らないのかもしれない。母の顔も平生のとおりの母の顔、兄の顔も今年の夏別れる時に見たままの兄の顔。玄関からなだら上りになった所に、重い瓦を乗せてゆがみかかった寺門がある。その寺門の左に、やや黄になつた葉をつけたまま、高々とそそり立つ名物の「香い桜」。朝の光の中で園がそれを見返つた時、荒くれて黝くろずんだその幹に千社札が一枚斜に貼りつけられてあつて、その上を一匹の毛虫が匍はつていた。そんなことまでが、夏見たままの姿で園の眼の前に髻ほうふつと現われた。

しかもこれらのあまりといえば変化のなさすぎるような心の印イメー象ジの後には、何か忌いまい々ましい動揺まが起ろうとしているように思えた。實際をいうと、園は帰京せずに、札幌で静かに父の死を弔とむらいもし、一家の善後ということも考えてみたかつたのだが「スグカエレ」という電文に背そむくべき何らの理由もなかった。

園は星野の手紙の下から父の手紙を取りだしてみた。封を切ろうとしたが何んのゆえと

もなくそれができなかった。どうもその中からは不意な事件が飛びだしてきて、準備のない園の心に、簡単に片づけることのできない混乱を与えそうでした。園はまた父の手紙を見つめたまま、右手の指で机の木端こばを敲たたきながら長く考えつづけた。

「とにかく今夜すぐ帰ろう」

ふっとそういう考えが断定的にその心に起った。それだけのことを決心するのに何んでもこれほど長く考えねばならなかったかというようなそれは簡単な決心だった。

しかしそう決心すると同時に、園は心臓がきゆうに激しく打ちだして、顔が火照ほてるまでに慌ただしい心持になっていた。彼はそれをいまいましく思いながらもすぐ立ち上つて部屋の中を片づけはじめた。しかしそこには別に片づけるというようなものもなかった。ズツク製の旅鞆に、二枚の着換えを入れて、四冊の書物と日記帳とを加えて、手拭の類を収めると、そのほかにすることについては、鍵のかかるところに鍵をかけて、本箱の上に自分のと別にしてならべてある借用の書物を人見か柿江に頼んで返却してもらえばそれでいいのだった。彼は心の中にわくわくするような気分を持ちながらも、割合に落ち着いた挙止でそれだけの仕事をすませた。そして机の上にあった三通の手紙を洋服の内衣うちかくに大事にしまいこんだ。机の上にはランプとインキ壺と硯箱とのほかに何んにもなか

った。そこで園はもう一度思い落しはないかと考えてみた。欠席届があつた。彼はふたたび机の引出の錠を開けて、半紙を取りだしてそれを書いた。そしてそのついでに星野にあてて一枚の葉書を書いた。

「兄の手紙今夕落手。同時に父死去の電報を受取つたので今夜発ちます。御返事はあとから」

しかし園はそう書いてくると、もう一つ書き添うべき大事なことのあるのに気づいた。それはおぬいさんのことだつた。しかしそれは葉書には書きうるものではなかつた。すべのことを知らせるのはあとからにしよう、そう思いながら園は星野への葉書を破つて屑籠に抛りこんだ。

隣の部屋では人見たちが盛んに笑いながら大きな声で議論めいた話をしている。それに引きかえて、ずっと見廻わしてみた園の部屋は森閑しんかんとして、片づきすぎるほど隅まで片づいていた。それを見ると園は父の死んだという事実をちらつと実感した。何んの意味もなく胸の迫るのを覚えた。しかしそれはすぐ通り過ぎてしまった。

隣の部屋をノックして急な帰京を知らせると、そこに合わせた三人は等しく立ち上つて、少し頓とんきよう狂きやうなほど興奮して園を玄関まで送つてきた。婆やは、食事がもうできるか

ら食べていったらいいだろうと勧めながら、慌あわてて下駄を引っかけ、門の外まで送ってでた。そして袖口を顔に押しあてながら、遠くなるまで見送っていた。

園は鞆一つをぶら下げて、もう十分に踏み固まっている雪道を足早に東に向いて歩いた。肘ひじを押しまげて頭の上から強く打ち下そうとする衝動が、鞆を不必要に前後に揺り動かさした。彼は今夜という今夜、すべてのことをおぬいさんとその母とに申しでようという決心をやすやすとしまつていたのだ。それは東京に帰ろうと決めたと同時に、特別な考慮を廻らさないでも自然にでき上った決心だった。園はもとよりおぬいさんが彼をどう考えているかも知らなかった。その母がどう考えるかも考えてはみなかった。園はただおぬいさんを愛していることをこの十日ほどの間にはつきりと発見したのだ。彼は幾度かできるだけ冷静になって自分の気持を考えてもみ、容赦なく解剖してもみた。しかしそこに何らか軽薄な気持が動いていることを認めることができなかった。渡瀬が酔ったまぎれに「おぬいさんに惚れろ」といい続けた時、園はそういう問題を取り上げる気持は少しもなかったが、その後四五日経ってから、どうした機会だったか、園はふとおぬいさんに対する自分の心持を徹底的に決めておかなければならぬという強い要求を感じ始めた。そのために昼は研究ができず、夜は眠ることのできない三日四日が続いたが、それには何らの焦

燥も苦悩も伴い^{ともな}はしなかった。彼はただ神聖な存在の前に引きだされたような気分で、何事をも偽ることなく心をこめて考えた。そして最後に彼はおぬいさんにこの上なく深い愛と親しみを持つていることをはつきり見出だした。そうなることが園にとってはきわめて自然ないいことだった。この発見は園の心をおかして覚えのない暖かさや快さへと誘いこんだ。ふとその時星野のことを思い浮べてみた。しかしこれはもう園にとっていささかの暗らい影にもなつてはいなかった。すべての良心においてこの上なく深く、この上なく暖かくおぬいさんを愛している、そのすがすがしい満足に障り^{さわ}となるものは一つもなかった。おぬいさんが園を愛していない、その疑いすらも気にはならなかった。実際そうであったところが、園はおそらく平気だつたらうと思われるほど園の心は静かに満ち足つていた。

ただし、残された一つのことは、自分の気持をゆがめずに三隅母子に伝える時機と方法とをつくることだけだった。しかしそれさえ園にとっては格別むずかしいことではなくみえた。父死亡の電報を見た時でも、この場合その問題をどう片づけるかさえ考えはしなかったのだが、欠席届を書き終えた時、保証人なる槍田氏は三隅の小母さんの知り合いだから、通知かたがた三隅家に立ち寄つてその判を貰うように頼もうと思いつくと同時に、自分の心持もそのついでにいつてしまおうと決心したのだ。

園は往來を歩きながら、不思議な力が、徐しずかに、しかしたしかに自分の体じゆうに満ちてくるのを感じた。かつて知らなかった大きな事業、それが成功しようとも失敗しようとも、事業そのものの値打をいささかも傷つけないような大きな事業が、今眼の前に行われようとしているのだ。そしてこの事業に手をつけるについては、はたしてそれに当るだけの力量のあるなしは分らないとしても、あらゆる点において残るところなく考えぬき、しかも露ほどの心の後ろめたさも感じてはいないということにかけて、園の心は小ゆるぎもしなかった。一種の勇氣をもつてその五体は波打った。彼の眼に映る大通りの雪景色は、その広さと潔いさぎよさにおいて彼の心に等しかった。夜の闇が逼せまり近づいて紫がかった雪の平面を、彼は親しみの吐息をもつて果て遠く眺めやった。

さつきのとおり小母さんもおぬいさんも家において、台所で夕食の支度をしているところだった。二人はさつき帰ったばかりの園が、不意にまた訪ずれてきたのを驚きながらも喜ぶように、もつれ合つて入口に走りでた。毎日同じようなことを繰り返しながら、淋しく暮している母子二人にとっては、これほどいささかな不意なことも、これほどに気を引き立たせるのだろう。少なくとも園がこの家で邪魔物あつかいにされていないのを知るのは彼にとつても限りなく快いことだった。

おぬいさんは慌て気味に襷たすきとエプロンとを外ずしながら、茶の間に行ってラムプの芯しんをねじ上げた。その釣りラムプの下には彼の見慣れたチャブ台の上に、小さくめの食器がつつましく準備されていた。小母さんを見、おぬいさんを見、その可憐なチャブ台の上の様を見ると、園の心は思いもかけず小さく激しく沸き立ちはじめた。

「その鞆は」

と小母さんは怪しむように尋ねた。

「今お話します」

園は小母さんの怪訝けげんそうな顔に曖あいまい昧な答えをしながら、美しい楕円の感じのする茶の間に通って、いつもの所に、……柱を背にして倚よりかかるとのできる……胸の動悸どうきを気にしながら坐った。

「どうなすったのです……明りのせいかしらん、……お顔の色がお悪いようですが……」

火鉢のわきに小母さんが、園からずっと離れて茶筆筒ちゃだんすの前におぬいさんが座をしめた時には、園の前にはチャブ台は片づけられていた。園は自分の顔が醜みにくいほど充血しているだろうとばかり信じていたのに、そう小母さんにいわれてみると、手の先までが寒さのためばかりでなく冷えきっているのを感じた。自分の気持をそのまま先方に移すことができ

るだろうか、そういう不安がかすかに動いた。彼はその場になって、かすかにでもそう感ぜねばならぬのが苦しかった。それゆえ彼は已むを得ずますます口少なくなった。何もかも一度に二人に言いきってしまった時に感じるだろう心のすがすがしさと、それを曲つて取られはしないかという不安とが、もどかしく心の中で戦い合った。

いつものとおりの落ち着いたしとやかさでおぬいさんが茶を入れていた。小母さんは茶を飲み終るまでも、大事な問題は延ばしておこうとでもするように、途中が寒かったろうなどと、世間なみの口をきいていた。園は自分の気持が何んとなく小母さんに通じているのだなと思った。長い生活の経験と、親というものの力が美しく働いているらしいのを感じて、その月並な会話にもけつして不快は感じなかった。

園はおぬいさんが進めてくれた茶を静かにすすった。少しそれは熱すぎた。彼は冷えた両手でほとぼりの沁^しみ残った茶碗を握りしめてみた。そこから快い感触が神経の奥に暖かく移っていった。ふと眼を挙げるとそこにおぬいさんの眼があつた。何んの恐れ気もなく、平和に、純潔な、そして園の心におのずと涙ぐましさを誘うような淋しさ、——淋しさではない。淋しさということはできない。淋しさに似てもっと深いもの、いい言葉はない——を籠めた、黒眼がちな眼。慎しみ深い顔の中にその眼だけがほのかにほほえんで、

そこにつぎつぎに開けてゆく世界をより深く眺めようとするように見えた。おぬいさんのその眼があつた。そしてそれがやわらかく、まともに園の方に寒いまでに澄んでしかもこの上なく暖かい光を送っていた。園はその眼を思わずじつと眺めやった。その瞬間に園の覚悟は定まつた。彼は柱から身を起して端坐した。そして臆することなく小母さんの方に面を向けた。口を切ろうとする時、父のことをまずいいだそうとしたが、すぐそれが間違つてゐるのを自分で悟つた。

「こんなことをいうのはまだ早すぎはしないかと思ひますのですけれども、事情がこれ以上躡ちゆうちよ躡ちゆうちよするのを許さないようですから……」

園は両手に握つてゐる茶碗を感じた。そしてその茶碗の中にさらに一杯の茶を欲した。けれども彼は続けた。

「僕は自分としてはこれ以上は考えられないというところまで考えたつもりです。もし失礼に当たら許してくださいませ。僕はおぬいさんとお約束をすることができたらと思うんです……そう願つています」

園はおぬいさんに向つても同じことをいいたかつたのだ。しかしそれを聞きつつあるおぬいさんの苦痛を察すると、どうしてもそちらに眼をやることができなかつた。それにも

かかわらずおぬいさんが処女らしい羞^はじらいのために、深々と顔を伏せたのが痛むほどきびしく園の感覚に伝ってきた。

小母さんは切れ切れな園の言葉を聞くと、思わずはっと胸をつかれたらしく、かすかに口をゆるめて、鋭い色を眼にひらめかしたが、やがて、というほどもなく、園をしげしげと見やりながら黙ったままで深くうなずいてみせた。そしてかすかな血の気をその疲れたような頬に現わした。自分は今答えようにも答えられないから、もつと何んとかいえとその顔は促がしていた。園は何か言おうとした。しかしそこには言うべき何事も残ってはいなかった。それ以上をいうのは冒^{ぼう}流^{りゅう}にすら感じられた。

園と小母さんとは無言のまま互いの眼から離れて下を向いてしまった。ストーヴの中の薪^{まき}がゆるく燃えている。その音だけがしめやかに狭い部屋の中に拡がっていた。

と、おぬいさんが無言のまま立ち上って、間の襖を開けて静かに隣の部屋に去った。小母さんはそのきっかけにおぬいさんに何かいおうとしたらしかなかったが、思い返したか、心許^{もと}なげな眼つきでその後姿を目送したただけで何もいわなかった。

襖が静かに締まった。

園はもう一つ言っておかねばならぬものを思いついた。それゆえふたたび顔を上げて小

母さんを見た。小母さんは園を避けながら、いらだっているような風で火鉢の炭をせせつていた。しかしそれはいらだっているのではなく、少し心の落ち着きを失っているのだということが園にはよく解った。彼は小母さんの引きしまった横顔を見やりながら口を切った。

「僕をはじめこのことをあなただけの所で申しあげようか、おぬいさんだけに聞いていたどうかと迷いました……しかし結局お二人の前で申しあげるのが一番いいとおもいました。……本当は槍田さんにでもお願いするのがいいのかもしれないかもしれませんが……けれども、そう願ひして万一僕の氣持がそのまま現われないようなことがあると……苦しいことだと思つたものですから……どうか僕を信じてくださいまし。僕はどんな御返事をいただいても……それは十分に覚悟しています……」

そういいだしてみると、今度は言っておきたいことが後から後からと無限にあるように感じられた。どこまで行つても果てしがあるとは思われなかった。園は少し自分に惘あきれてまた黙つてしまった。そして氣がついて、手にしていた茶碗を茶ちやく托たくに戻した。

ややしばらく思案しているらしかった小母さんは、きゆうに居住まいをなおして園の方にまともに顔を向けた。

「園さん。おつしやることはいちいち私にもよく解りました。それだけおつしやつてくださるのを私は親として誠にありがたく存じますけれども、娘は不束かふつで、そういうことを考えてみたこともないようでございますし、……もつともゆつくりよく尋ねてはみましようけれども、……それによく考えてみなければならぬことでもございますし、……今夜はそれを伺つておくだけにさせていただきとうございますが……悪くお取りくださいますなよ……あなたのようにそう隠しだてなく言つていただくと、私は嬉しゅうございます、本当に。……どんな仕合せになりましようとも、ぬいもあなたのお志はうれしく存じますでしよう」

小母さんの声は意外にも曇つて震えていた。園はもとより今夜の告白からすぐ結果を望もうとなどはしていなかつたのだ。心の中では、もちろんそんなことを即座に伺おうなどとは思つていませんといいたかつたけれども、それが言葉にはならなかつた。

隣の部屋でおぬいさんが忍び泣きをしている……それを園ははつきり感じた。彼は身の内が氷のように引き締まるのを覚えた。強い緊張のために、肩の凝りきつた時のような感じが体全体に漲みなぎつた。自分の少しばかりの言葉がおぬいさんを泣くほどに苦しめたかと思つと、園は今夜の浅慮せんりよを悔いるような気にもなつた。しかしながらそれはけつして浅慮

ではないと園は思い返した。おぬいさんを本当に愛するなら、おぬいさんの気持に絶対自由を与えなければならぬ。何らかの義務を感じさせておぬいさんを苦しめては忍んでいられない。そういう気持が何よりも先きに立った。

「何んだか僕は自分のしたことが乱暴すぎたかとも思いもします……もしそうでしたら、ごめんください。僕はけつしてどんな結果をも恐れてはいませんから、どうか十分自由なお気持で今までのことをお聞きくださいまし。……僕は今夜きゆうに東京に帰らなければなりません。少し思いがけない不幸に遇いましたから。そのことはいずれ手紙で申しあげます。……それではもう時間がありませんからお暇します。……英語の方をまた休まなければならなくなつて……」

とできるだけ冷静な言葉で言おうとしたが、自分ながら意気地なく声が震えを帯びた。もし事が破れたら、この家にはもう来られないのだ。ふと彼はそう思うと限りなく淋しかった。

園は欠席届書を小母おぼさんに託たくし、不幸というのは父が頓死とんししたのだということを簡単に告げて、座を立つことになった。彼は見納めをするような気持で、きちんと整頓せいとんされたその茶の間を眼早く見まわした。時計の下の柱曆に小母さんとおぬいさんの筆蹟ひっせきがな

らんでいるのも——彼が最初にその家に英語を教えるのを断りに来た時に気がついたものだけに——なつかしかつた。彼は自分のしたことが、思った以上に彼にとって致命的であるのを知つた。

「ぬいさん、園さんがお帰りだからお見送りなさいな。東京の方にお帰りだというから——」

小母さんは立ち上つて園を入口に送りだしながら、奥の方にこう声をかけた。けれどもおぬいさんの出てきそうな様子はなかつた。園はそれがおぬいさんらしいと思つた。そう思ひはしたものの、言いようのない物足らなさが胸の奥底に濃く澱むよどのをどうすることもできなかつた。

園が編上靴はを穿き終つて、外套を着て、もう一度小母さんに簡単な別れの挨拶をして格子戸を開けようとした時、おぬいさんが奥から出てくるのを感じて、彼は思わず後を振り向いた。はたしておぬいさんが小刻みに駈けるようにして母の後ろまで来ると、その蔭よに寄りそつて坐るが早いか頭を下げた。園も黙つて帽子を取つた。その時見えた小母さんの眼には涙がいつぱいたまっていた。

園は格子戸を立ててから、未練だとは思ひながらもちらつとおぬいさんを見た。おぬい

さんは、畳についた両手をしゃんと延ばして寄せ合わせて、肩さえいつもより細々と見えるのに、襟足がのぞかれるまで顔を重く伏せていた。眼上のものに心から詫び入る姿のように。かと思うと死ぬほどの口惜しさをじつと堪らえる形のように。園にはもどかしいほどに、そのいずれであるかがどうしても分らなかつた。

園は歩きながら、我にもなくややともすると、熱い涙が眼に迫るのを感じた。そして振り払うように眼を瞑つて、雪になるらしく曇つた夜の空に、幾度も顔を仰向けねばならなかつた。

思いもかけぬ重い苦痛と疑惑とが、若い心を老いしめると思うほどに押し寄せてきた。彼は自分の腑甲斐なさに呆れるほどだつた。市街のここかしこに立つ老いた榆にれの樹を見るごとに、彼はそれによつて自分の心を励まそうとした。……科学のために一身を献ささげようとするものに何んという不覚なことだ。昔から学者の生活が世の常の立場から見、淋しく暗らいものであるのは知れきつたことだ。それは始めからある誇りをもつて覚悟していたことではなかつたか。誰にも省みられないけれども、春が来るごとに黙つて葉を連ねているあの榆の大樹、あの老木が一度でも分外な涙を流したか。貴様にはまだ文学者じみたセンチメンタリズムが影を潜めてはいないのだ。科学者らしい雄々しさを持って。真理の

前には何事を犠牲ぎせいにしても、微笑していられるだけの熱情を持って。その熱情を誰にも見えない胸の深みに静かに抱いている。おぬいさんを愛するのを止めろというのではない。貴様の愛し方は間違っているとはいえない。その愛がその人の前に明かに表明された以上、貴様の心は朗ほがらに晴れていかねばならぬはずだ。それなのに結果は反対ではないか。何んという愚かな苦しみを喜ぼうとしているのだ。……貴様の科学は今どこに行ってしまったのだ。そんな風に園はむちやくちやに停車場の方に向って歩きながら、自分で自分を鞭むちうつてみた。

そうだったと眼が覚めるように思い上る瞬間もあった。同時に、玄関で別れぎわに見たいたいたしいおぬいさんの姿が、手を延ばせば掴めそうに眼の前にちらついて離れない瞬間もあった。しまいには園は自分を憐みたくさえた。しかもそれが父の死を知ったばかりの悲しみの中にあるべき身でありながら——園はさながら 魍もうりよう 魍もうりようの巢の中を喘ぎ喘ぎ歩いていくもののように歩いた。

停車場には白官舎の書生だけが三人で送りに来ていてくれた。柿江は夜学校の日だというので顔を見せなかった。婆やも来てはいなかった。人見が「東京に行くとおもしろい議会が見られるね。伊藤が政友会を率いてどう元老輩をあやつるかが見ものだよ」といつて

いた。その言葉が特別に園に縁遠い言葉としてかえっていつまでも耳底に残った。

三等車の中央部にあるまん丸な鑄鉄製のストローブは真赤に熱して、そのまわりには遠くから来た旅客がいぎたなく寝そべっていた。八時に札幌を発^たった列車は、雪さえ黒く見えるような闇の中を 驀^{まっしぐら} 地に走りだした。園はストローブからかなり離れた席に腰かけて外套の襟を立てて、黙然として坐っていた。床の上を足を動かすたびに、先客の喰荒らした広東豆（南京豆のこと）の殻が気味悪くつぶれて音をたてた。車内の空気はもとより腐敗しきって、油燈の灯が震動に調子を合わせて明るくなったり暗くなったりした。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集25 有島武郎集」集英社

1968（昭和43）年4月12日発行

※底本の誤記と思われる部分は、角川文庫「星座」と筑摩書房「有島武郎全集 第5巻」中の「星座」を元に修正した。

入力：大野晋

校正：地田尚

2000年5月15日公開

2005年11月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

星座

有島武郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>